e+FICTIONS

SEIKAISHA

本作品は、縦書き表示での閲覧を推奨いたします。横書き表示にした際には、表示が一部くずれる恐れがあります。

ご利用になるブラウザまたはビューワにより、表示が異なることがあります。

ダンガンロンパ霧切 5

北山猛邦

Illustration／小松崎類

星海社

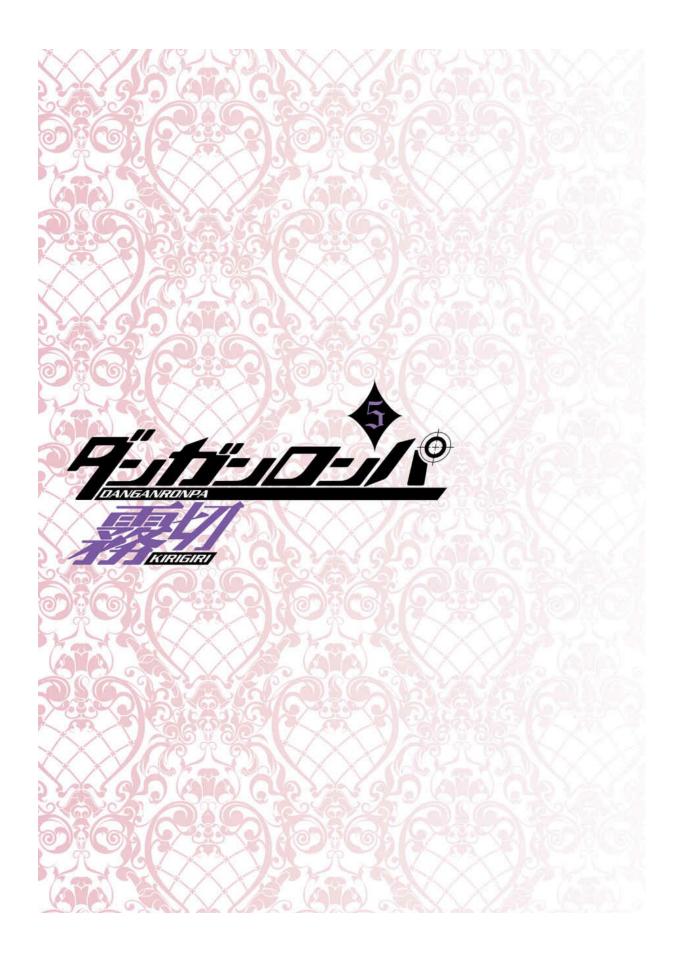
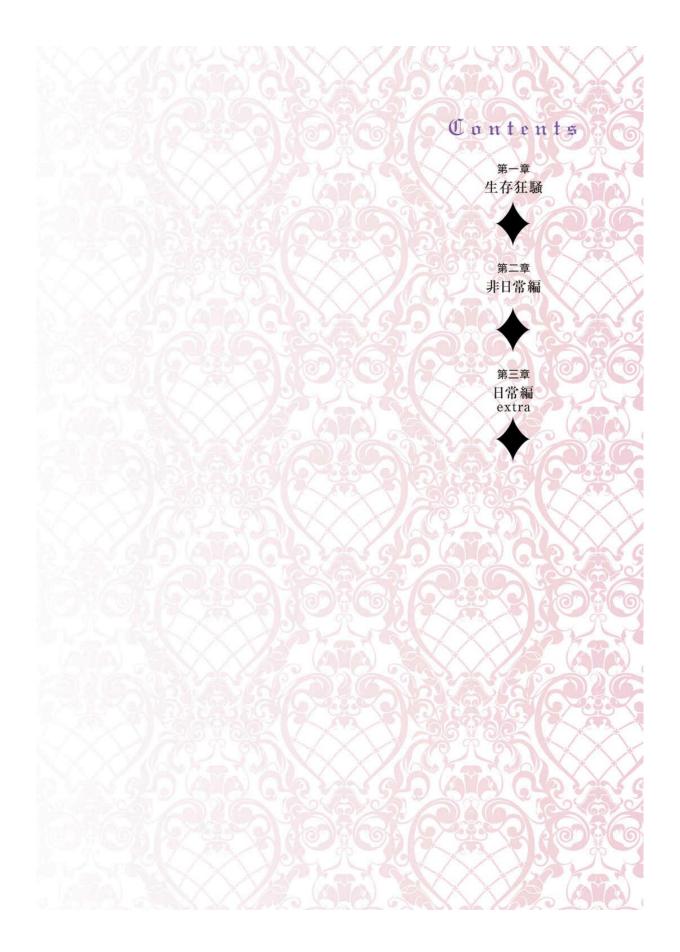
5
ダンガンロンパ
DANGANRONPA
霧切
KIRIGIRI

Contents

第一章
生存狂騒

第二章
非日常編

第三章
日常編
extra

第一章
生存狂騒

リブラ女子学院　――五月雨結

かつての自分と似ている――

犯罪被害者救済委員会の幹部にして、今回の一連の事件をコーディネートしている名探偵龍 造寺月下は、わたしのことをそう評した。

それは探偵としての能力について云ったものではなく、姿勢について云ったものだろう。そもそも『OOO』の探偵とわたしとでは、実力も実績も天と地ほどの差がある。比べるべくもない。

『　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　、
器　　　　　　　　　　』

龍造寺は云う。

悪を許せないという気持ちは、確かにわたしにもある。妹を失ってからずっと強く心に刻み込まれている。

けれどわたしは彼らとは違う。

誰かを救うために、誰かを泣かせることが、はたして正しいことなのだろうか。

『　　　　　　　　　　――　　　　　　　　結　　』

――違う。

それは強者の理論だ。

龍造寺ほど才能に恵まれた人間だからこそ、たどり着いた答えだ。そもそも才能もなく、平凡な日々に生きてきたわたしには到底たどり着くことのできない、ある種の境地だろう。

それでもわたしと彼は似ているというのだろうか？

そんなはずはない。

だからこの戦いは、彼とわたしが同じではないということを証明する戦いでもあるんだ。

龍造寺はそれ以外にも、今回のゲームに様々な意味をもたせているのだろう。わたしが理解している

だけでも複数ある。たとえば御 鏡 霊という正体不明の探偵を暴き出すという目的や、霧切 響 子を現場に引っ張り出すという意図もあった。そして彼らによる『OOO』クラスの抗争という側面もある。勝敗によっては、今後の犯罪被害者救済委員会の行く末を占うものにもなるだろう。

　これがパラレルシンキング＆マルチタスクの天才と呼ばれる安楽椅子伯 爵のやり方だ。

　けれど……複数の傍 流を一本に繋ぐ支流が、何処かにあるような気がしてならない。

　――真の目的。

　はたして龍造寺月下は、このゲームで何を見出すつもりなのだろうか。

　ともかく龍造寺月下に勝つためには、目の前の事件を解決しなければならない。

　わたしは十二の挑戦のうちの一つ、『リブラ女子学院』にいる。

　どうやってここまで来たのかは覚えていない。霧切響子と別れたあと、移動のために電車からバスに乗り継いだところまでは覚えているが、そのあとは不明だ。気づくとわたしは見知らぬ部屋で倒れていて、目の前には黒いフードのマントを羽織った犯人らしき人物がいた。背後にはセーラー服の女子高生らしき屍体。

　黒マントはわたしに気づいて逃げ出し、ある部屋に飛び込んだ。追いかけて、その部屋に入る。すると黒マントの姿は何処にもなく、代わりに棺が二つ並べて置かれていた。

　そのどちらかに黒マントが隠れているのだろうと思ったけど……中に入っていたのは、二人とも被害者と同じセーラー服の女子高生たちだった。両手に手錠、両足に足枷がはめられ、口にはガムテープで封をされていた。

　ストレートの黒髪で、センター分けにカチューシャをつけたおでこ全開の彼女が灘月夜。猫のような目をした、性格のきつそうな子だ。

　そしてもう一人、赤毛でふわふわのボブヘアの子が遠秋津菜砂。こちらは外見的にはおっとりとして穏やかそうな性格。

　二人はクラスメイトらしい。

　彼女たちは何故、棺に入れられていたのか――

　そして黒マントは何処に消えたのか？

「月夜さん」菜砂が話しかける。「この棺に入れられる前のこと、覚えていますか？」

「いや……朝、普通に学校に行こうとして、タクシーに乗ったところまでは覚えてるんだけど……」

「タクシー？　通学にタクシー使ってるの？」

　わたしが尋ねると、彼女は首を横に振る。

「今日はたまたま。いつも使ってるバスが渋滞か何かで遅れていたのよ。待っていたら遅刻しそうだったか

らタクシーを使っただけ」
「私もです」菜砂が云った。「月夜さんとは別の路線バスですけれど、いつもより大幅に遅れているみたいで、バス停に長い行列ができていました。それで仕方なくタクシーに乗ったんです。そして……その辺りから記憶があいまいになっています」
「――ってことは、そのタクシー運転手にここまで連れて来られた可能性が高いな。そもそもバスが遅れているという状況さえ、連中の仕業だったのかもしれない。偽のタクシーに君たちを乗せるためのね」
「そんな……」月夜は青ざめた顔で云う。「なんなの、その『連中』って。誘拐グループか何か？」
「そういう認識でいいと思う」
「なんで私たちを誘拐するの？　私の親がお金持ちだから？」
「お金持ちなの？」
「世間一般からしたらね。でも周りにはもっとお金持ちの子がいるわ。なんでよりによって私なのよ……」
　月夜は今にも泣き出しそうな顔になる。
「殺された竹崎さんも、やっぱりお金持ちの子なの？」
「ええ……たぶん……よく知らないけど」
「竹崎さんはどちらかといえばクラスの下層グループに位置する生徒でした」
　菜砂が横入りして答える。
「ちょっと、ナズ――」
「本当のことでしょう？」
「まあ、そうだけど……」
「実際にクラスの中でも、彼女たちと私たちの間には大きな溝があって、ほとんど交流はない状態でした。ただ、だからといってグループ同士がぶつかり合うことはほとんどなくて、互いに不干 渉の関係だったと思います」
　高校生のグループなら、そういう話は何処にでもあるだろう。それよりわたしが気になったのは、菜砂という子が見た目のおっとりとした印象よりずっと的確にズバズバと発言するたちで、洞察力にも優れていそうな点だ。棺を開けた当初こそ、取り乱した様子を見せていたが、今はかなり落ち着いているようにも見える。
　彼女なら――『黒の挑戦』の犯人役もこなせそうな気がする。
「その竹崎さんについてですが」菜砂が続ける。「彼女が殺されていたというのは本当ですか？」
「うん。この目で実際に見た。血がたくさん出ていたし、脈がないことも調べた。残念だけど……彼女は本当に死んでいたよ」

「信じられません」
「いや、だから……ほら、彼女の生徒手帳も」
「そんなものはいくらでも偽造できます。あるいは竹崎さんこそ、この奇妙な嫌がらせの首謀者であるなら、つじつまが合うような気がします」
「そんなに云うなら、自分の目で見てきたらいい」わたしはやけになって云う。「部屋を出て真っ直ぐ行ったところにあるから——」
「そうしたいところですが、この状態では身動き取れません」
　菜砂は手錠を見せつける。手錠はともかく、足枷は外さないと自由に歩けないだろう。枷の鎖は両足を繋いでいるだけで、棺に固定されているわけではないので、無理すれば歩けそうだけれど。
「そうよ、まずこれをなんとかしなさいよ。早く外して！」
　月夜が騒ぎ出す。
「外せと云われても……鍵がないし」
　わたしは肩を竦めて云う。
　さっき彼女たちの身体を調べた際には、鍵らしいものは見つからなかった。
「それにそう簡単に外すわけにもいかないよ。君たちが犯人なのかもしれないし」
「足の方だけでも外して！」
「いや、だから鍵が……」
「もたもたしてないで捜してきなさいよ。その犯人とやらが鍵を持っているなら、奪ってきて。探偵ならそれくらいできるでしょ？」
「無茶云わないでよ……」
　しかしこのまま押し問答を続けていてもらちが明かない。
　鍵を捜すついでに、他の場所も調べておこうか。
「二人とも、ここで大人しくしていてくれる？」
「大人しくしている以外に何ができるっていうの。早くして。ついでにトイレも探しておいてね。あまり私を我慢させない方がいいわよ」
「わ、わかったから」わたしは部屋の戸を開けてから、振り返る。「もし何かあったら大声で呼んで。ここのドアは開けたままにしておくから」
　二人は肯く。
　彼女たちを部屋に残して大丈夫だろうか……
　もし犯人なら心配する必要もないけれど。

わたしは戸を開けたままにしようとして、取っ手から手を放す。するとスライド式のドアはレールを自動的に滑って、ゆっくりと勝手に閉まってしまった。自動ドアではなく、戸のキャスターにクローザー構造が組み込まれているのだろう。病院などでよく見るタイプだ。戸を全開にして、一番端まで押し込むと、スライドがロックされて開けっ放しにすることができた。

わたしはふと奇妙なことに気づく。

問題はそのクローザー構造ではなく……黒マントがこの部屋に逃げ込む際、戸が開いたままになっていたという点だ。

あらかじめ戸が開けっ放しにされていた？

思い返すと、他の扉もすべて開けたままになっていたような気がする。まるで最初から逃走経路が決まっていたかのようだ。

犯人は最初からこの部屋に来るつもりだったのだろうか。

もう一つ奇妙な点がある。

鍵をかけるためのツマミや鍵穴が何処にも存在しないことだ。

黒マントを追いかけて最初にこの部屋に来た時、鍵をかけられたかのように戸が一時的に開かなくなっていた。しかし扉に鍵は存在していない。

では何故、戸は開かなかったのか。

やはりつっかえ棒が噛まされていた？

戸は室内側にあるレールをスライドするようになっているので、棒か何かをレール上に噛ませれば開かなくさせることはできるだろう。

けれど見たところ、戸の周囲には何も落ちていない。

では黒マントが戸を内側から押さえていた？

その場合、黒マントには隠れる時間がほとんどなくなってしまう……

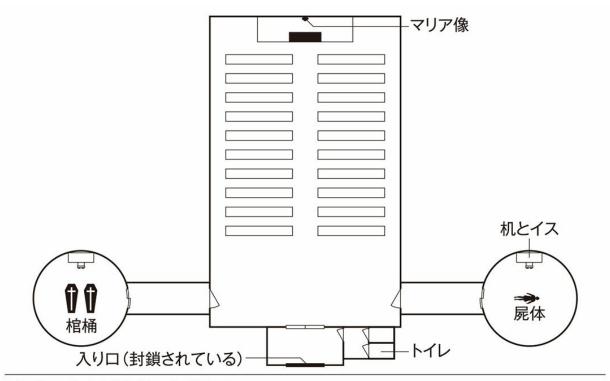
「ちょっとあなた、そんなところで立ち止まって何してるの？」背後から月夜の声が飛んでくる。「早く鍵を捜してきなさいよ」

「あ、うん……」

わたしはとりあえずその問題を置いておくことにして、廊下に出た。

廊下は長さ十メートル程度。幅はあまり広くない。床には絨 毯が敷かれているため、足音は静かだ。壁や天 井は木造で、独特な古い木の匂いがする。窓がないため外の様子は窺えない。

廊下を通り抜け、戸口をくぐる。ここの扉は普通の開き戸だ。思い返すと、黒マントが逃走する際に、ここも開きっ放しになっていたような気がする。

廊下を出ると、そこは広大な礼拝堂だ。室内はひんやりとした石のタイル敷き。礼拝者用の長椅子は全部で二十くらいあり、一つに十人くらい座れそうだ。奥の一段高くなった場所に説教台があり、十字架やマリア像が置かれている。その正面が建物の出入り口のようだ。見たところ礼拝堂内にも窓はない。壁に設置されたランプの白熱球だけが頼りだ。

リブラ女子学院　全体図

わたしはまず出入り口の方へ向かった。
大きな両開きの扉を開けると、エントランスらしき小さな部屋に出た。その先にある扉が、外に繋がっているようだ。けれど分厚い板が張られ、釘で打ちつけられていた。当然、わたしの力では板を外すことはできず、外に出ることはできなかった。
エントランスの横に男女別のトイレがある。とりあえず女子トイレに入って誰もいないことを確認した。奥に窓があったけれど、これも板で封印されていた。
一応、男子トイレも覗いてみる。誰もいない。むしろ誰かいたら悲鳴を上げていたかもしれない。やはり奥の窓は封印されている。
建物の構造がおおよそ把握できた。縦長の広々とした礼拝堂を中心に、左右に渡り廊下が伸び、それぞれの先に円形の部屋が存在する。俯瞰で見ると、建物全体がちょうど十字架の形をしている。これは教会や聖堂などではよく見られる構造だ。
マリア像のある位置を十二時の方向とすると、九時の方向に二つの棺の部屋、三時の方向にわたしが最初に目覚めた部屋がある。六時方向にエントランス。トイレの他には、余分な部屋は存在せず、窓もない。出入り口は完全に封鎖されていると考えていい。
わたしたちは閉じ込められたのだ。

今は何時頃だろう。外の光が見えない。時計もない。でも体感的に一日も経過していないと思う。正午には連絡を取り合うことになっているので、もしわたしと電話が繋がらないとなれば、霧切や他の探偵たちがすぐに駆けつけてくれるはずだ。
いや——最悪の場合、他の探偵たちも同じように閉じ込められているかもしれない。
……霧切ちゃん、大丈夫かな。
事件を解決することにおいては、彼女を心配する必要はないだろう。それよりも、真実を追求するためには犠牲もいとわない姿勢に不安を覚える。彼女がいつか消えていなくなってしまうのではないかという不安感は、それに由来しているのだと思う。
なんとかここを出て、霧切ちゃんと一緒に寮に帰るんだ。
早く事件を解決しなきゃ。
犯人は間違いなく、この閉ざされた建物のこちら側にいる。
あの黒マントは夢でも幻でもない。
現実だ。
けれどあいつは出入り口のない密室から消えてしまった。

やはり棺に入っていた二人のうちどちらかが犯人なのか——
ん？
ちょっと待てよ。
わたしは二人の女子高生から手に入れた生徒手帳を確認する。
よく見ると誕生日も書かれていた。

月1　　　　　　　　月30
　　　　　　　　　　月21

確か霧切はわたしと別れ際に『天秤座に気をつけて』と云っていた。どういう理屈なのか聞きそびれてしまったけれど、犯人は天秤座の可能性があるらしい。
電車で移動している最中に、天秤座の誕生日の範囲については調べておいた。通常であれば九月二十四日から十月二十三日生まれがそうだ。
月夜も菜砂も天秤座ではない——
霧切の云う『犯人の可能性』がどの程度的確なのかはわからないけれど、彼女がわざわざ忠告するくらいだから、無視はできない。
二人は犯人ではない？
それとも誕生日を調べられることを見越して、生徒手帳を偽造したのか？　それなら手帳そのものを最初から持ち込まなければいいような気もするけれど……
ちなみに被害者の竹崎花も天秤座ではない。生徒手帳で確認できた。
月夜も菜砂も犯人でないのなら、あの黒マントは何処に消えたのだろう？
わたしは考え込みながら、礼拝堂へと戻る。
並べられた長椅子の間を抜けて、奥の説教台へ向かった。気になって台の裏側を覗いてみたけれど、誰も隠れていなかった。人が隠れられそうな場所は他にない。
マリア像を見上げる。石膏像だろうか。大きさは子供と同じくらい。わたしの胸の高さくらいの場所に置かれている。十字架はさらにその上の壁に掲げられている。
よく見ると、マリア像が銀色に光るペンダントを身に着けていた。
装飾されているマリア様なんて珍しい。
さらに近づいて見てみると、それはペンダントではなく、チェーンに通された小さな鍵であることがわかった。

鍵――？

まさか手錠の鍵じゃないよね？

わたしはマリア像の載っている台によじ登って、鍵を取ろうとした。けれどチェーンが外れない。頭の方から抜き取ろうとしても、輪が小さすぎて、顎の部分に引っかかってしまう。

だめだ。二人をここに呼んできた方が早い。

いや、それも無理か。ここまで連れてくるのはいいとして、頭上にある鍵を使うのは難しい。まして足枷の鍵だとしたらなおさら……

石膏像の首をへし折って、鍵を回収する？

そんな罰あたりなことできるはずがない。マリア様は普段、わたしの通う学校でも生徒たちを見守ってくれている。破壊することは心理的に不可能だ。

見たところマリア像の足元は、台座と一体になってはおらず、持ち上げて移動することができそうだった。

さっきの部屋まで運ぶしかないか……

わたしは周囲を見回す。

礼拝堂の隅に、キャスターのついた荷台があった。取っ手がついていて、重い荷物を押して運べるようなやつだ。

ちょうどいい！

わたしはキャスターを転がしてマリア像の下まで移動させた。次に台座の上に乗って、マリア像を抱えるようにして、そっと荷台の上に下ろす。像の重さは二、三十キロはあるのではないだろうか。江戸川乱歩の小説なら、この石膏像の中には屍体が入っているところだけど、たぶん今回それはない。その場合はもっと重たくなっているだろう。

どうにか荷台の上に載せると、荷台をステージ上から下ろし、棺のある部屋まで押して移動する。

廊下を抜け、開いたままの戸口から室内を窺う。

「鍵を見つけたよ」

戸口からは、棺が並んでいるのが見えたが、そこに月夜と菜砂の姿が見当たらなかった。

「あれ？」

わたしは荷台を押しながら部屋に入る。

その時、横から何かがわたしの身体にぶつかってきた。

わたしはその勢いに押されて、横ざまに床に倒れる。

そこへさらに何かが覆い被さる。

「ナズ、今よ！　こいつから鍵を奪って！」
　月夜だ。彼女はわたしの身体の上に倒れ込むようにして、わたしを押さえつけていた。
　戸口に菜砂が立っている。手と足の枷ははめられたままだ。
「ごめんなさい、こうするしかなかったんです」
　彼女はわたしの横に屈み込んで、手錠をしたままの手でわたしの服やポケットを漁った。
「あら……？」
「どうしたの、ナズ。早く鍵を」
「ないみたいです」
「ない？　こいつ、嘘をついたのね」
「嘘じゃない」わたしは呻くように云う。「こんなことしなくたって、ちゃんと鍵を渡すよ！」
「ごちゃごちゃとうるさいわよ！　誘拐犯！」
「誘拐犯なんかじゃない！」それはこの世でもっとも一緒にされたくない名詞だ。「わたしは探偵だっ」
　ありったけの力で月夜を押しのけて、わたしは立ち上がる。
　月夜は急に怯えたように首を竦めてわたしを見上げた。菜砂も困ったような表情で床にひざまずいている。
　わたしはコートの裾を払いながら、襟元を直す。
　頭を冷やすように、大きく息を吸い込んで、吐き出した。
「わたしの名前は五月雨結。まだ云ってなかったよね？　二人ともわたしを信じられないかもしれないけど……正直に云えば、わたしもまだ君たちを怪しんでいる。その点に関してはおあいこってことで、とりあえず今は休戦しよう。いい？」
　二人は黙ったまま肯く。
　わたしは荷台に載せたマリア像を示した。
「鍵はここ。マリア様の首にかかってる。外せないからそれごと持ってきた。鍵が合うかどうかわからないけど、試してみる価値はあると思う」
　わたしは荷台を動かして、月夜の傍に像を運んだ。彼女は両足を横に投げだすようにして座ったまま、両手を前に差し出す。
「手錠が外れても、さっきみたいに暴れないでよ？」
「……わかってるわよ」
　マリア様の首に手錠を近づけて、鍵を鍵穴に差し込んだ。
　鍵が回る。

手錠は音を立てて外れた。
「当たりだ」
「神に感謝いたします」
月夜は胸で十字を切る。
「ついでに足枷の方も試してみよう」
彼女の両足をマリア像の横で持ち上げて、足枷の鍵穴に鍵を差す。
するとこちらも簡単に外れた。
「よかった。両方とも鍵は一緒だ。マスターキーみたいなものなのかな」
「ナズ、今度はあなたの番よ」
あとは月夜に任せる。
間もなく菜砂も枷から解放された。
二人は嬉しそうにしばらくの間抱き合っていた。
「さっき建物の中をざっと調べてみたけど、入り口も窓も封鎖されていて、簡単には外に出られそうになかった。どうやらわたしたちは閉じ込められているみたい」
「冗談じゃないわ。今日はバイオリンのレッスンがあるのに……」月夜はぶつぶつと云いながら制服のポケットを探る。「ケータイがない」
「私もです」
菜砂が云う。
「連絡手段も絶たれているみたいだね」わたしは腰に手を当てて云う。「犯人がわたしたちを閉じ込めているということは、まだ事件は終わっていないということかもしれない」
「ど、どういうことよ？」
「誰かがまた殺される」
「誰かって……」
月夜と菜砂は青ざめた顔で向き合う。
「その前にこの建物から出なきゃ。予告された殺人は、指定の場所でしか成立しないトリックが用いられることがほとんどだ。だから建物から出てしまえば、たぶん殺人も成立しない」
「でも……扉も窓も封鎖されているんでしょう？」
「一人で突破するのは無理かもしれないけど、三人で協力すれば、なんとか壊して外に出られるかもしれない。どう？　一緒にやってみない？」
「そうね……お互いにいがみ合っていても建設的じゃないわね。ナズはどう思う？」

「賛成です」菜砂はセーラー服のリボンを直しながら云う。「ただ、その前に一つ確認させてください」
「何？」
「竹崎さんは本当に殺されていたのですか？」
「うん……残念ながら」
「確認させてください」
「ちょっと、ナズ、そんなのいいじゃない別に。屍体なんか見たくないわよ」
「ほとんど交流がなかったとはいっても、竹崎さんはクラスメイトです。放っておくわけにはいきません」
「ううん……」月夜は腕組みして唸る。「まあ仕方ないわ、ナズがそう云うなら」
「わかった。わたしも改めて事件現場を確認しておきたいし、彼女のところへ行こう」
　わたしは二人を引き連れて、部屋を出た。戸が勝手に閉まる。わたしたちは廊下を移動し、礼拝堂へと入った。
　月夜と菜砂が感嘆の声を上げる。
「教会かしら？　それとも礼拝堂？」
「この場所に見覚えはある？」
　尋ねると、二人とも首を横に振った。
「うちの学校にある礼拝堂よりずっと古いわね。えっと……なんていう名前だったかしら、ここ」
「『リブラ女子学院』――十七年前に廃校になったミッション系の学校みたい」
「生まれる前の話だわ」
「そのわりに汚れていませんね」菜砂が云う。「十七年も廃墟だったというのに……」
「殺人の予告状を出した連中が、事件の舞台として使うために整備しているんだ」
「へえ……恐ろしい組織ね」
　月夜は他人事のように云う。
　わたしたちは礼拝堂を横切り、廊下へと続く扉を開けた。そこからさらに正面に見える扉の先が、わたしの目覚めた部屋であり、屍体の置かれている部屋だ。
「ところで二人とも、棺に入っている間に何か物音を聞かなかった？　誰かが部屋に入ってくる音とか……」
「聞いたような気がするけど、たぶんあなたの足音でしょう？　そのあと聞こえてきたのは、あなたがなんか口汚く罵ってる声だったもの」
「わたしが棺を開ける直前まで気絶していたの？」
「ええ。ナズは？」

「そうですね……高いところから落ちるような感覚で目が覚めて……月夜さんと同じように、棺の周りを動き回る人の気配を感じました。それから五月雨さんの声が聞こえてきて、しばらくしたら棺を開けられたのです」
「わたし以外に、部屋に誰かが入ってきた気配はなかった？」
「……わかりません」
　菜砂は目を伏せて首を振る。無理もないか。彼女たちがもし本当に事件に巻き込まれた被害者なら、意識を失わされた状態で棺に入れられていたのだから。何が起こっているのかすぐには理解することもできなかっただろう。
「さあ、着いたよ。ここに竹崎さんの遺体がある」
　わたしは戸に手をかける。
　こちらのドアも、さっきの部屋とそっくり同じ構造だった。部屋が円形だから、それに合わせた曲面のスライドドアになっているのかもしれない。
　ゆっくり開ける。
　ん？
　何かがおかしい。
　少しずつ部屋の様子が見えてくるにつれて、自分でも抑えられないほど呼吸が速くなっていることに気づいた。頭で理解するより先に、恐ろしいほどの違和感を無意識に感じ取っていたのかもしれない。
　戸が開け放たれ、円形の部屋のすべてが見渡せるようになる。
　そこに屍体など存在しなかった。
「え？　えっ？　どういうこと？」
　わたしは部屋に飛び込んで、屍体が横たわっていたはずの場所に屈み、絨毯を調べる。けれど血痕どころか、血を拭ったような跡さえない。
「確かにここに屍体が……」
「あなた……大丈夫？」
　月夜と菜砂がわたしに近づき、怪訝そうに覗き込む。彼女たちの顔には、憐れみさえ窺えた。
　わたしはめまいを感じて、思わず顔を伏せる。
　気分が悪い。あまりの異常事態に頭がついていかなくなったせいだろうか。
「ちょっと、どうしたの」
「ごめん……自分でも何がなんだかわからない」
「竹崎さんの屍体がここにあったのに、消えてしまったということですか？」菜砂は部屋を見回しながら云

う。「痕跡さえ残さず？」
「たぶん……」
「本当に屍体なんてあったの？」
　月夜はますます疑うような目でわたしを見る。
「本当なんだ――あ、そうだ、彼女の生徒手帳！」わたしは思い出してポケットから取り出す。「間違いなくこの子がそこで死んでいたんだ。間違いなく！」
「犯人が戻ってきて屍体を何処かに隠したということでしょうか」
　菜砂は考え込むように唇を指先でなぞりながら云う。
「そうとしか考えられない」
「それなら私と月夜さんの疑惑は晴れましたね。もし私たちのどちらか、あるいはどちらとも犯人だったとしたら、屍体を移動させる際に、探偵さんと鉢合わせしていたはずです。それ以前に……両手両足を拘束された状態では、屍体を移動させることなんてできませんけれど」
「そうよね。まったくもって私たちは犯人じゃないわ。というか……そもそも殺人事件なんて本当にあったのかしら？」
　二人は勝ち誇ったような笑みを浮かべる。
　犯人はわたしがトイレを調べている時にでも、この部屋に忍び込み、屍体を移動させたのだろうか。
　何故わざわざそんなことを？
　仮に屍体を移動させたとして、何処に運んだのだろう。隠し場所はトイレくらいしかなさそうだけど、わたしの目をかいくぐって屍体を運ぶことができただろうか。
　わからない！
「この件はあとで考える！　今はとりあえず、外に出ることを考えよう」
「そうね。早く帰らないとレッスンに遅れてしまうわ」
　月夜は鼻歌交じりに取っ手に指をかける。あまり事態の深刻さがわかっていないらしい。まだたちの悪い嫌がらせかイタズラ程度にしか考えていないのだろうか。
　彼女は部屋を出ようとして、固まってしまった。
「どうしたんですか？　月夜さん」
　菜砂が駆け寄る。
「……開かない」
　月夜は必死に戸を引こうとするが、まったく動かない。菜砂が代わって取っ手に指をかけたが、やはり開かなかった。

だんだんと二人の表情が曇っていく。
「さっき向こうの部屋でも一時的にドアが開かなくなることがあったんだ。開けるのにコツがいるのかも」
　今度はわたしが取っ手に指をかける。
　どうやっても、びくともしなかった。
「閉じ込められた……」
　わたしたちは顔を見合わせる。
「う、嘘でしょ？　こんなテレビもケータイもないところに？」月夜は愕然とした様子で云う。「あ、まだトイレ行ってない！」
「下手したらずっとこのままかも……」
「ずっと？　ずっとってどれくらい？」
「最悪の場合……あと六日くらい」
　他の探偵たちが誰もわたしを助けに来てくれず、犯人が『黒の挑戦』のタイムオーバーを狙っているとしたら、それくらいは覚悟しなければならないかもしれない。
「嫌よ！　六日もこのままなんて、死んじゃう！」月夜は焦ったように扉を叩く。「せめて水と食料を持ってきて！　でも硬水はやめて！　軟水のミネラルウォーターにして！　あとその前にトイレに行かせて！」
「どうして開かないのでしょうか」菜砂は扉を観察しながら云う。「鍵もないのに……」
　ドアに鍵がないという点では、さっきの棺の部屋と一緒だ。ただし今回は室内にいるのに戸が開かない。
「あれ？」わたしは異変に気づく。「このドア……おかしくない？」
「おかしいって何がよ」
　月夜が刺々しく尋ねる。
「さっきの部屋は、室内側に戸をスライドさせるレールがあったんだ。だから室内でつっかえ棒を嚙ませれば、外からは開けられないなって思ったんだけど……この部屋の戸は室内側にレールがない。だから廊下側でつっかえ棒を嚙ませられたら、開かなくなる可能性がある」
「じゃあ私たちが部屋に入ったのを見計らって、マント姿のヘンタイがつっかえ棒したってこと？」
「たぶん……」
　犯人はわたしたちを閉じ込めて何をするつもりだ？
　完全に犯人の術中にはまっている。おそらくここまではすべて計画通り、探偵役を手玉に取っている状態だろう。
　つくづく自分が情けなくなる。

やはりわたしは一人では何もできないのだろうか。
霧切ちゃんなら、こういう時どうするだろう。
彼女はいつだって先の手を考えている。
そして真実を追求する足を止めることはない。
そう、彼女は目の前の事件から目を逸らしたりはしない——
諦めちゃだめだ。
立って前に進まなきゃ。
「何かの仕掛けが働いているとしか思えない」わたしは扉から離れて、周囲を見回す。「もしかしたら、わたしたちが閉じ込められたことは、屍体が消えたことと無関係じゃないかもしれない。きっとわたしたちの気づいていない秘密が隠されているんだ」
「秘密？」
月夜と菜砂は同時にわたしを振り返って尋ねる。
わたしは肯く。
「この密室の謎、絶対に解き明かしてみせる」
自分にそう云い聞かせるように——そしてその声が犯人にも届くように——わたしは宣言した。

ＢＡＲ『グッドバイ』　――八鬼弾

　三十年ほど前からゆるやかに衰退し、いまや開いている店の方が珍しい商店街のシャッター通り。その入り口から右手に見える店を数えて、七軒目と八軒目の間。そこに人が一人やっと通れるくらいの細い抜け道がある。

　その道に入って、左、右、左と進むと、『黒井医院』の看板が見えてくるだろう。看板の真下にある古ぼけた扉が、BAR『グッドバイ』の入り口だ。

　店は何度も開店と閉店を繰り返し、そのたびに経営者も店の名前も、スタイルも変わってきた。コーヒーにこだわった純喫茶から、カラオケと女の子を取り揃えたスナック。違法賭博をする雀 荘やダーツバーになっていたこともあるらしい。

　最後にこの場所に入っていた店の名は『グッドバイ』という。終わりにふさわしい名前だ。物静かなバーテンダーが色とりどりのカクテルを用意してくれる雰囲気のいい店だった。バーテンダーが今何処でどうしているのかは記録に残っていない。『グッドバイ』に関しては、特に違法性はなかったようだ。

　閉店したあとは、街のチンピラやヤクザ者が秘密の商売をするアジトとしてひそかに利用されてきた。街の人間たちからは、取り壊しを望む声も上がっていたが、そのシャッター通りには取り壊すべき建物が他に山ほどあり、行政も頭を悩ませていたに違いない。しかし最近では、チンピラやホームレスでさえこの場所に近づかなくなっているという。もはやその場所への行き方を知っている人間がいなくなってしまったのかもしれない。

　八鬼弾は他の探偵たちと別れてから、半日で『グッドバイ』に関する情報を手に入れた。その場所で違法賭博が行なわれていたという過去が、八鬼の情報網に巧く引っかかった。

　一月十一日、時刻は午後十時過ぎ――

　八鬼は二人の男を引き連れて、タクシーで『グッドバイ』を目指していた。

「急に呼び出してわりいな、大葉」

　八鬼は隣に座る若い男に話しかける。男はキャップを後ろ向きに被り、派手なTシャツにダウンジャケット一枚という格好だった。名を大葉良という。八鬼とはコンビを組んで賭場を荒らし回ったこともある間柄だ。『グッドバイ』の場所を突き止めたのも彼である。

「いやあ、兄貴の役に立てて光栄ですよ。このへんは俺の地元なんで、すぐにわかりました。そんで――今回のエモノはなんですか？」

「ちげーよ、今回はギャンブルじゃねえ」

「なんだ、また兄貴と一暴れできるかと思ってワクワクしてたのに。世知辛いっすねえ」
「お前、もうギャンブルからは足洗ったんじゃねえのか？」
「ええ、そりゃあ、子供も生まれましたしね。それにギャンブルはこりごりです。運に支配されてる世界なら、俺みたいに家柄も悪い、学もねえバカでものし上がれると思ってたんすけどね……そういう世界じゃ逆に、年の離れたガキにボコボコにされることもあるってこと、思い知らされましたから……」
「まさかおめー、謎のゴスロリ少女に巻き上げられたって噂、マジだったのかよ」
「噂も何も、あれは本当の話ですよ」
「情けねえな、オレだったら五秒でひねり潰しちまうけどな。何処にいるんだよ、そのガキは」
「知りませんよ。ふらっと現れて、ふらっといなくなってしまったんですから」大葉はおおげさに嘆息しながら云った。「そんなことより、『グッドバイ』で何があるんです？　カモれるんなら、俺にも手伝わせてくださいよ」
「そういう魂胆か。勘違いすんなよ、今回は殺人事件だ」
「殺人事件……？」
「そういうことだ。オレも専門外。情報だけ集めて来いとさ」
「探偵ってのも、大変ですねえ」
　大葉は急に興味をなくしたように、キャップの位置を直しながらシートに沈み込んだ。
「もうすぐ着きますよ」
　助手席の男が振り返って云う。
　男のスーツの胸ポケットには不動産チェーン店のネームバッジがつけられている。洗 群三。彼の勤める不動産屋では商店街の多くの空き店舗を管理している。
　八鬼は探偵活動において違法な手段を取ることもいとわないたちだが、今回は正攻法を選択した。『グッドバイ』に踏み込むにあたって、建物の管理会社を呼んだのだ。普段なら鍵をぶち壊して侵入しているところだが、今回はボランティアみたいなものなので、わざわざ危険な橋を渡る必要がない。
「ところで大葉」
「はい？」
「お前、誕生日いつだっけ？」
「なんすか？　なんかくれるんですか？」
「いいから教えろ」

「ふうん。おっさん、あんたは？」
　八鬼はついでに助手席の洗に尋ねた。
「えっ？　私ですか？」

１１月

「占いにでもはまってるんですか？　兄貴」
「馬券を買う時の参考にでもしようかと思って。ツイてる数字を探してんだよ」
　八鬼は適当にごまかす。
「俺のを参考にして当たったら、一割くださいよ！」
「相変わらずせこいなお前は」
　気づくとタクシーが止まっていた。
　八鬼と大葉と洗の三人は商店街の入り口でタクシーを降りる。
　ひと気のない細い道の両側にシャッターの壁が立ち並ぶ。まるで迷宮だ。奥に見える暗がりには、きっと人ではない何かがひそんでいるのだろう。
　外灯の下で、洗が地図を広げる。
「うーん……実のところ、私は最近この地区の担当になったので、店の場所をよく把握していないのですが……」
「鍵さえ貸してくれればいいよ。あんたはここで待ってな」
　大葉が鍵を催促する。
「いや、そういうわけにも──」
　その時、携帯電話の着信音が鳴った。
　全員が自分のポケットを探ったが、鳴っていたのは洗の携帯電話だった。
「ちょっと失礼」洗は一言断ってから着信ボタンを押す。「はい、そうです。ええ……」
　洗が携帯電話で話している横で、八鬼は焦れたようにポケットから煙草を取り出してくわえた。火はつけない。禁煙を始めて一年ほどになる。ある日ふと、煙とともに運気を吐き出しているような気がして、それ以来煙草を吸うのをやめた。馬鹿げた迷信だが、ギャンブルの世界ではもっと不可解な迷信に囚われる者も少なくない。
「あの……少しお電話が遠いみたいなのですが……『グッドバイ』ですか？　はい、確かにそういう店が

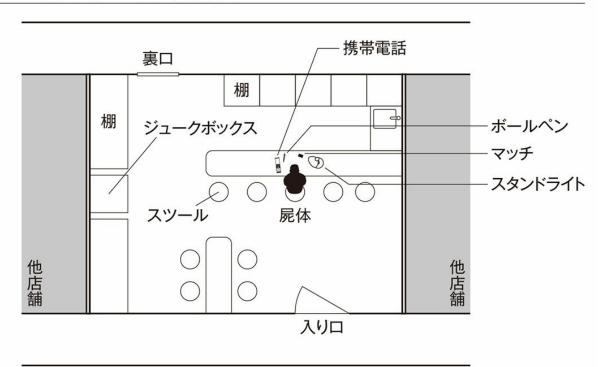
あったそうですが……」
　洗の話し声が聞こえてくる。
　八鬼と大葉は顔を見合わせた。
「今あいつ『グッドバイ』がどうとか云ってなかったか？」
「云ってましたね」
「おい、なんの電話だ？　それ」八鬼は洗に詰め寄った。「誰からだ？」
「いえ、それが要領を得なくて……」
「ちょっと貸せ」八鬼は携帯電話を奪った。「あー、もしもし。電話代わりました。で、誰だテメー」
『助けてくれ……』
　電話の向こうから不気味な声が聞こえてくる。
　まるで幽霊の呻き声のようだ。
「あ？」
『腕を縛られている……身動きが取れない』
「何云ってんだ、おい」
『足も縛られている……監禁されているみたいだ』
「監禁？」
　八鬼は一度携帯電話を耳から離して、ディスプレイ表示を確認する。しかし『非通知』とあるだけで、相手の番号もわからない。声の感じからして、ある程度年齢のいった男性だ。
「おい、お前、何処かに監禁されてんのか？　どうしてこのケータイにかけてきた？」
『目の前にケータイが……１１０番しようとしたがボタンが反応しない……通話ボタンを押したら繋がった……頼む……警察を呼んでくれ……』
　聞き取りづらい掠れ声だ。
「今何処にいる？」
『マッチに……BAR「グッドバイ」と書かれている……』
　八鬼の頭の中で、点と点が繋がる。
　ナントカ委員会が『グッドバイ』で殺人事件を起こすことはすでに予告されている。するとこの電話の相手は、組織の標的とされた被害者なのではないだろうか。
　そう――ゲームが始まったのだ。
「今から行くから待ってろよ！」八鬼は振り返って大葉に目配せする。「店に案内しろ、早く！」
「は、はいっ、こっちです」

大葉は走り出した。
「お前も来い！」
　八鬼は洗に手招きする。洗は戸惑いつつも八鬼たちのあとに続いた。
「おい、聞こえてるか？」八鬼はケータイに向かって声を上げる。「電話を切るなよ、そのままにしておけ！」
　大葉の先導に従い、迷路のような道を走る。
　裏路地は表の通りよりもいっそう暗く、建物の壁に伝う配管が得体の知れない植物に見えて不気味だった。そこはもう迷宮というより、夜のジャングルだ。何も知らずに迷い込めば、二度と帰れないかもしれない。
　八鬼は大葉について行きながら、自分の携帯電話で１１０番にかけた。できることなら警察とは関わり合いになりたくないが、電話の相手が頼んでいる以上やむをえない。もし通報を怠れば、あとで自分の立場が悪くなるのは目に見えている。
　とりあえず商店街でＳＯＳを求めている男がいるという説明をして電話を切る。警察はおそらく首を傾げていることだろう。
　大葉が足を止める。
「ここです」
　何処から何処までが一軒の建物なのかわからないような中途半端な場所に、その扉はあった。なんの装飾もない真っ黒な扉で、暗がりの中にあってなお暗く、周囲の物音さえ吸い込んでいるかのような静謐さに満ちていた。
　八鬼はためらわずにドアノブを回す。
　しかし扉は鍵がかかっていて開かない。
「おい、聞こえるか？」
　扉を乱暴に叩きながら、大声を上げる。
『ドアを叩いてるのはあんたか？　どうしてこんなに早く……？』
　電話の相手から反応があった。
「細かいことは気にするな。無事か？」
『ああ……今のところ身動きが取れないこと以外は大丈夫そうだ』
　電話の相手は意識が覚醒しつつあるのか、ろれつが回らなかった言葉もだいぶ回復していた。
　どうやら組織よりも一手早く行動できたようだ。あの顔色の悪いガキんちょ探偵は犯人を深追いするなと云っていたが、事件を未然に防いでしまえば問題ない。八鬼はこの時すでにＭＶＰ賞を確信してい

た。
「今扉を開けるから待ってろ。鍵！」
　八鬼は振り返って洗を呼ぶ。
　洗はポケットから鍵束を取り出した。リングに無数の鍵が取り付けられている。鍵にはそれぞれ番号が振ってあるが、その中から『グッドバイ』の鍵を捜し出すのは骨が折れそうだった。
「あらかじめ用意しとけよ、ったく使えねーな」
「すみません……ええと、ええと」洗は急かされてますます慌て出す。「あった！　たぶんこれです」
　八鬼が横からその鍵を奪い、鍵穴に差し込んだ。
　鍵が回る。
　どうやら正解のようだ。
　扉を押し開け、真っ先に八鬼が中に飛び込む。
「うっ……うぐっ……」
　何処からか、くぐもった呻き声が聞こえてきた。
　電話の相手に違いない。
　しかし室内は真っ暗でほとんど何も見えない。それは長い時間をかけてそこに淀んでいた闇であり、その濃さに息苦しさを覚えるほどだった。
　唯一、室内の奥にぼんやりと小さな光が灯っているのが見えた。カウンターの上のスタンドライトだろうか。明度を下げているのか、ひどく頼りない光だ。
「うっ……うう……」
　その光の横に男が伏せっている。
　近づくにつれ、異様な状況が徐々に見えてきた。
　男は茶色のスーツを着た老人で、スツールに座り、前のめりにカウンターに突っ伏していた。両腕はカウンターの下で揃えて縛られ、スツールの支柱にロープで結び付けられている。そのため身体を起こすこともできなかったようだ。また両脚も縛られていた。
「大丈夫か？　おい……」
　八鬼は男の肩に手を触れようとして、思わず息を呑んだ。
　男の背中にナイフが突き立てられている。
　男は身体を小刻みに震わせていた。まだ生きている。当然だ、今まで電話で会話していたのだから。つまり男はたった今刺されたばかりだ。
「兄貴、どうしたんです？」

「わかんねーよ！　とにかく人が刺されてる！」
「えっ」
　大葉と洗が恐る恐るカウンターに近づく。
　八鬼はカウンターに突っ伏している男の首筋に触れた。まだ温かい。脈もある。
「救急車を呼べ！　まだ助かるかもしれねえ」
「は、はいっ」
　大葉はダウンジャケットのポケットから携帯電話を取り出す。慌てた様子でボタンを押し始めた。
　八鬼は用心深くカウンターを覗き込む。
　カウンターのスタンドライトが、その光の中に三つのものを照らし出している。
　一つ目は古ぼけたマッチ箱。その表面には『BAR「グッドバイ」』と書かれている。住所や電話番号も記されていた。電話で男が見たと云っていたのはこれだろう。
　二つ目は折り畳み式の携帯電話。開かれた状態で、液晶画面を上に向けている。現在も通話中の状態だ。八鬼は指紋をつけないように、ティッシュでそれを包むようにして手に取った。
　その携帯電話に話しかけると、さっき洗から受け取った携帯電話から自分の声がわずかに遅れて聞こえてきた。間違いなく二つの携帯電話は繋がっている。一方の通話を切ると、もう一方も切れた。
　そして三つ目はなんの変哲もないボールペン。キャップがついたままだ。
「おっさん、ここの電気つけられねーのか？」
　八鬼は洗に尋ねた。
「は、はい……もうずっと前から電気会社との契約は切れています」
「懐中電灯持ってねえか？　持ってるわけねえか」八鬼は独り言のように云いながら、カウンターの男に呼び掛ける。「死ぬんじゃねーぞ、じいさん！　もうすぐ救急車が来るからな！」
「兄貴……この状況やべえっすよ。まるで俺たちがやっちまったみたいじゃねえっすか」
「び、びびってんじゃねーよ！」
「子供できたばっかりなのに、牢屋に入るなんてシャレになってねーっす！　パパは塀の向こうでお勤めしてますなんて冗談にもならねえ」
「落ちつけって！　お前とおっさんは入り口を張ってろ。そこから誰も逃がすんじゃねーぞ」
　大葉と洗は震えるように肯きながら、店の入り口に戻っていった。八鬼の位置からでは、暗がりの中に二人の輪郭がかろうじて見える程度だった。
　犯人はこの暗闇を利用して、まだ室内にひそんでいるのではないだろうか。
　八鬼はスタンドライトを手に取った。電池式なので懐中電灯代わりに使えそうだ。といっても、豆電球

のように頼りないが。
　ぐるりと部屋を探索する。カウンターの向こう側にはキッチンとキャビネットが備え付けられていたが、人が隠れている気配はない。
「兄貴！」
「なんだ？」
「ふと思い出したんですけど、この店、奥に裏口がありませんか？」
「裏口？」
　店内の隅へ移動すると、確かにそこにひんやりしたアルミの扉があった。
　しかしドアノブが回らない。ノブの中心にあるツマミが横に倒れており、鍵がかけられていた。
　これが密室というやつか……
　八鬼は舌打ちする。
　八鬼たちが店内に入る直前まで、被害者は無事で、電話で会話することもできていた。しかし八鬼たちが店内に踏み込んだ時にはもう、被害者の背中にはナイフが突き立てられ、瀕死の状態になっていた。
　犯人は八鬼たちが店内に入る前に被害者を刺し、何処かへ逃げたのだろうか？
　一体何処へ？
　入り口の扉から犯人が逃げ出せば、必ず八鬼たちと鉢合わせしていただろう。そもそも扉は施錠されており、鍵は八鬼たちが持っていた。
　では犯人は室内にひそんでいたのか？
　その可能性はない。充分に確認した。犯人は何処にもいない。カウンターの裏も、戸棚の中も、とうてい人が入れそうにない古ぼけたジュークボックスの中も誰もいない。
　それなら犯人は裏口から逃げたのか？
　しかし裏口の扉も、内側から鍵がかけられている。単純なサムターン方式の鍵だが、扉に隙間はないので、糸などを使って外から操作することは不可能だろう。
　犯人は一瞬のうちに被害者を刺し、一瞬のうちに消えてしまった――

BAR「グッドバイ」全体図

「くそっ……このまま引き下がれるかよ」
　深追いするな。
　そんな言葉は、探偵としてプライドを傷つけられた八鬼の頭からはすっかり抜け落ちていた。
「大葉！　オレが戻るまでそこにいろよ！」
「何処行くんですか？　兄貴」
「負けを取り返しに行くんだよ」
　そう口走ってから、八鬼は気づく。
　その言葉が、ギャンブラーにとって死を意味する禁句であるということを——
　しかし動き出した足を止めることはできなかった。引き返すのはかっこ悪いという、ただそれだけの理由で、八鬼は一線を越えた。
　裏口の鍵を開け、外に飛び出す。
　犯人が室内にいない以上、外へ出たとしか考えられない。外へ出る道は、入り口の扉の他には、裏口しかない。すなわち犯人はこの先に逃げたのだ。どうやったのかはわからないが、なんらかのトリックを用いて、外から内鍵をかけたのだろう。
　外に出てすぐ正面は壁だった。
　抜け道は左右に続いている。
　左は行き止まりだ。建物がせり出し、頭上まで塞がっている。この先は進めない。いつの時代のものかわからないような木製のビールケースが三つ積んであった。もちろん人が隠れられるほど大きくはない。
　右へ走り出す。
　めまいがするほど真っ暗だ。手に持ったスタンドライトの明かりでは、前方を照らすことさえできない。地図も武器も持たないまま、恐ろしい魔物が棲むジャングルを進むような気持ちで、八鬼は久しぶりに指先がひりひりとする感覚を味わっていた。
　そうだ、これだ。
　かつては様々なギャンブルを通じてその感覚を楽しんできた。しかしやがてそれも麻痺していった。マンネリというやつだ。
　そこで行き着いたのが探偵という仕事だった。腕が立ち、頭も切れる連中の裏をかき、上前を撥ねる。子供の頃のように、胸が躍った。時には依頼人から感謝もされた。チンピラでもヒーローになれた。
　麻薬なんか目じゃない。
　ヒーローになるという快感。
　さあ走れ。

八鬼の目の前で、道は右に折れている。

恐怖と興奮が入り混じったようなハイの状態で、その先を曲がった——

そこに突如として現れる小さな人影。

八鬼は思わず息を呑み、うしろに跳びのいた。

彼の反射神経は今までに何度も彼自身を救ってきた。この時も、彼に目の前の人物を観察する余裕を与えた。

——子供？

人間離れした妖しげな美貌で微笑む少年——

それとも少女？

そこにいたのは、ベストを着た外国人風の子供だった。脱いだ上着を片腕にかけている。生きているのか死んでいるのかわからないような肌の色をしていて、それが周囲の闇と親和し、まるで向こう側が透けて見えるようだった。そして独特な香り。何かの香水だろうか？

彼——それとも彼女？　——は、暗闇の中で穏やかな表情を浮かべて、道を塞いでいる。

まさかこいつが？

「お前……こんなところで何してる？」

「ハズレです」

「は？」

「こちらには誰も来ていません」

彼の弾むような声はパイプオルガンを連想させた。

まるでこの状況を楽しんでいるような声。

「じゃあてめえが犯人ってことだな？」

八鬼は腕まくりして云った。

「答えは最初に云いましたよ。ハズレです」

「ふざけるなよ。そうじゃなきゃあ、お前みたいなガキがなんでこんなところにいるんだよ。どうやらこっちの事情も知ってるみてーだし……ナニモンだお前」

「あなたに忠告しに来ました。無駄に被害者を増やすことをあの人たちは望まないでしょうから」

「あ？」

「ここから先に進まないでください」

「余計なお世話だ」

八鬼は相手の胸倉を摑もうと腕を伸ばした。

しかし少年はひらりと身をかわす。

　そしてやれやれと諦めたような笑みを浮かべると、たちまち道の先へ姿を消してしまった。

「お、おいっ、待て！」

　闇の中に不思議な香りだけが残された。

「くそっ、やられっ放しで済ますかよ！」

　八鬼は消えた少年を追って走り出した。

中世西欧拷問器具博物館　――水井山幸

霧切たちと別れてから数時間後、水井山は『中世西欧拷問器具博物館』に到着した。日没の迫る頃で、子供たちに帰宅の時刻を知らせるサイレンが何処かで鳴っていた。

博物館は新興住宅地の丘の上にぽつんと建っている。

その建物はもともと大学の資料倉庫だった。今から二十年ほど前、学園祭の折に学生たちが資料の展示会をしたところ、全国からプロアマ問わず研究家たちが集まったという。その盛 況ぶりを受けて、大学は資料を一般に公開し、建物を博物館として開放することにした。

しかし賑わったのは最初だけで、半年後には客足も遠のき、あっという間にもとの薄暗い陰気な場所に戻ってしまった。それどころか、建物の周辺では開発により人口が増え始め、住民からいわれもない苦情を受けるようになっていた。いわく、近所で拷問器具が展示されていると考えただけで気持ちが悪い、など――

近年に至って、建物が現代風にリフォームされたが、その甲斐もなく博物館は閉鎖された。出資元の大学が経済的に破綻し、学校法人の再編を余儀なくされたのが大きな原因の一つだ。建物が閉鎖されたあとどうなったのかは、地元の住民でさえほとんど知らない。不気味な建物も、平和な風景の中に埋もれて目立たなくなっていた。

水井山は以前、『中世西欧拷問器具博物館』が改築された際に見学に来たことがある。展示物を見るためではない。建物そのものを見るためだ。ある有名な建築家の手によって改築されており、水井山にとっては後学のためにも訪ねておきたい場所の一つだったのだ。

当時と比べて、建物の印象は何も変わっていなかった。ほぼ全面硝子張りという、いかにも近代風の外観に、無駄を省いた四角の面構え。しかし実際には、外面にほとんど直角の部分はなく、すべて曲面で構成されている。少しでも不気味さを緩和しようという試みだろうか。ガウディの真似ごとだが、特注の硝子には相当な予算が使われたことだろう。バブル遺産に認定してもいいかもしれない。

水井山は建物の前でタクシーを降りて、まず人の多さに驚いた。博物館は閉鎖されているはずなのに、何故こんなに人が集まっているのか。彼女はすぐに、彼らが単なる客ではないことに気がつく。

スーツ姿の男性たち。カメラ機材を担いだグループ。警察のロゴの入ったブルゾンを着た一団。

どうやら一足遅かったようだ。

水井山は関係者を装って、何食わぬ顔で建物の中へ入る。周囲の人間たちは、彼女をじろじろと眺めていたが、特に制止することはなかった。見たところ規制線も張られてはいない。

一歩建物の中に入ると、ひんやりとした空気に包まれる。独特な冷たさだ。これは建築上の計算によるものだと水井山は考えている。
「あ、ちょっとすみません」
エントランスの受付カウンター近くに立っていた男に呼び止められた。
「なんでしょう？」
水井山は知らないふりで尋ね返す。
「見学の方ですか？　申し訳ありませんが、現在こちらは閉館しておりまして……」
男の首には大学のパスが下げられている。
「何かあったのですか？」
「ええ……ちょっとした問題がありまして……」
「ちょっとした問題？」
水井山は男に近づこうとして、草履の先を床につっかけて、前のめりに転んでしまった。
大の字で派手に転んだため、眼鏡が吹っ飛んで、男の足元に落ちる。
「だ、大丈夫ですか？」
男は慌てて眼鏡を拾い上げ、水井山を助け起こす。水井山は何事もなかったかのように立ち上がると、眼鏡を受け取り、着物の汚れを払った。
「大丈夫ですよ。壊れにくい眼鏡ですから」
水井山は眼鏡の据わりを確かめるように、かけ直す。
「いや、お怪我は……」
「それより、何か事件でもあったのですか？」
水井山は身を乗り出すようにして尋ねる。
男は観念したように口を開いた。
「ええ……火事です。この建物自体は無事でしたが、外の小屋が燃えていまして……」
水井山は首を傾げる。
火事？
確か挑戦状に書かれていた凶器は『アイアンメイデン』だった。
『アイアンメイデン』なのに火事？
『アイアンメイデン』といえば、あの悪 名高きエリザベート・バートリーが処女の血を浴びるために用いた処刑器具として有名だろう。中が空洞になっている人形の像の内側に、無数の針が仕込まれており、その中に人を入れて蓋を閉じると、針が全身に刺さるという仕組みだ。

もっとも、そういう伝説ばかりが先行していて、実際に『アイアンメイデン』が処刑や拷問の目的で用いられたのかという点には疑問も多い。むしろ伝説を基に、空想上の処刑器具を具現化したものではないかともいわれている。
いずれにしろ、この『中世西欧拷問器具博物館』に『アイアンメイデン』のレプリカが存在することは以前から知られていた。十九世紀にドイツの古城から発見された品のコピーのコピーに当たる。オリジナルは戦争で焼失しているそうだが、やはり出自に胡散臭さを感じるのは否めない。
ともかく『アイアンメイデン』を使って人を殺すなら、その中に被害者を入れて蓋を閉じる方法をまず思いつくだろう。少なくとも水井山はそういうふうに想像していた。
ところが実際に起きたのは火事らしい。
まさか犯罪被害者救済委員会とは無関係の事件だろうか？
「その火事で亡くなった方はいましたか？」
「え、ええ……うちの大学の関係者が一人……」
「その方の名前は？」
「え？」男は怪訝そうな顔つきで水井山を見返す。「もしかしてあなた、マスコミ関係者ですか？　そういうことなら申し訳ありませんが、私の口からは……」
「この格好を見てマスコミの人間だと思いますか？」水井山は和服姿を見せつける。「私の夫がここの大学に勤めているんです。もしかしたら夫に何かあったのではないかと思って……」
「えっ、本当ですか？　失礼ですがお名前は？」
「水井山です」
「それなら心配ありませんよ、奥さん。亡くなったのは井戸柿という教授です。ええと……水井山さんの旦那さんはどちらの学部の――」
「井戸柿さんが亡くなったんですか？」水井山は質問を無視して続ける。「夫が何度か学会でお世話になっていますわ」
「そうでしたか……それはご愁　傷さまです」
「何があったのか詳しく教えていただけますか？」
「あの……申し訳ありませんが、ご覧の通りばたばたした状況で……」
「井戸柿さんには多大なご恩があるんです。せめてあの方に何があったのか教えていただけませんか」
「は、はあ……」
水井山は強引に押し切り、男から事件の概要を聞くことに成功した。
近隣の住民から火事の通報があったのは、今から四時間ほど前。一月十一日の午後一時頃。水

井山たちが駅のモニュメント前に集まっていた時刻だ。『中世西欧拷問器具博物館』の敷地内に建つプレハブ小屋が燃えているという通報で、消防車が現場に駆けつけた。
　火は間もなく消し止められたが、小屋の内部から男性の焼屍体が発見された。男性は大学教授の井戸柿福寿。五十歳。詳しい死因はまだわかっていない。
「この博物館は普段閉鎖されているのですよね？」
　水井山は尋ねる。
「ええ――と云っても、詳しいことは私にもよくわかりません。そもそもこの建物は何年か前に何処かの企業に買われていて、現在は大学の所有物ですらないんですよ。資料の管理に、大学関係者が時折足を運ぶくらいで……」
「資料の管理を任されていたのですか？」
「そのへんの事情もよくわかりません。私が大学で働くようになったのは去年からなので。そもそも私は事務員ですし」
「中身はどうなんですか？　その、つまり拷問器具などの資料はそのまま？」
「ええ、おそらく……」
　男の表情が曇り始めた。根掘り葉掘り聞き出そうとする水井山に対して疑念が生じたようだ。水井山はその変化を見逃さず、礼を云ってすぐにその場から退散した。
　水井山が探偵として今まで相手にしてきたのは、ほとんどが木やコンクリートの無機物、すなわち建築物だったが、一方で人の表情や言動から感情を読み取ることも得意としていた。心理カウンセラーにでもなっていれば、今頃有名なクリニックで先生と呼ばれていたかもしれない。実際にスクールカウンセラーとして働いていた経験もある。それでも彼女が建築物を相手にするのは、人間の心よりももっと複雑な精神をそこに見出していたからだ。彼女は建物に宿る 魂 を覗くことに、学術的な興味を抱いている。
　拷問器具の並べられた建物には、どんな魂が宿っているのか。
　水井山は今回の事件を通して、それを知ることができるのではないかと期待していた。ある種の好奇心で、複数の選択肢の中からここを選んだのも事実だ。そもそも今回は事件の解決を任されてはいない。情報を集めるだけでいいという。それなら学術的興味や好奇心が下心にあったとしても、文句を云われる筋合いはないだろう。
　しかし実際に事件に立ち会ってみると、どうも今回は崇高な精神性とは無縁であるように思われた。まず現場が博物館の離れ小屋という点が気に入らない。これでは博物館がおまけのようだ。それから被害者が火災に見舞われているという点もちぐはぐな印象を受ける。凶器として『アイアンメイデン』が

選ばれているのに、何故被害者は焼け死んでいるのか。
　もちろんまだわからない点も多い。もしかしたら火事は、火あぶりの刑などを連想させるものなのかもしれない。むしろそれくらいの演出がなければ、この場所が現場に選ばれた意味がわからない。
　まだ情報不足だ。もう少し調べてみよう。
　水井山はいったん建物から出ると、火事があったというプレハブ小屋を目指した。
　砂利敷きの細い道を抜けて、博物館の裏手にある庭に出る。
　そこで水井山は奇妙なものを目にした。
　広大な庭は、その中央がわずかに盛り上がった丘になっている。ここにオブジェを並べて、おしゃれな美術館のように凝った庭を造ろうという計画があったようだが、結局実現しなかったのだろう。がらんとした庭の光景は、以前ここを訪れた時とほとんど何も変わっていない。今はただ茶色く枯れた芝生に、うっすらと雪が被っている。
　ところが、何もないはずの庭に、奇妙なオブジェがぽつんと立っていた。
　最近になって新たに設けられたのだろうか？
　水井山は眼鏡を押し上げ、目を凝らす。
　丘を登ろうとして途中で転んだ。
　めげずに立ち上がり、眼鏡の位置を直しながら、問題のオブジェに近づく。
　近づいてみて、はっきりとわかった。
　それは『アイアンメイデン』だった。
　雪の残る丘の一番高いところに、黒々とした鉄の乙女が立ちつくしていた。
　やはりこの事件は委員会と無関係ではなさそうだ。
　水井山は犯罪被害者救済委員会のやり口をよく知っている。奇妙な殺害現場。不気味な手法。あり得ない現象。間違いなく挑戦状で予告されたものだ。
　複数の足跡が『アイアンメイデン』まで続いている。捜査関係者によるものだろう。水井山はそれらの足跡に自分の足跡を紛らせるようにして、さらにその物体に近づいた。
　庭の入り口からおよそ二十メートル。周囲一帯に視界を遮るものはない。だからこそ余計に、『アイアンメイデン』の存在が際立っている。
　けれど何かがおかしい。
　それは水井山が想像していたものと、少しだけ異なっていた。
　通常、『アイアンメイデン』といえば、文字通り乙女の姿を模している。形状としては、洋梨にたとえられるだろうか。その中に人が入ると、頭からつま先まで、全身がすっぽり鉄の乙女に包まれることになる。

けれど目の前のそれは、乙女の首から上の部分が存在しなかった。
つまり首なしの『アイアンメイデン』だ。
まさか……
水井山は首なしの乙女の中を覗いてみる。
——何もない。
もしかしたら首なし屍体でも入っているのではないかと思ったが、さすがに考え過ぎだったようだ。本当に屍体があったとしたら、こんなふうに放置されていないだろう。周囲も血まみれのはずだ。乙女の内部には血どころか、雪の名残らしき水たまりができていた。
水井山はあらためて首なしの『アイアンメイデン』を調べる。
全体的にそれほど大きくない。頭部がないぶん小さく見えるということもあるが、そもそも未成熟な女子くらいしか入ることができなそうなサイズだ。エリザベートの使用目的には適っているといえなくもないが。
胴体は中心から左右に開くようになっている。鉄製の蓋だ。現在は閉じられている。蓋の内側には無数の棘がついていた。これが乙女の血をすする凶器となるのだろう。ただしレプリカなので、棘はクレヨンみたいに先端が丸まっており、まったく危険性は感じられない。
首の切断面はほぼ水平で、バーナーで焼き切ったような痕跡が見られた。切り離された乙女の頭部は、周囲には見当たらない。胴体全体が内側まで濡れそぼっているのは、雪や霜のせいだろうか。黒金がいっそう黒々として見える。
しかし錆はほとんど見当たらない。おそらくこのオブジェはつい最近、ここに置かれたものだろう。
「ちょっと、あなたそこで何をしているんですか」
遠くから声が聞こえた。
丘の下から、スーツを着た男が二人、小走りに近づいてきた。二人とも厳つい顔をした中年だ。
おそらく刑事だろう。
二人の男は水井山をじろじろと眺め回したうえで尋ねた。
「どちらさんですか？　ここで何を？」
「わたくしはこういう者です」
水井山は正直に身分を明かし、探偵と建築士両方の肩書きが入った名刺を渡した。このような状況では、身分を隠そうとしたり、下手に嘘をついたりすると不利になる。
「ふうん……探偵ね……それとも建築士さんとお呼びするべきですかな。ここで何をしているんです？」
「お二人こそ、なんの用事でここに？」

水井山は尋ね返す。

二人の男のうち、片方は気分を害したように険しい表情になった。もう片方は、冗談でも云われたかのように鼻で笑った。

「こちらが訊いているんですよ」

男はスーツのポケットから警察手帳を出して名乗った。

下手に出れば彼らをつけ上がらせるだけだし、かといって上手に出れば目をつけられる。警察を相手にするのが苦手な探偵は少なくないが、水井山もその一人だった。昨日の事件で警察にはさんざんひどい目に遭わされているし、皮肉の一つでも交えなければ気が済まないところだが、水井山はとりあえず素直に応じることにした。

「実は探偵の仲間内で、妙な怪文書が出回っていまして……」水井山は例の挑戦状のコピーを差し出す。「単なるイタズラかとも思ったのですが、気になって足を運んでみたのです」

「怪文書？　ちょっとよろしいですか？」

刑事がコピーを手に取る。それは水井山が見よう見真似で作った捏造品だ。こんな時のために用意しておいた。

「うーん……なんて書いてあるのかよくわかりませんね」

あえて判読しづらいようにエフェクトをかけてある。

「うちに届いた時からこんな状態です。ほらここ、『中世西欧拷問器具博物館』という文字がかろうじて読めますでしょう？」

「誰から送られてきたのですか？」

「さあ、わかりません。今日のお昼頃、FAXで知らない番号から送られてきました。わたくしの知り合いの探偵にも、同様の怪文書が届けられているそうです。もしかして……本当に何か事件でもあったのですか？」

「ええ、まあ」二人の刑事は顔を見合わせる。「怪文書が届いたのは初めてですか？」

「はい」

「そうですか……黒い挑戦状らしきものの噂を聞いたことがあるのですが、もしかしたらこれがそうなのかもしれません」

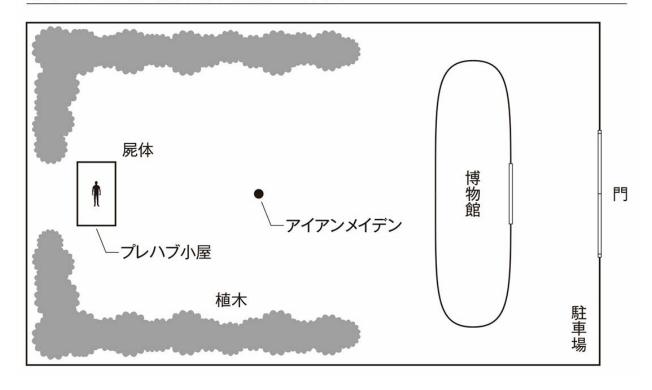
「黒い挑戦状？」

水井山はとぼけたふりをして尋ね返す。

さすがに警察も『黒の挑戦』のことをまったく知らないということはないだろう。末端の刑事はともかく、上層部では犯罪被害者救済委員会の存在を把握し、実際に捜査を進めている可能性もある。

「この手の輩を相手にしていたらキリがないんですがね。おそらく愉快犯でしょう。とはいえ無視するわけにもいかないので、あなたには詳しい話を伺っておきたいんですが、お時間は空いてますかな？　ええと、水井山さん」
「このあと用事がありますので、一時間くらいなら……」
「そんなに時間は取らせませんよ」刑事はぎこちない笑みを作って云う。「ここで立ち話はなんですから、建物の方へ移動しましょうか」
「わかりました」
　そう云いつつ、水井山はその場から動こうとしない。
「……水井山さん、こちらへ」
「その前に、一つお尋ねしてもよろしいでしょうか？　この奇妙な置物はなんなんですか？」
　首なしの乙女を指差して尋ねる。
「我々にもよくわかりません」
「博物館に所蔵されていた拷問器具のように見えますけど、いつからここに？」
「あとでお話ししますから、とりあえず……」
「いいえ、答えてもらうまでここを動きません」
　水井山がそう云い張ると、二人の刑事はいよいよ困ったような顔で同時にため息を零した。
「昨日まではこの庭には何もなかったそうです」
　片方の刑事がしぶしぶ答える。
「ということは、火事が起きる直前に置かれたということですか？」
「さあ、そこまではわかりません」
「この奇妙な置物が忽然と庭に出現したことと、火災が起きたことは無関係でしょうか？」
「わかりませんね」
「無関係ではないのですよね？」
「あのねえ、水井山さん……」
「庭で見つかったのはこの置物だけですか？」
　水井山は質問を続ける。
　刑事たちは呆れた様子で肩を竦めた。
　水井山はそれから二人の刑事に連れられ、パトカーの中で尋問を受けることになった。しかし実際は、質問をしていたのは水井山の方ばかりで、刑事はそれに答えさせられてばかりだった。彼女にしてみれば一矢報いたといったところだろう。

警察から手に入れた情報によると……
　火災があったという問題のプレハブ小屋は、博物館とは反対側に丘を下った場所にある。丘の上に立てば眼下に見える位置だ。刑事に邪魔されたので観察している余裕はなかったが、水井山もちらりとそれを見ることができた。十二畳程度はありそうな大きさのプレハブ小屋で、現在は倉庫として利用されている。博物館が運営されていた頃には、警備員の詰所として使われていた。火災により窓辺を中心に真っ黒に焦げてしまったが、崩壊はせず原形を保っている。

中世西欧拷問器具博物館　全体図

消防隊が駆けつけた時にはもう、窓から火が噴き出していた。窓硝子は割れていたが、これは火災によるものと判明した。窓のクレセント錠は内側からかけられており、出入り口のサッシ戸にも鍵がかけられていた。戸の鍵は、中で死亡していた男のズボンのポケットから発見されたが、複製が簡単な種類で、合い鍵が存在する可能性も否定できない。しかし少なくとも火災発生時に、小屋が密室状態であったことは間違いないようだ。

また周囲の雪に足跡はなかった。死亡した男の足跡も見当たらない。ゆえに男は昨夜の雪が降っている間か、それ以前にプレハブ小屋に入ったと考えられる。火災発生は正午過ぎ。もしこの時、何者かが小屋に近づいていたとしたら、雪の上に足跡が残っていただろう。

死亡した井戸柿はこの小屋の布団の上で、仰向けの状態で発見された。のちに死因は焼死と判明した。目立った外傷はなく、室内に争ったような形跡もない。火元は布団の枕もとで、煙草やマッチが発見されている。

以上のことから、プレハブ小屋の火災は、煙草の火の不始末による失火が原因と考えられた。

こうして『中世西欧拷問器具博物館』の事件はあっけなく終了し、夕方のニュースや新聞の片隅を埋める程度で片づけられることになった。

しかし不審点は少なくない。

井戸柿は何故、閉鎖された博物館の倉庫で寝煙草などしていたのか。

この点に関しては、井戸柿の妻がある証言をしている。井戸柿は数ヶ月前から禁煙をしていたが、どうやら最近になってまた隠れて吸うようになっていたらしい。周囲に大見得をきって禁煙を始めた手前、こそこそと吸うほかなく、その隠れ家として博物館の倉庫を利用していたのではないか。博物館はかつて、彼の勤める大学が管理していたという繋がりもある。もしかしたら彼にとって、そこは馴染みの場所だったのではないか。

この証言は充分に筋が通っており、警察にも採用された。

こうして事件は解決した。

多くの者がそう考える。

だが彼らはこの事件における最大の謎を完全に無視していた。

庭に忽然と出現した首なしの『アイアンメイデン』――

あの孤独な乙女こそ、密室殺人の鍵を握っているに違いないと、水井山は考えていた。

リブラ女子学院　——五月雨結

　円形の部屋に閉じ込められてから、何時間経過しただろうか。時計がないので正確な時間はわからない。もしかしたらまだ数十分しか経っていないかもしれない。

「お腹空いた……喉渇いた……」

　部屋の隅で月夜がうずくまっている。しばらく前からその状態だ。うわごとのように欲求を呟いている。

「トイレ行きたい……トイレ……」

「最悪の場合、そのへんでして。許すから」

　わたしは投げかけるように云う。

「絶対に嫌よ！　そんなことするくらいだったらあなたを殺して私も死ぬわ。大体何よ、その上から目線は。私よりちょっと尿意に余裕があるからって、そんなに偉いわけ？　あなたに指図されるいわれはないわ！」

「そんなつもりじゃ……」

　わたしは心底疲れた気持ちで、月夜の苛立った声をやり過ごす。ここでやり返しても互いに疲弊するだけだ。

　わたしは書き物机に座って、引き出しの中にあった紙と鉛筆を使い、図を駆使しながら、この『リブラ女子学院』で起きた事件の謎を解こうとしていた。思いついたことを片っ端から書き込んでいく。

　机のすぐ横に菜砂が立ち、時々わたしの書き込みに対して意見した。彼女の意見は的確で、わたしにも思いつかないような発想に満ちていた。もしかしたらわたしよりも探偵の素質があるのでは……

「竹崎さんの屍体は、間違いなくこの部屋にあったのですよね？」

「うん。わたしはここで気を失っていて、気がつくと背後に竹崎さんの屍体が横たわっていたんだ。目の前には黒マントの犯人が立っていて……」

「黒マントは何をしていたんですか？」

「何をって……さあ？　わたしが目を覚ました時には、凶器らしき鉄パイプを持ってその辺りに立ってたよ」

「立っていただけ？　五月雨さんは犯人に襲われたわけではないんですか？」

「うん……襲ってこなかった。わたしが目を覚ましたことに気づくと、まるで逃げるように部屋を飛び出して行ったんだ。そもそも『黒の挑戦』では、犯人は探偵を傷つけてはいけないというルールがあるから、黒マントはわたしを攻撃できなかったんだと思う」

菜砂たちにはすでに『黒の挑戦』について説明してある。最初はまったく信じていなかったが、閉じ込められてだいぶ時間が経過した今となっては、その存在を肌身に感じているはずだ。
「もう一度尋ねますけど、竹崎さんが亡くなっていたのは間違いないんですよね？」
「間違いない、ほんとだよっ。呼吸してなかったし、脈が止まっていたのを確認した」
「手首の脈を止めるトリックがあるというのを聞いたことがあるんですけど……」
「確かにあることはあるけど、わたしが脈を確かめたのは、手首じゃなくて首ね。さすがに首の脈拍を止めるトリックは聞いたことないなあ。それにすでに体温が下がっていた。生きている人間ではあり得ない感触だったよ」
「えっ？」菜砂は何かに気づいたように急に頭をもたげ、自分の髪をくしゃっとわし掴みにした。「屍体の体温が下がっていたんですか？」
「うん、それがどうかした？」
「つまり竹崎さんは殺害されてから時間が経過した状態にあった、ということですよね」
「そうだね」
「だとすると、やっぱり黒マントの行動は変だと思うんです。五月雨さんが目を覚ました時、黒マントは鉄パイプを持って近くに立っていたんですよね。これが竹崎さんを殺害した直後の状態ならわかりますけど、実際には竹崎さんは殺害されてから時間が経過していました。少なく見積もっても一時間以上でしょう。それだけの時間が経過する間、黒マントはその場で一体何をしていたのでしょうか」
「たぶん、密室トリックの準備をしていたんじゃないかと思うんだ。思いのほかわたしが早く目を覚ましちゃったから、結果的に何もできなくて……」
「鉄パイプを持ったまま準備を進めていたのですか？」
「たまたま手に持って移動しようとしていたところだったのかもしれない」
「わかりました。仮に密室トリックの準備中だったとして……では何故五月雨さんは放置されたままだったのでしょうか。もし私が黒マントだったら、真っ先に五月雨さんを拘束しておきます。たとえば手錠をかけたり、目隠しをしたり。そうしておけば、たとえ五月雨さんが想定外のタイミングで目を覚ましたとしても、見られたくないものを見られてしまう可能性はゼロになります」
「うーん……確かにそうだね」
「犯人には充分に時間がありながら、何故、五月雨さんを拘束せずに放置していたのか——私はこう考えます。する必要がなかったから。では、拘束する必要がない状況とは、どんな状況か？　すでに準備完了していた、としか考えられません。以上のことから、次の結論が導かれると思うんです。五月雨さんがこの部屋に横たえられた時点で、トリックは完成していた」

菜砂は淡々とロジックを積み重ねていく。
　わたしよりずっと探偵向きかも……
「トリックがすで完成していたとすれば、黒マントがこの部屋に一時間以上留まった理由として、『トリックの準備をしていた』という答えは当てはまりません」
「じゃ、じゃあ、黒マントはここで何してたの？」
「それはわかりません。さっきからずっと考えているんですけど……」菜砂は力なく首を振る。「でもそれが事件の重要な鍵になるような気がします」
「うん、そうだね」
　黒マントはここで何をしていた？
　わたしは改めて、目を覚ました時のことを思い出す。

、　　　　彡　、

　ああ、そうか！
　黒マントはわたしを覗き込んでいたんだ。
　何故だ？
　わたしは菜砂に当時の状況を説明する。
「五月雨さんが身に着けていたものが、黒マントにとって何か気がかりだったのでしょうか」菜砂は机の周りをぐるりと回って、わたしを観察した。「別におかしなところはありませんけど……」
「あ、眼鏡！　目が覚めた時、眼鏡がなくてしばらく周りがよく見えなかったんだ。これって何か関係あるんじゃない？」
「結局眼鏡は何処にあったんですか？」
「傍に落ちてた」
「黒マントがわざと外しておいたのでしょうか。仮にそうだとしても、何故黒マントが五月雨さんを覗き込んでいたのかは謎ですね。眼鏡をかけていないことを、あらためて確認する必要はありませんし」
「相当ひどい寝顔だったんじゃない？」
　それまで黙っていた月夜が唐突に口を挟む。
　相変わらずうずくまったままだが、顔には意地悪そうな笑みが浮かんでいる。
「確かに寝顔に自信はないけど……それは今関係ないっ」

中学生の頃、修学旅行先の旅館で、クラスメイトに自分の寝顔をカメラでこっそり撮られたことを思い出す。あとから見せられたけど、けっこうショックだった。完全に弛緩しきった寝顔に、丸出しのお腹……

「それとも、このマヌケ面はいつまで寝ているんだろうって眺めていたんじゃない？　ふふっ」

「あっ！」

一瞬、自分の頭の中に散らばっている断片が組み合わさって、一枚の絵になったような感覚があった。

「な、何よ急に大きな声出して」

月夜が怯えたような目をして云う。

「君の云う通りだよ、月夜ちゃん！」

「まさかマヌケ面ってことを認めるの？」

「そうじゃなくって。黒マントはわたしのことを見ていたんだよ。わたしが目を覚ますのを待っていたんだ！」

「……は？　どういうこと？」

「ナズちゃんが云ったように、わたしがこの部屋に横たえられた時点で、すでにトリックの準備は完成していたんだと思う。でもそれで終わりじゃない。どんなに精巧に組み立てられた機械も、スイッチを入れなければ動かないからね。たぶんわたしはそのスイッチだったんだ」

「五月雨さんの存在が、トリックを構成する要素の一つだったということですか？」

菜砂が尋ねる。

「そう！　もっと具体的に云えば、わたしが黒マントを追いかけることが、トリックを成立させるために必要だったんだと思う。わたしは黒マントを一度は追いつめたつもりだったけど、たぶんそれも相手にとっては予定通りだった。黒マントは逃げていたんじゃなくて、わたしを誘き出していたんだ」

思い返せば、黒マントが逃げ出した先の扉はすべて、あらかじめ開け放たれた状態になっていた。特に円形の部屋の戸は、一番端までスライドさせて押し込んでおかないと固定できない。これは偶然ではなく、意図的に開け放たれていたと考えるべきだろう。

それに、そのあと起きた出来事――黒マントの消失や、屍体の消失――を考えれば、黒マントはわたしにそれらを見せる意図があったと考えられる。奇妙な密室トリックの目撃者として、探偵であるわたしを誘導したのだ。

以上のことから――黒マントがこの部屋で何をしていたのか、もはや答えは明確だ。

黒マントはわたしが目覚めるのを待っていた。

何故、肩を揺さぶったり、叩いたりして起こさなかったのか？　それはあくまで自然な流れで『探偵が犯人を追いかける』展開にするためだろう。わたしが黒マントに肩を叩かれて目覚めていたら、かなり違

和感を覚えていたはずだ。
「わたしは知らず知らずのうちに、まんまと黒マントの罠にはまっていたんだ」
「そんなの最初からわかってるわよ！　頭のおかしなヘンタイ以外に何処の誰が女子高生を閉じ込めて楽しむっていうのよ！　それで？　どうやってここから出るの？　少しは考えたの？」
　月夜は膝を抱えたまま、わたしに怒りをぶつけるように云う。
「それは……まだ……」
「結局、何も進展してないじゃない！　私は一刻も早くここから出る方法を知りたいの。ヴァイオリンの練習しなきゃいけないの。一日練習サボったら、三日遅れるのよ？　わかってる？　早くここから出して！」
「月夜さん、大丈夫ですよ」菜砂が月夜の隣に寄り添うように座り、肩を優しく抱いた。
「きっとすぐに出られますから。ね？」
「うう……ナズ……怖いよう……いつものして……いつもの」
　月夜は膝の間に顔を埋めて、震え始めた。
　菜砂が月夜の髪を撫でるように、手櫛で何度もすいてあげる。しばらくすると月夜は落ち着きを取り戻し、震えも止まった。
　このまま水も食べ物もない状況で、何日も閉じ込められることになったら、遅かれ早かれわたしたちは死ぬだろう。もしかしたら犯人の狙いはそこにあるのかもしれない。『黒の挑戦』のタイムリミットまでわたしを監禁して、逃げ切るつもりだ。
　考えろ。
　生き延びるために考えるんだ。
　霧切ちゃんならこういう時、真っ先にそうしているはずだ。それがわたしたち探偵にとって、唯一の武器なのだから。
　たぶん、彼女ならもう真相にたどり着いていることだろう。
　――ここまで云えばわかるでしょう？　結お姉さま。
　彼女の云う通りだ。きっと考えるためのヒントはもう出ている。
　もう一度よく考えよう。
　わたしたちがここに閉じ込められているのは、事故や偶然ではない。犯人の狙い通りだ。わたしたちがこの部屋に来ることは、犯人にはわかっていたのだ。
　そもそもわたしたちは何故この部屋に戻ってきたんだっけ？
　そうだ、屍体を確認するためだ。わたしたちがそうすることは、犯人にも容易に予測できただろう。

しかし肝心の屍体は消えていた。
どうして屍体が消えたのか。
どうやって？
もしかしたらその謎を解くことで、この部屋から出る方法を見つけられるかもしれない。なにしろ屍体が消えたのは、この部屋なのだから。考えることはけっして無駄ではないはず。
そうでしょ？　霧切ちゃん。
まず確かなこととして——竹崎花がこの部屋で死亡していたのは間違いない。彼女の頭部から流れ出た血が、絨毯を赤黒く染めていたのも事実だ。
けれど今は、そんな痕跡すら見当たらない。
この部屋から屍体を持ち出すのに、どれくらいの労力と時間がかかるだろうか。
わたしはふと、マリア像を運んだ際に使った荷台の存在を思い出した。
あの手の道具があれば、比較的スムーズに屍体を移動させられる。屍体を持ち上げて荷台に載せ、部屋を出て廊下を走り、何処か目につきにくい場所で屍体を下ろす。屍体を隠すなら、たとえば礼拝堂の椅子の下とか、トイレの個室などが考えられるだろう。
所要時間は十分もあれば可能だろうか。
問題は絨毯に残された血痕だ。絨毯にしみ込んだ血を洗い流すのに一体どれくらい時間がかかるだろうか。しかもまったく痕跡を残さず……
わたしは椅子から立ち上がり、あらためて屍体があった場所を調べる。
赤い絨毯に触れてみた。何もない。血痕どころか、濡れたような箇所すらない。いくら赤い絨毯とはいえ、人間の血とはだいぶ違う色なので、見分けがつくはずだ。
「あれだけの血を洗い流すには、大量の水と洗剤、それから長い時間が必要だと思うんだけど……
洗ったような痕跡さえないっていうのは、どういうことなんだろう？」
わたしは菜砂たちに聞こえるように、独り言を呟く。
「特殊な清掃道具があれば、一時間くらいで完全に取り除くことはできるのではないですか？」
菜砂が月夜の髪をときながら云う。
「一時間か……」
わたしが棺の中から菜砂たちを助け出し、彼女たちと一緒にこの部屋に戻るまで、一時間もかかっていない気がする。間に合わないのではないか。
「まあ相手はあの組織だし、血を綺麗に洗い流して完全に乾燥させる機械みたいなものを用意していてもおかしくないか……それなら一時間以内に可能かもしれない」

「でもそれは、五月雨さんが途中で一度もこの部屋に戻らないという条件つきですよね。もし五月雨さんが気まぐれで、早々に屍体を確認しに戻っていたら、計画が破綻します」
「あ、確かにそうだ。わたしと鉢合わせする可能性がある」
　犯人がそんな危険性のある計画を立てていたとは思えない。
　屍体を運び出すのに五分、そして絨毯を清めるのに十分、それくらいが限界のはずだ。
　はたしてそんなことが可能だろうか？
「いっそ絨毯ごと替えてしまうというのはどうでしょう？」菜砂が云った。「絨毯を部屋の端からくるくると巻いていって、ついでに屍体も巻き込んで、何処かに運び出すんです。あらかじめ絨毯を二重に敷いておけば、新しい絨毯を敷き直す必要もありません」
「なるほど！　重そうだけど、それなら五分もあれば運び出せるかも——」
「ただし……自分で云っておいてなんですけど、そんな苦労をするくらいなら、あらかじめ出血しないように殺すとか、血が流れてもいいように何かを敷いておくとかした方が、賢いような気がします」
「う、確かに」
「現実的に考えて、血まみれの屍体をわずか数分で片づけるのは不可能だと思います」
「そうなんだよね……わたしもそう思う。もしそんなことが可能だとしたら……何かもっと大胆な仕掛けがあったとしか思えない」
「仕掛けというのは？」
「たとえばだけど、床全体が一本の水平軸を中心にくるっと回転するとか……ちょうどコインの裏表をひっくり返すみたいに」
　それは前に『ノーマンズ・ホテル』で見た仕掛けだ。あれを応用すれば屍体を一瞬で消すことが可能ではないだろうか。
「随分と大胆な仕掛けですね……」菜砂は驚いた様子で云う。「その場合、机と椅子はどうするんですか？　見たところ床に固定されていませんよね。固定されていればひっくり返しても落ちませんけど」
「仕掛けを作動する前に、一度部屋の外に持ち出せばいいんじゃない？」
「あ、そうですね。それなら五分どころか、一分で作業を終えられるかもしれませんね」
　菜砂の顔にかすかに明るい笑顔が戻った。
「もしこの推理が正しければ、壁と床の間に隙間があるはず！」
　わたしは壁の近くに屈んで、壁と床の継ぎ目を確認した。
　——ない。
　床の裏表を回転させるためには、壁と床の間に隙間がなければならない。けれどどう見ても不自然な

隙間などなかった。隙間を埋めるためのゴムやスポンジもない。
「だめだ、不正解だ。あいつらはそんな単純じゃなかった……いいセンいってる気がしたんだけどな……」
　さすがに今まで見せたことのあるトリックを使ってくるはずもないか。
「でもちょっとだけ前に進んだ気がします。突拍子もない仕掛けが施されている可能性もあるんですね。思いつきもしませんでした」
「トリックのためならなんだってするような連中だからね。常識が通じないよ」
　わたしはため息を零しながら、椅子に座り直す。
　この『リブラ女子学院』にどんな仕掛けがあるかわからないけれど、きっとわたしが今まで見てきたものの中に、ヒントがあるはずだ。
　わたしはここで起きた出来事や、違和感のあった出来事をリストアップしていく。

　解・トリックを目撃させるため、わたしが目覚めるのを待っていた？

　解・追跡を遅らせるため？
ド
　解・逃走しやすくするため？

、

、　戸
戸　、　リ
戸　、　、

　やはり取っ掛かりになりそうなのは（d）だろうか。施錠できるような鍵がないのに、戸が一時的に開かなくなっていた。最初は戸の内側で黒マントが押さえているのかと思ったけれど、戸が開いた直後に部屋に踏み込んでも黒マントはいなかった。またつっかえ棒のようなものも見当たらなかったので、どうして戸が開かなくなったのか謎だ。単純に建てつけが悪いとか、そういう問題じゃないと思う。
　もしかしたらさっき考えたような仕掛けが部屋にあって、それが作動している間は戸が開かないように

なっているのではないだろうか。たとえばエレベーターみたいに、中のゴンドラが動いている間は戸が開かない仕組みになっているとか……

　ん……？

　わたしはとっさに立ち上がり、戸の前まで移動した。今まで何度も調べてきたけれど、もう一度よく確認してみる。

　戸は床のレール状の溝を左右に動くようになっている。今はまったく開かない。クローザー構造が組み込まれているらしく、開けても自動的に閉まるようになっているが、一番端まで押し込むことで開けっ放しにすることも可能だ。

　戸に手で摑むような取っ手はなく、その代わり指を引っかける溝がある。鍵や鍵穴に相当するものは見当たらないが、何故かロックがかかるようになっているようだ。

　室内側に戸のレールはないので、普通に考えれば廊下側にレールがあるはずだ。もし廊下側のレール上に、つっかえ棒をすれば戸は開かなくなる。だからわたしたちは、黒マントがそうしたのだと考えていたけれど……本当にそうだろうか？

　棺のある部屋で経験した時と同じように、つっかえ棒などなくても戸がロックされる可能性はある。

　そもそも廊下側に戸のレールなどあっただろうか？

　棺のある部屋を思い出す。確かあちらでは、廊下側ではなく室内側にレールがあったはずだ。

　この部屋は、棺のある部屋とそっくり同じ構造だが、何故か室内側にレールがない。

　どういうことだろう？

　室内側にも、廊下側にもレールがなかったとしたら？

　引き戸を開けた時、戸は何処に行くのか。

　これはエレベーターの戸を想像すればわかりやすい。戸は壁の中──すなわち戸 袋に収納される。

　この部屋の戸が、そういう構造だったとしたら──

「どうしたんですか？　五月雨さん」

「なんかちょっと、重大なことに気づいたような気がするんだ。こういうのわたしの役目じゃないから、自分でも戸惑ってるんだけど……」

「しっかりしてよ！　あなた探偵なんでしょ？」月夜が顔を上げて云う。「頼りにしてるから……」

「う、うん」

　わたしは戸から離れて、あてもなく部屋の中を動き回る。

　取っ掛かりを得ても、そこから先に進めない。

　これが霧切ちゃんだったら、すぐに答えにたどり着けるんだろうな。自分の頭の悪さに嫌気がさす。こん

な能無しが探偵を気取っていたなんて……
　わたしは霧切が別れ際に云った言葉を思い出す。

『天秤座に気をつけて』

　菜砂も月夜も天秤座ではなかった。だから犯人ではないと思う。それなら天秤座の犯人は何処にいるんだ？
　天秤座――
　あれ？
　もしかして……
「ねえ、二人とも、星占いとか好き？」
「え？　星占いって、星座とか？」
　菜砂が尋ねる。
「そう。朝の情報番組とかでもやってるやつ」
「女の子なら当たり前じゃない」月夜が云う。「占ってほしいことでもあるの？」
「ううん、そうじゃなくて。天秤座って、英語でなんて云うかわかる？」
「ええ。リブラよ」
「あっ」
「やっぱり！」わたしと菜砂は同時に声を上げていた。「そうか……わかった！　わかったよ！　この『リブラ女子学院』の秘密が。それに黒マントや屍体が消えた謎も、わたしたちが閉じ込められている理由も！」

ＢＡＲ『グッドバイ』　——八鬼弾

一月十二日、お昼のニュースです。
昨夜十一時頃、商店街の空き店舗において、男性がナイフで刺殺される事件がありました。被害者は同じ県内に住む木玉勝実さん六十歳とみられ、店舗を管理する不動産屋に本人から助けを求める連絡があり、社員が現地へ行ってみると被害者はすでに死亡していたとのことです。
現場となった空き店舗は普段から地元の若者などがたむろするなど、付近住民から苦情が寄せられており、事件との関連性を警察が調べています。
また事件の第一発見者である八鬼弾さん二十八歳が、現場近くの路上で何者かに鈍器のようなもので頭部を殴られ死亡する事件が起きており、警察では同一犯の犯行とみて捜査中です。
では次のニュースです——

中世西欧拷問器具博物館　――水井山幸

　一月十一日、夜八時――
　水井山はステーキハウスで夕食をとっていた。鉄板のあるカウンター席で、隣には若い男が座っている。
　分厚いステーキが鉄板に載せられ、焼かれ始めると、隣の男が今にも食いつきそうなほど身体を乗り出した。
「いやあ、本当にいいんですか？　こんなうまそうな肉……」
「ええ、ぜひ召し上がってください。この店はとても予約が取りづらくて、わたくしもめったに来られないんですよ」
「ほんとっすか。ありがたいです。俺なんか普段、カップラーメンばっかりで……マジで助かります」
「いえいえ」
　水井山はにこやかに笑って返す。
　男は大学院生の真藤 刀という。中世西欧拷問器具博物館の事件で亡くなった井戸柿教授のゼミに所属している。文化人類学専攻で、主にヨーロッパの古代文化が研究テーマらしい。
　水井山は事件を調査するために、井戸柿に近しい人物を当たることにした。まず井戸柿の勤める大学に近親者を装って連絡し、彼の勤務形態を知る。予想通り彼はゼミを受け持っていた。それから直接大学に赴き、適当に学生に話しかけて、知り合いに井戸柿のゼミ生がいないか聞き出した。その結果、わずか数分の間に、五人の学生をリストアップすることができた。
　五人に連絡をして、すぐに出てこられる学生をステーキハウスに呼び出した。もちろんステーキは釣り餌だ。男子大学生ならとりあえず肉で釣れるのではないかという単純な発想だが、作戦は見事にはまったようだ。
　担当教授が焼死したその日に、ステーキで釣れる学生だから、それほどナイーブさは持ち合わせていないだろう。情報を聞き出すには、それくらい『心のハードル』が低い相手の方がいい。
「ごめんなさいね、事件でばたばたしている時に呼び出して……」
「いや、いいんっすよ別に。ばたばたしているのは俺らじゃなくて、大学の人たちっすから。まあ当然しばらくゼミは休講になるでしょうけど、大学は明日からも普通に講義やるみたいっすよ」
「そうですか。井戸柿先生は学生にはとても人気があったみたいですね」
「えっ、あー、そうっすね」

真藤はあからさまに言葉を濁していた。
「あら、そうでもない？」
「うーん……まあ」
水井山は真藤の表情から、ネガティブな感情を読み取っていた。
彼は何か知っている。
「電話でもお伝えしましたけど、わたくしどもは井戸柿先生がただの火事によって亡くなったとは考えておりません。おそらく事件の裏には、何か秘密があるのではないかと考えています。わたくしどもは真実が知りたいのです。警察はすでに失火が原因と断定しているようなので、これ以上捜査はしないでしょう。けれどこのままでは、真実が埋もれてしまう可能性があります。どんなささいなことでも構いませんので、もし何か知っているのであれば、教えてください。どうか真実のためにも！」
水井山は熱っぽく訴える。『真実のため』という大義を与えてあげれば、ゴシップめいた裏話も話しやすくなるだろう。
「わかりました。俺が知ってるのは噂話とかも多いんすけど、話せることは全部話します」
真藤はあっさりと落ちた。こころなしか表情には決意めいたものまで窺える。ここまで単純だと申し訳なさを感じるくらいだ。
「ありがとうございます」水井山は頭を下げて云う。「ご飯を食べながら話しましょう。どうぞ、遠慮なく」
「いただきます！」
真藤はさっそく皿に載せられたステーキにナイフを入れ、目を輝かせながら頬ばった。
彼には身分を明かしているが、『黒の挑戦』については何も話していない。情報を引き出すだけなら余計な印象を与えない方がいいだろうと水井山は判断した。
「井戸柿先生のゼミでは、どのようなことを勉強なさっていたのですか？」
「えーっと……井戸柿先生の専門はヨーロッパの古代史で、その中でも俺はケルト文化について研究しています」
「中世史については？」
「あくまで基礎教養として勉強してますけど、専門とは違いますね」
「井戸柿先生の遺体が発見された場所、知っていますか？」
「拷問器具が展示されている博物館でしたっけ？　そういうところがあるっていうのはなんとなく聞いたことがありましたけど、ずっと前に閉鎖されているんでしょう？」
「ええ。正確には中世西欧拷問器具博物館といいます。もしかしたら井戸柿先生にとって、馴染みのある場所かとも思ったのですが……」

「そういう話を聞いたことはありませんね。中世やら西欧やらはともかく、拷問器具についてはまったく専門外だと思いますよ」真藤はステーキを口に放り込みながら喋る。「拷問器具っていうと、やっぱり『アイアンメイデン』とかですか？」
「ご存じですか？」
「そりゃ、誰でも一度くらい絵や写真で見たことあるんじゃないですか？　インパクトでかいっすもんね、あれ」
「そうですか……あ、よかったらわたくしの分もどうぞ」
　水井山はステーキの皿を真藤に差し出す。
「えっ、マジっすか？　いいんですか、いただいちゃっても？」
「どうぞ召し上がってください」
「すんません。いやあ、マジで嬉しいっす。こんなおいしい食事を、綺麗なお姉さんと一緒にいただけるなんて……」
「お世辞がお上手ですね」
「お世辞じゃないっす。あの……お姉さん、彼氏とかいるんですか？」
「それで井戸柿先生のことですけど」水井山は話題を逸らす。「単刀直入に伺いますが、誰かに恨まれているという話を聞いたことはありませんか？」
「あー……ぶっちゃけ、先生を恨んでるやつはたくさんいると思います」
　真藤のナイフとフォークを動かす手が止まった。
「えっ？　そうなんですか？」
「死んだ人を悪く云うのもなんなんですけど、まあ事実だからいいか。井戸柿先生は論文や著作で、けっこうやらかしてるんっすよ。捏造や不正は当たり前、数ページにわたって学生のレポートを丸写しなんてこともあったそうです。学生のレポートですよ？　いくら審査がザルだからといっても、良識ってもんがあるでしょ」
「研究者としてはモラルが低すぎますね。でも、人から恨みをかうというのとは、ちょっと方向性が違うような気もしますが」
「こっから先は嘘かほんとかわからない話なんすけど、先生はある共同研究者の論文を丸ごと自分のものにして、自著として発表したことがあるらしいんです。しかもそれだけじゃなくて、告発しようとした共同研究者を自殺に見せかけて殺しちゃったらしいんです。正直なところ、もっともらしい嘘だと思って聞き流してたんっすけど……」
「井戸柿先生にそんな過去があったのですね」

「何処までほんとの話かわかんないっすよ？　でも一事が万事って云うじゃないですか。先生の普段の発言とか思い返すと、やっぱそっちだったのかなーって思っちゃいますね」
　真藤の皿はいつの間にか空になっていた。この調子だとあと二、三枚くらいステーキが必要そうだ。しかしさすがに付き合っている時間もないので、水井山は核心部分を探っていく。
「その自殺に見せかけて殺されてしまったという共同研究者のことをご存じですか？」
「いや、俺は知らないんすけど、知っているやつなら教えられますよ」
「その人の連絡先を教えてください」
「えーと……」真藤は携帯電話を操作して、電話帳を探っている。「あ、ありました。こいつです。なんなら、俺から話をつけておきましょうか？」
「助かります。可能であれば、このあと会えるかどうかも確認しておいてください」
「オッケーっす。あの……その代わりといっちゃなんですが、お姉さん、もし彼氏いないんだったら……」
「ちょっと洗面所に行ってまいります」
　水井山は立ち上がり、そそくさと洗面所へ向かった。
『黒の挑戦』の標的になるのは、罪を犯しながらも罰を受けることなく暮らしている犯罪者だ。彼らから直接的、あるいは間接的に被害を受けたものが復讐者となり、ゲームに参加する。そういう構図があるので、動機の点から犯人を探っていくことは、一つのセオリーといえるだろう。
　もし井戸柿が実際に過去に殺人を犯していながら、追及を免れていたのだとしたら、それが今回の『黒の挑戦』と関係している可能性は充分に考えられる。自殺に見せかけて殺された共同研究者の近親者や恋人などが、今回の挑戦者かもしれない。
　水井山が席に戻ると、真藤は食後のデザートを食べているところだった。
「連絡取れましたよ。烏 羽刈安ってやつです。大学近くの喫茶店で待っているそうです」

　ステーキハウスを出て、真藤と別れた。
　待ち合わせ場所まではそう遠くない距離だったので、水井山は考えを巡らせながら歩いていくことにした。
　街路樹と街路灯が交互に立ち並ぶ歩道が真っ直ぐに続く。
　ふいに車道を流れる車が途絶えた。
　気づくと歩道にも人の姿がない。
　住宅街を歩いていると、不思議とそういう瞬間が訪れたりする。まだ寝静まるには早い時刻だが、街は人が消え失せたかのように静まり返っていた。

水井山はその静けさの中で、誰かが自分を尾行していることに気づいた。

立ち止まって、振り返る。

街路樹の陰に少年が立っていた。

彼がただ者ではないことは、羽 衣のように影を身にまとっていることからみても明らかだった。ごく自然に闇に溶け込む術を心得ている。間違いなく彼はこちら側の存在だ。水井山は直感していた。同時に、たとえようのない危機感が全身を駆け抜けていた。

身長や体形から子供だということは推測できる。しかし恐ろしいほど人間らしさが感じられない。何処か別の世界から現れたような少年だ。そもそも少年と呼ぶべきなのかどうかも怪しい。少年でも少女でもない、何か別の概念――

「……誰？」

水井山は身構えながら声をかける。

「よく気づきましたね」

彼は云った。

親指でコインを宙に弾き、キャッチする。何度かそれを繰り返す。

「気づいてもらえるようにだいぶ配慮しましたけど」

「わたくしに何か用でも？」

「随分と熱心に事件を追っているようですね。何か理由でもあるんですか？」

「――ただの学術的興味です」

「本当ですか？」少年はそう云って、コインを空高く弾いた。「あなたに忠告しに来ました。無駄に被害者を増やすことをあの人たちは望まないでしょうから」

「何？」

「余計なことをしないでください」

彼はそう云うと、落ちてきたコインを手ではキャッチせず、大きく振り上げた足で、車道へ向かって蹴飛ばした。

流れ星のようにコインが宙を駆ける。

コインが道路に落ちると同時に、そこにヘッドライトを灯した車が走り抜けていった。

続けざまに後続車が一台、二台と通り過ぎていく。

ふと目を戻すと、さっきまで少年がいたところには誰もいなかった。

気づくと歩道にはいつの間にか人通りが戻っていて、水井山だけがその場に立ち止まっていた。

今のは一体……

もしかしたら犯罪被害者救済委員会の人間かもしれない。警告だろうか？　探偵役でもないのに、探偵として活動することが問題だとでもいうのだろうか。

しかし霧切響子たちが云っていたように、探偵が仲間を募ること自体はルール違反ではないはずだ。水井山もその覚悟で立ち向かっている。

水井山は気を取り直し、喫茶店へ向かった。

烏羽刈安はすでに喫茶店の奥の席に座っていた。

両手をテーブルの上に置き、じっとそれを眺めている。ひどく頬がこけていて、髪は手入れされないまま伸び放題だ。安そうなコートに、襟のたるんだTシャツを着ている。心理学的な知識がなくとも、彼が精神的に不安定な状態にあることは、外見からも明らかだった。

水井山が店内に入ると、相手はすぐに気づいた様子で顔を上げた。

水井山は意を決して近づく。

「烏羽さんですね？」

尋ねると、彼は目をぎらぎらさせて、まるで戦いを挑むような顔つきで肯いた。

これは当たりかもしれない。

「祥 子のことを聞きたいんですって？」

彼の声は落ち着いていた。

水井山は肯き、向かいの椅子に座った。ウェイトレスにミルクティーを注文する。ミルクティーが届くまでの間に、自分のことや、何故事件を追っているのかなど説明しようとしたが、それより先に烏羽が口を開いた。

「祥子は僕よりも三つ年上で、当時僕はまだ学部生でした。彼女は大学院生です。僕たちは大学の図書館で出会い、付き合っていました。付き合っていたことは今、初めて他人に打ち明けました。真藤先輩も知りません」

「何故、今このタイミングでわたくしに？」

「何故でしょうね」烏羽は口元に苦笑を零す。「あなたには云っておかなければならないと思ったんです。どちらにせよ聞き出すつもりだったのでしょう？」

「そうですね……続けてください」

「祥子は井戸柿先生の助手として資料を集めたり、執筆の手伝いをしたりしていました。そんななか、初めて共同研究者として名前を連ねる仕事が回ってきたのです。といっても、ほとんど彼女が個人的に研究していた古代史についての論文です。井戸柿先生はそこに自分の名前を足すことで、学会に

認められやすくなるだろうと云っていたそうです。まあそういうことはよくあることみたいですが、論文が完成すると井戸柿先生はそれを自分のものとして発表してしまったのです。騙されたと知った祥子は、当初は自分が甘かったのだと残念そうに笑っていました。けれど井戸柿先生が過去にもそういう不正を数々行なってきたことを知ると、次第に許せないと思うようになったようです。調べてみると、井戸柿先生の論文にはデタラメが多くみられ、何故か学会でも見過ごされているケースがたくさんあったようです。祥子はこれを、社会全体に対する罪だと考えていました」
「きっと祥子さんは正義感の強い方だったのでしょう」
　水井山が云うと、鳥羽は一瞬睨むように視線を向けた。
　お前が彼女の何を知っている、と云いたげな顔つきだった。
「そのあとは想像通りです。祥子は井戸柿先生のところへ行って、これまでの不正を告発すると宣言しました。そのせいで井戸柿先生に殺されてしまったのです」
「本当に殺されたのですか？　事件にはなっていないのでしょう？」
「ええ。自殺と判断されましたからね」
「どのようにして殺害されたのですか？」
「井戸柿は自分の研究室にあるコーヒーに睡眠薬を混ぜて彼女に飲ませ、眠ったところをキャンパスの隅にある女子トイレまで運びました。そこで硫 化水素を発生させて彼女を殺害したのです」
「殺人だという証拠は？」
「証拠？　いろいろありますよ。井戸柿が使った睡眠薬や、ドラッグストアで薬品を買うところを記録した監視カメラの映像……」
「それだけ証拠があっても、警察では自殺として処理されたのですか？」
「そもそも初動で自殺と断定されているので、捜査なんかされていません」
「ではそれらの証拠は、あなたが自分で集めたのですか？」
「……それはどうだっていいことでしょう」
　鳥羽はとぼけて云う。
　おそらく犯罪被害者救済委員会からの供与だろう。組織は復讐心を煽るために、標的の犯した罪を暴き出し、挑戦者に伝える。おおやけに発覚していない事件でも、彼らは犯人を特定してくる。その『答え』が正しいかどうかを確かめる術はないが、復讐者にとってはそれが唯一の心のよりどころになる。
「事情はわかりました。問題の井戸柿先生ですが、今日の昼頃、火事に巻き込まれて亡くなっています。ご存じでしたか？」
「……ええ」

烏羽は冷めきったような目を自分の指先に向けていたが、その時ほんのわずかに、口元が笑った。
「ではお聞きします。あなたは今日の昼一時頃、何処で何をしていましたか？」
「アリバイですか？」烏羽は水井山を見返す。「警察みたいなことを聞くんですね。もっとも、警察は聞きにきてもいませんけど。昼の一時頃は、普通にバイトしてましたよ。近所のコンビニです。シフトは午前九時から、午後五時まで、休憩は午前十一時から十一時半までの三十分と、午後二時から二時半までの三十分」
「間違いなくアリバイがありますね」
「そうでしょう？　店に問い合わせてもらえば、同僚たちが証言してくれるはずです。監視カメラの映像にも映っているでしょう」
　烏羽は得意そうな顔で云う。
　よほどトリックに自信があるのか。
「亡くなった井戸柿先生に一言声をかけるなら、なんてかけますか？」
「別に。よく知らない人ですし」烏羽はそう云って肩を竦める。「まあ、自業自得でしたね、とでも云いましょうか」
「——自業自得？」
「煙草の火の不始末が原因だって、ニュースで云ってました。そういうことです」
　烏羽はくすくすと笑い始めた。感情のコントロールが適切にできていないようだ。彼が犯人かどうかはともかく、これ以上彼が壊れてしまわないか、水井山は不安になった。
「お話ありがとうございました。事件の核心に近づけた気がします」
　水井山は伝票を手に取り、席を立った。
「参考になるといいですけど」
　烏羽は低い声で云う。
「あ、そうそう」水井山は思い出したように引き返す。「最後に一つお尋ねします。あなたの誕生日は？」
「誕生日？　八月三十日ですけど、それが何か？」
「以上です。ありがとうございました」
　水井山は背中に鋭い視線を感じながら、喫茶店をあとにした。

　夜九時半を過ぎた。
　情報はかなり集まったが、犯行の全容を知ることができたとは云い難い。他の探偵たちはどうしている

だろうか。もしかしたらすでに解決している探偵もいるかもしれない。
　水井山にとって、事件が解決できるかどうかはあまり関係がない。必要なのは情報だ。そしてもっとも知りたいのは、犯人がどんな境遇を経て犯罪被害者救済委員会と関わり、犯行に至ったのかという点だ。
　たとえそれを知ったからといって、同病相憐れむつもりもない。犯人と自分を比べたところで、何一つ免罪符にならないし、救いにもならないだろう。けれどやはり興味はある。それもまた学術的興味といっていいかもしれない。
　犯人はどのような犯罪に手を染めたのか？
　時間はあまり残されていないが、知りたいという欲求が高まる。水井山は横を通り過ぎようとしていたタクシーをとっさに呼び止め、『中世西欧拷問器具博物館』を目指した。

　住宅街でタクシーを降り、そこから歩いて目的地に向かった。夜に見る博物館は、近代的なシルエットも闇に溶け、いよいよ不気味さを増していた。昼間に並んでいたマスコミや警察の車両は一台もなく、人影もいっさい見当たらない。特に規制線も張られていないようだ。
　都合がいい。
　水井山は建物の横から庭へ抜けた。この裏庭は閑静な住宅街にぽっかりと空いたエアポケットのような場所だ。目の前が急に牧歌的な草原めいた風景に変わる。
　しかしゆるやかな丘のてっぺんに立つ『アイアンメイデン』はそのままだ。その首なしの像は、悪魔的なイコンのようでもある。水井山はあらためて『アイアンメイデン』を確認したが、新しい発見は特になかった。
　そのまま丘を下って、井戸柿が焼死したプレハブ小屋を覗く。こちらもすでに規制線が解かれている。火災原因が断定されているので、これ以上調査する必要もないということだろうか。
　窓から中を覗く。発見当時、窓は内側から施錠されていた。通常のクレセント錠なので、細い紐でも使えば、窓を閉じたあとのわずかな隙間を利用して、外から施錠することは難しくないだろう。しかしその程度のトリックに１億４０００万円が支払われたとは思えない。
　プレハブ小屋の周囲には被害者のものを含め、いっさい足跡がなかった。ということは、雪が積もるより前に、すべての準備が完了していたと考えられる。
　この地域に雪が降ったのは、十日の夜から十一日の未明にかけて。火が出たのが十一日の午後一時頃。このことからみて、時限発火装置が用いられた殺人の疑いが強い。
　夕方の報道では、被害者の身体から大量のアルコールが検出されたと云っていた。犯人は井戸柿にアルコールを飲ませるか、注射するなどして意識を混濁させ、夜の間にプレハブ小屋に寝かしておいた

のだろう。その際にプレハブ小屋を密室にしておく。戸の鍵は被害者のポケットから発見されたが、鍵穴を見る限りごく普通のシリンダー錠なので、容易にスペアキーが用意できただろう。

密室にする方法自体はなんでもいい。密室に見えさえすればいいのだ。そうすれば事故や失火による火事だと思わせることができる。

それよりも問題は、密室の内部で任意の時間に出火させる方法だ。

電池や時計などを利用した機械式の発火装置が使用されたのか？　しかし現場からそのようなものは発見されていない。他にもリモコン装置や、携帯電話など、いかにもそれっぽい道具は現場から発見されていない。

出火元は枕周辺とみられている。ここには煙草の吸殻やマッチの入った灰皿があり、このことから出火の原因が寝煙草によるものと判断された。火がここから出たことは間違いない。

犯人はアリバイを確保するため、小屋の周辺どころか、まったく離れた場所にいたとみられる。つまり発火装置は、リモートかつオートマティックな機構をもっていたのではないか。

そんなことが可能だろうか？

難問だ。

しかしヒントはある。

挑戦状による凶器は『アイアンメイデン』だった。つまり発火装置に、あの首なしの乙女が関係しているのは間違いないのだ。

水井山はプレハブ小屋の前で丘の方を振り返った。やや目線より高い位置に、『アイアンメイデン』のシルエットが見える。さらにその向こうには、博物館の建物が見えた。

ああ、そういうことか……

いかにして殺人が実行されたのか、その構図が建物の設計図を描く時のように、水井山の頭の中に描かれていく。

間違いない。

答えはそれしかないだろう。

しかし確固とした証拠がほしい。

水井山は庭を横切り、博物館へ近づく。窓から中の様子を窺う。建物は全面硝子張りになっているので、外からでも容易に中を覗くことができたが、しかし水井山の探しているものは見つからなかった。

探し物はもっと上の階にあるはずだ。

中に入る方法はないだろうか。

水井山は和服の上前をめくり、ふとももののホルスターから鉄パイプを抜いた。

両手でそれを振り上げ、目の前の硝子を叩き割る。

必要があれば嘘もつくし、実力行使もためらわない。それが水井山のやり方だ。博物館は閉鎖されてから長いので、警備会社との契約は切れているだろうという公算もあったが、いずれにしろ用事は数分で終わらせる予定なので、見咎められる心配はないはずだ。水井山は鉄パイプをホルスターに戻すと、冷え冷えとする廊下に忍び込んだ。

薄暗い廊下の先に階段が見える。

階段を駆け上がり、上階へ移動した。

二階……いや、もっと上だ。三階まで一気に上がる。

三階の展示室に入る。壁一面が硝子張りになっているとはいえ、夜なのでほとんど真っ暗だ。古い物置のようなにおいがする。水井山は胸元から小さなペンライトを抜き出し、光を巡らせた。

するとすぐ目の前に人影が姿を現した。

水井山は思わず悲鳴を上げそうになる。

しかしよく見るとそれは人ではなく、展示物の西洋甲 冑だった。

中世ヨーロッパにおける戦争で使用されていたとされる全身鎧だ。本物かレプリカかはわからない。飾り台と展示用のスタンドによって、まるで人がそれを着用して立っているように展示されている。水井山はつい昨日の夜、武田幽霊屋敷の事件で見た鎧 武者を思い出していた。今度はあれの西洋版という趣向か。

鎧は五体ほど窓辺に整列している。いずれも胴のエングレーブや、金属のつや、あるいは籠手やすね当ての形など、それぞれ微妙に異なっている。使用された時代や国が違うのだろう。共通しているのは、いずれも右手に剣を携え、左手に銀色に輝く大盾を構えているという点だ。

彼らは一様に、窓の方を向き、外から襲い来る何者かに対して身構えているかのようにも見えた。

しかし奇妙なことに……彼らは全員、兜がなかった。

首なしの五体の騎士。

彼らもまた、首なしのイコンだったのだ。

不明　　　——霧切響子

『双生児能力開発研究所』に訪れたのが霧切響子だったことで、堤の犯行計画は大いに変更を余儀なくされた。
　今までの計画が消極的な防衛を前提としたものだったとすれば、これから先は積極的に相手に仕掛けていく。卑怯な手を使ってでも、最終的に勝てばいい。ゲームクリアすれば５億６１００万という大金と新しい人生が手に入るのだ。危険な橋を渡る価値はある。
　霧切響子は手ごわい相手だった。しかし所詮はガキだ。身体の脆さは大人と比べるまでもない。堤と霧切を乗せた車は事故により大破したが、堤は軽傷で済んだ。一方霧切は見た目の外傷こそないが、意識をもうろうとさせ、前後不覚に陥っていた。
　殺してやる——一時は感情に身を任せてそう考えもしたが、それが悪手だということにはすぐに気づいた。たとえ彼女を殺しても、まだゲームは終わらない。真の相手は霧切響子ではなく、五月雨結だ。
　それならこいつをもっと有効利用すべきだろう。
　殺人事件の謎解きで探偵役と渡り合うことは、できる限り避けたい。そもそもハッタリで相手をゲームから降ろすというのが主旨の挑戦状だ。ゲームに乗って来られた時点で勝ち目は薄い。せいぜい時間稼ぎにしか使えないだろう。
　ではどうやって探偵役と戦って勝利するか。
　当初の主旨通り、相手をゲームから降ろせばいい。
　そのための道具がこちらにはある。
　霧切響子——彼女を人質にして探偵役と交渉する。
　彼女と五月雨結は浅からぬ関係にあると考えていいだろう。彼女のためなら交渉にも乗るはずだ。
　彼女の命を救うために、ゲームから降りるか。
　それとも彼女の命を見捨てて、ゲームを続行するか。
　はたして五月雨結はどちらを選ぶか——
　堤は後部座席に横たわる霧切響子をちらりと覗いた。手足をロープで縛り、身体もテープで何重にも縛っている。まだ意識もはっきりとしていないようだ。
　問題は五月雨結がこのことに気づくまで、何処か安全な場所で過ごさなければならないということ。
　何処か安全な場所——
　そうだ、あそこにしよう。

あの場所なら、他の何処よりも安全なはずだ。

リブラ女子学院　――五月雨結

「『リブラ女子学院』の秘密ってなんなんですか？」

　菜砂と月夜が同じように目を丸くして、わたしを見返している。

　わたしは彼女たちの傍に座って、メモ書きを見せた。

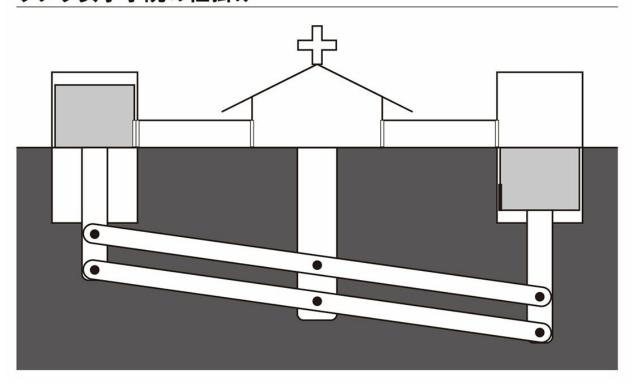
「『リブラ』っていうのは、『天秤』のことなんだよね？　要するにこの聖堂全体が天秤になっているんだよ」

「えっ……」

「どういうこと？」

　二人ともぽかんとしていた。

「見て、仕組みはこういうことだと思う。建物の中央にある礼拝堂が支点になっていて、そこから左右に伸びる円形の部屋が、ちょうど上皿天秤のようなはかりになっているんだ」

リブラ女子学院の仕掛け

「ま、待ってよ」月夜は周囲を見回しながら云った。
「この部屋が、はかり？　私たちは天秤ばかりの上に乗っているということ？」
「そういうこと」
「そんなの信じられないわ。私が今にも漏らしそうっていうのと同じくらい信じられない」
　月夜はぶるぶると頭を振る。そのせいでカチューシャが外れそうになっていた。
「厳密に云うと、わたしたちが今いる場所は、はかりの上というよりは、中と云うべきかな。このはかりは皿ではなくて、箱になっていて、わたしたちは箱の中に閉じ込められている状態」わたしは図を描きながら説明する。「この部屋の仕組みは、ちょうどエレベーターに似ていると思う。エレベーターは円形の塔の中を上下するんだけど、仮にはかりが下り切った状態を地下階として、上がりきった状態を地上階とするね。ほら、地上と地下を行き来するエレベーターみたいでしょ。廊下は地上階にあって、そこからしか出入りできない。で、普通のエレベーターだったら、乗り降りするゴンドラが地上階にある時にしか中に入れないんだけど、この塔ではそうじゃないの。ゴンドラが地下にある時、塔の地上階に部屋一個分の空間ができることになるよね。わたしたち、ここに入ることができるんだ。この時、その空間はわたしたちがいる部屋とそっくり同じ構造の部屋になっている」
「エレベーターの屋根の上に、エレベーター内とそっくり同じ部屋があるということですか？」
「そういうこと！」菜砂の問いに、わたしは肯いて答える。「ちなみにわたしたちは今、地下に下りているエレベーターの中にいる。だからこの天井の上に、今見ている風景と同じ風景があるってこと」
「……まったくもってよくわかんないんだけど」月夜が口を尖らせながら云った。「マタイによる福音書でたとえて」
「それは無理だよ！　単純に天秤皿のイメージでたとえると、わたしたちは皿の上に立つこともできるし、皿の中に入ることもできる。どちらも見える風景は一緒」
「皿の中って……」
「でっかい皿だと思って！　すごく大きいから、中に空洞があって、箱みたいになってるお皿」
　まとめると、こうだ。

・天秤ばかりが下がっている時、そっくり同じ部屋が上下に一つずつ存在する。廊下から部屋に入ると、箱の上に立つことになる。

・天秤ばかりが上がっている時、部屋は重ね合わせの状態にあり、一つしか存在しない。廊下から部屋に入ると、箱の中に入ることになる。

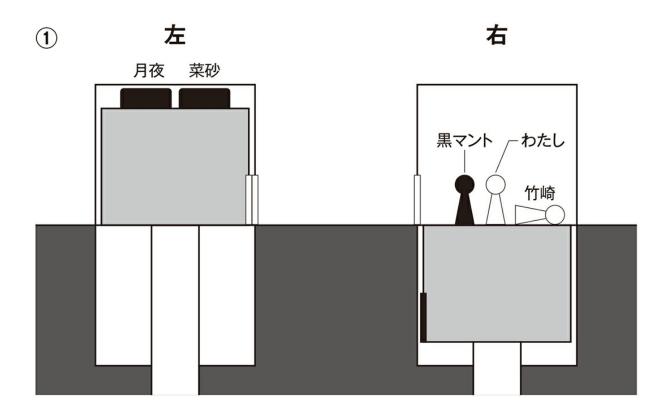
「この仕組みは礼拝堂を挟んで左右の部屋で連動し合っている。天秤だからね。片方が下がれば、片方が上がる」
「部屋が上下に動くのは、誰かがスイッチを切り替えたりしているからなの？」
　月夜が尋ねる。
「ううん、天秤と同じように、単純に左右で重い方が下に下がる」
「重い方？　その部屋にいる人の体重の合計とかってこと？」
「そう」
「じゃあもし、私たちが箱の上にいる時に、向こう側の部屋に人がたくさん押し寄せて、こっちがぐいーって上がったら？　私たちは押しつぶされちゃうんじゃないの？」
「ううん、そうはならないように、当然余白というか、退避スペースが設けてある。書き物机がその証拠だよ。少なくともあの机の高さ分、余白があるんだと思う」
「それで……私たちは今、箱の中にいて、地下に下がっている状態だから、廊下に出られないということなのね？」
「うん」わたしは入り口の戸を指差す。「今、あのドアの向こうには壁しかない。だからドアが開かないようにロックされている。こじ開けたって意味がない。あのドアって、構造はエレベーターのドアと一緒なんだと思う」
　部屋が地上階にある時には、戸は二重構造になっているはずだ。室内の戸と、廊下の戸。二重になった戸が連動して戸袋に引っ込むような形になっている。わたしがもっと冷静で、観察眼に優れていれば、何度か部屋を出入りしているうちに、戸の厚さが変わったり、戸口にわずかな隙間があることに気づいていたはずだ。
　残念ながら、気づいたのは閉じ込められたあとだったけど……
　わたしたちが箱の中にいる場合には、室内の壁と床の間に隙間はない。ただし箱の上にいる場合には、注意深く見れば壁と床の間に隙間を発見することができるはずだ。それに箱の上の方が、微妙に広く見えるのではないだろうか。
「とにかく黒マントの犯人は、この仕組みを使って、わたしの目の前から消えたり、屍体を消したり、わたしたちを閉じ込めたりしたんだ」
「え？　どういうこと？」
「最初から順番に説明するね。この事件では、順序がとても大切なんだ」わたしは図を示す。「まず便宜的に礼拝堂を中心として、右の塔がわたしの目覚めた方。左の塔が、ナズちゃんと月夜ちゃんが棺に入れられていた方。ここまではいい？」

「うん」

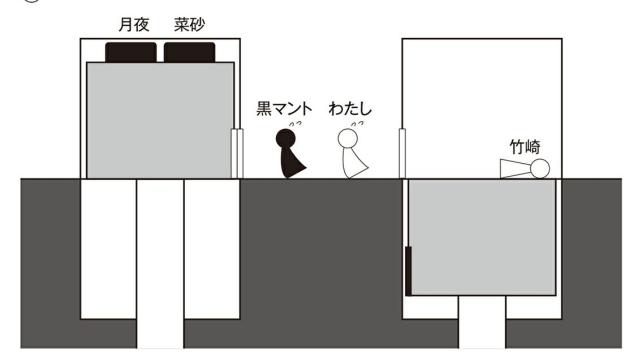
　月夜と菜砂は同時に肯く。

「天秤は左右の重さの違いによって上下する。これが基本。それを踏まえて、初期状態を考察すると、こうなる」

　図①参照

①
左
右
月夜
菜砂
黒マント
わたし
竹崎

「人数で云うと、一人分右の塔の方が多い。だから重量的にみて右の塔の方が下がっていた状態だと思う。一応、厳密に棺の重さも考慮してみたけど、それでも右の塔の方が重かったと思う」
「そうね、見た目にもあなた、いろいろと重そうだし」
「うっ……そ、そうかなあ？」
「棺の重さを多めに見積もって、一つ十五キロとしても、やはり右の塔の方が重くなるでしょうね」
　菜砂が云う。
「とりあえずそういうことにして。この時、右の塔では、わたしや犯人は箱の上に立っている状態。だって箱の中にいたら、廊下に出られなかったはずだからね」
「私たちは？」月夜が尋ねる。「左の塔は、箱が上がった状態にあったんだから、当然私たちも箱の中にいたのよね？」
「ううん、違うよ。君たちは棺に寝かされた状態で、箱の上にいたんだ。さっき云ったみたいに、部屋は余白を残して押しつぶされた状態になっていたと思う。そう考えると、君たちが棺に入れられていた理由もわかる。そうしておくことで、君たちは天井に頭をぶつけることもないし、部屋の秘密を知ることもない」
「うわあ……想像すると寒気がするわ」
　月夜は身震いしながら云う。
　菜砂が彼女を温めるように身体をさすってあげた。
「でもどうして犯人は、わざわざ箱の上に棺を並べたのかしら」
「そこがポイントだね。実際に次に起こったことを考えてみれば、どうして君たちが箱の上に置かれていたのか理解できると思う」
　あの時――
　目を覚ましたわたしは、黒マントを目撃し、追いかけた。黒マントは真っ直ぐに左の塔を目指した。黒マントが部屋に入るところをわたしは確かに目撃した。
　けれど部屋に入ると黒マントは消えていて、室内には二つの棺が並べられていた。
「まずわたしが黒マントを追って部屋を出た時、部屋はこうなっていた」

　図②参照

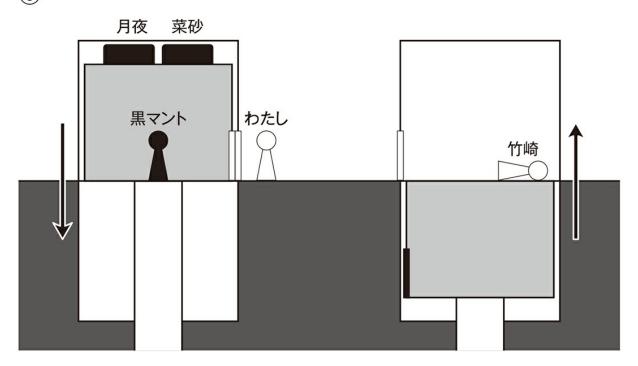
②

「右の塔は、わたしや黒マントが部屋を出たことで、かなり軽くなった。だから天秤の左右のバランスが逆転するはずなんだけど……すぐには動かなかった。それは何故かというと、左の塔のドアが開きっ放しだったから。エレベーターって、ドアが開いたままだと動かないでしょ？　それと同じことだと思う」

　黒マントが逃げていた時、あらかじめ戸が開いたままになっていたのは、そういう理由があったのだろう。もちろん逃走しやすくするためという理由もあるだろうけど、何より天秤が上下するのを一時的に止めていたのだ。

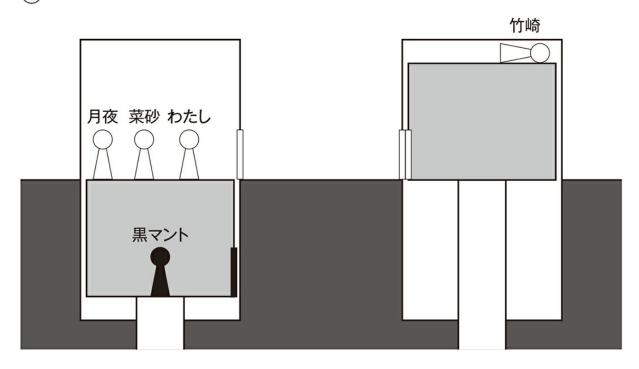
「ふむふむ。それで？」

「次はこう」

　図③参照

③

「黒マントが左の塔の箱の中に入って、戸を閉めたことで、ついに天秤の逆転が起こった。そして天秤が上下に動いている間は、戸が開かないようになっている。わたしが部屋に入ろうとした時に、戸がロックされていたのは、そのためだよ」
「そっか、それもエレベーターと一緒ですね」
　菜砂が感心したように云う。
「そしていよいよ次にわたしたちが出会う」

　図④参照

④

「わたしが部屋に入った時には、すでに部屋の上下移動が行なわれていて、黒マントは地下にひそんでいた。それで黒マントが消えたように見えたんだ。この時もっとちゃんと部屋を調べておけば、早い段階で秘密に気づいたかもしれない。それに床の下にいる黒マントを、閉じ込めることもできたのに」
「仕方ありませんよ。あの状況では……」
「ありがとう、ナズちゃん。あの時はひどいことしてごめん」
「なんでナズにだけ謝るの？　私には？」
「ごめんなさい」
「……いいわ」
「これで疑問がいくつか解消されたね」

　解・部屋が上下移動していたため、セーフティロックがかかっていた。

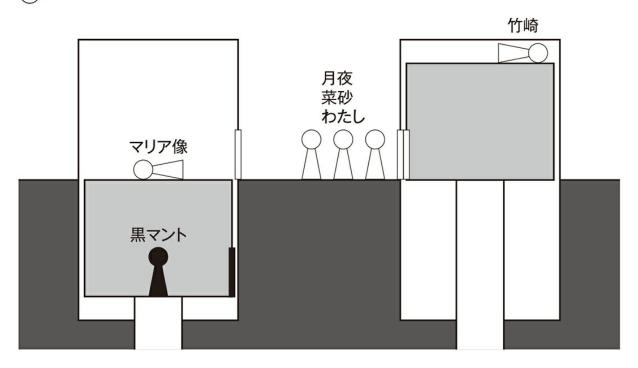
　解・天秤の仕組みを利用して、地下に移動していた。

　解・天秤の仕組みを作動させるために、重しが必要だった。またダミーの犯人役に仕立て上げることができる。

「私たちは重しだったってこと？　嫌な響きね」
　月夜は眉間に皺を寄せる。
「そう、それに君たちには、容疑者の役割もあったんだと思う。事実、わたしは君たちのどちらかが黒マントだと思っていたもの」
「冗談じゃないわ。私たちは純度百パーセントの被害者よ。私たちをこんな目に遭わせた犯人には間違いなく天罰が下るでしょうね」
「そういえば……」菜砂が思い出したように云う。「棺に入っている時、身体がふっと浮くような感覚がして目を覚ましたんです。弱い地震みたいな感じです。五月雨さんが現れたのは、そのあとでした。今考えてみれば、あれは部屋が上下に動きだした瞬間だったのかもしれませんね」
「私は全然気づかなかったわ」
　月夜は得意げに云った。

「そのあとわたしは一度部屋の外に出た。君たちを解放する鍵を捜すついでに、建物の中を探索してきたんだ。君たちの手錠と足枷の鍵は、何故かマリア像の首にかかっていた。今にして思えば、これも天秤を有効に使うための仕掛けの一つだったんだ」
「そういえばあなた、わざわざマリア像を運んできたわね」
「うん。だってマリア様の首からチェーンが外れなかったんだけど、さすがに壊して持っていくわけにはいかないでしょ。どう考えたって、マリア様は心理的に壊せないよね。だからわたしはマリア像ごと持っていくことにした。ちょうどキャスターのついた荷台まであったし」
「そうか……マリア像も、重しだったんですね」
　菜砂が気づいて云った。
「そういうこと。重しの効果は、そのあとわたしたちが全員部屋を出てから発揮されるものだった」

　図⑤参照

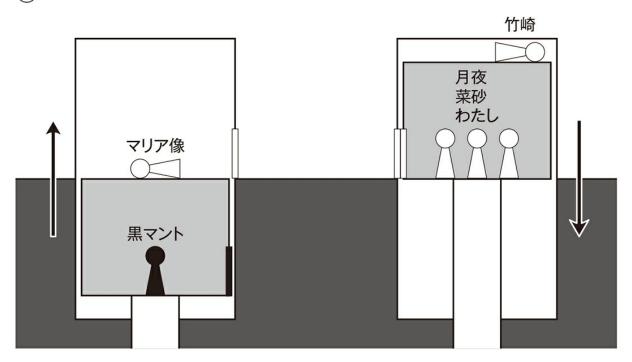
⑤
竹崎
月夜
菜砂
わたし
マリア像
黒マント

「もしマリア像がなかったら、わたしたちが部屋を出た時点で、左の塔には棺が二つと、黒マント本人しかいない。一方、右の塔には竹崎さんの屍体が一つ。棺を頭数に入れないとしたら、天秤皿の上は一対一の状況だよね。竹崎さんはそんなに太っていなかったけど、黒マントは不安に思ったんじゃないかな。『もしかしたら天秤が逆転するかも』と。そこでマリア像の重しをわたしに持ってこさせることにした。たぶん保険の意味合いが大きいと思うけど」
「もしかしたら犯人はけっこう小柄なのかもしれませんね」
　菜砂が云う。
「うん、わたしもそう思う」

月　、　リ
　解・天秤を安定させるための重しとしてマリア像を利用した。マリア像の首に手錠の鍵をかけることで、わたしに部屋まで運ばせた。

「そのあと私たちは、竹崎さんの屍体を調べるために、右の塔へ向かったのよね」
　月夜が云った。
「でも扉を開けてみたら、何故か屍体が消えていた。けれど原理さえわかってしまえば、もう何も不思議ではないでしょ？　わたしたちが右の塔に行った時、部屋は上に上がっていた。屍体は部屋の天井の上に横たわっていたんだ」

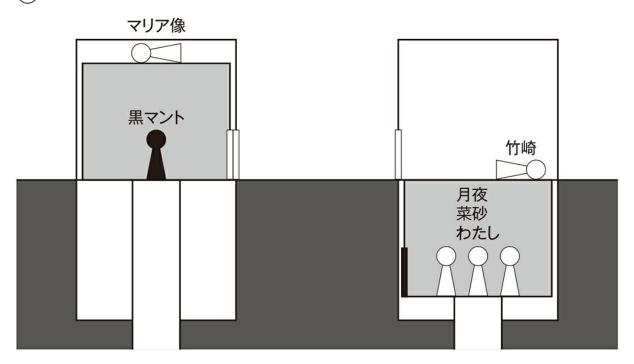
月　、　、
　解・屍体は箱の上に置かれたままだった。わたしが二度目に部屋を訪れた時は、天秤の仕組みによって部屋が上に移動していたため、わたしたちは箱の中を覗き、屍体がなくなったと勘違いした。

　図⑥参照

竹崎
月夜
菜砂
わたし
マリア像
黒マント

「わたしたち三人が右の塔に入ったことで、天秤の上下が逆転した。思い返せば、部屋に入った直後にめまいを感じたんだけど、あれって部屋が動いていたせいだったのかもしれない」
「そう？　私、何も感じなかった」
　月夜は首を傾げながら云った。

　解・部屋がわたしたちの重みで下がってしまい、ドアの向こうがただの壁になってしまったため。

「一方で、左の塔では黒マントが外へ出られるようになったというわけね？」図を見つめながら月夜が云う。「今頃遠くへ逃げているのかしら」

マリア像
黒マント
竹崎
月夜
菜砂
わたし

「そうだね……」
　これが『リブラ女子学院』で起こった事件のすべてだ。
　本当に天秤構造の建物などあり得るのか？
　たぶん犯罪被害者救済委員会ならやってのけるだろう。相手は新仙 帝や龍造寺月下だ。むしろこれくらいのことをやっていなければおかしい。
「犯人がもう逃げちゃったということは……結局私たち、閉じ込められっぱなし？　そんなの嫌よ！　謎が解けてもなんにも進展してないじゃない！」
「うーん……そうだ！　この部屋の上にもう一つ部屋があることはわかっているんだから、天井をぶち破って這い上がることはできないかな？」
　わたしは天井を見上げて云った。
　高さは三メートル以上あるだろうか。
「天井をぶち破るって簡単に云うけど、どうやって？」
「……椅子を投げてみる」
　わたしは書き物机とセットになっている小さな椅子を手に取って、思い切り上に投げた。
　けれど椅子は天井にすら届かず落ちてきた。
　真上に物を投げつけるのはけっこう難しい。ましてや、投げるのに適していない形状の物だと、小さな椅子ですら天井に届きそうにない。
「無理そうね」
「じゃあわたしが肩車するから、ナズちゃん乗ってみて」
「えっ、私ですか？」
「うん、月夜ちゃんはいろいろ問題を抱えてるから」
「心遣い感謝するわ」
　わたしがその場に屈み込むと、菜砂が肩に乗ってきた。そのままバランスを取って、菜砂が落ちないように気をつけながら立ち上がる。
「わっ、わっ」
　菜砂が怯える。
「どう？」
「む、無理ですよ。全然届きません」
　届かないどころか、むしろわたしがその場でジャンプした方が、もっと高くまで届きそうだ。
　菜砂を降ろす。彼女は初めて「たかいたかい」された幼児みたいに興奮したような顔をしていた。

「ちょっとー、あなたナズに何したのよ。なんかナズが火照ってるじゃない！」
「知らないよ、別に何もしてないって」
「ここぞとばかりにおかしなことしたんじゃないでしょうね？」
「今はそれどころじゃないってば。どうやって抜け出すか考えなきゃ」
「天井を破るというのは現実的ではないかもしれません」菜砂はぺたんと床に座り込んだまま云う。「たぶん分厚い板やコンクリートに阻まれると思います。これを突破するには、最低でも鉄の工具が必要です」
「そうだね……」
　わたしは肩を落として云う。
「あ、いいこと思いついたわ」月夜が唐突に顔を上げて云った。「三人で一緒にジャンプしたらどうかしら？　ジャンプしている間は、足元にかかる重さがゼロになるでしょ？　そうしたら部屋が軽くなって、天秤皿が上に上がるんじゃない？」
「ジャンプしてそのまま宙に浮いていられるなら可能かもしれないけど……たった０．１秒ジャンプしたところで、部屋が上がりきると思えないよ」
「やってみなきゃわからないじゃない！」
「いいけど……やる？」
「やっぱやめとくわ」
　月夜はあっさり拒否すると、床にごろんと横たわって、再び引きこもり体勢に戻ってしまった。
　菜砂もその横で座り込んだまま、何か考え込むように口をつぐんでいる。聡明な彼女にも、ここから出る手段が思いつかないようだ。
　わたしはさっき天井に投げつけた椅子を拾って、そこに座った。
　早くこんなところ出たい。
　いつもの部屋に帰りたい。
　平和な日常に戻りたい。
　日常——か。事件のない日々を、霧切と一緒に過ごすことができるだろうか。たとえわたしたちの周りで日常を取り戻すことができたとしても、彼女は次の事件を求めて、旅立っていってしまうのではないだろうか。
　わたしたちが一緒に帰れる場所なんてないのかな。
「お腹空いた……」
　月夜がまた欲求を訴え始めた。

「今、何時頃でしょうね……」
　菜砂もさすがに元気がなくなってきたようだ。
「大丈夫だよ、必ずわたしの仲間が助けに来てくれるから。正午に連絡を取り合うことになってるんだ。
もしわたしと連絡が取れないということになったら、絶対に誰かが来てくれる」
「それって、あと何時間後？」
「うーん……」
「へんな期待させないでよね」
　月夜は瞳だけをこちらに向けて冷たく云った。
「ねえ、ところでさあ」わたしは話題を変える。「犯人に心当たりない？　トリックは解けても、犯人がまだ誰なのかわからないんだよね。あなたたちの身の回りで、竹崎さんを殺害しそうな人」
「そんなのいないわよ！　どっかのヘンタイ誘拐犯でしょ？　そんな知り合いいたら、すぐに巡礼の旅に出てるわ」
　月夜が喚き始める。
「じゃあ竹崎さんについて何か知らない？　彼女に何かへんな噂とかなかった？」
「へんな噂？」
「あっ」菜砂が声を上げた。「そういえば人づてに聞いたことがあります。竹崎さんが中学生の頃、同じグループで仲良かった子を自殺に追い込んだことがあるとか……」
「何それ、私聞いたことない」
「月夜さんはクラスメイトに興味持たないから……」
「嫌ねえ、当たり前じゃない。ナズ以外の誰に興味持てるっていうのよ。ふふっ」
「月夜さんはもっと視野を広く持つべきです」
「えー、ナズもそういうこと云うの？　うちのパパみたーい」
「あのー、竹崎さんの話は？」
「えっと、私も人の噂話にそれほど興味がなかったので軽く聞き流しましたけど、竹崎さんは中学の時、クラスメイトからお金を持って来いって恐喝されていたそうなんです。でもある日、そのターゲットが竹崎さんから別の子に移ったらしくて。その子は竹崎さんと仲の良かった子だったそうです。噂では、竹崎さんがその子を十万円で売ったとか。実際は彼女の意思というよりは『十万持ってきたら次から別の子をターゲットにする』みたいに云われて、それに従った感じでしょうね。結果的に、その子は自殺しちゃったみたいですけど」
「気の毒な話だね……」

「噂話には尾ひれがついて、竹崎さんをもっと悪者呼ばわりするような人もいたみたいです。そもそも竹崎さんが恐喝グループの主犯格だったとか。真相はわかりません」
「充分動機になりそうだ」わたしは独り言のように呟く。「その自殺した子と仲良かった生徒とか、家族とか……誰か思い当たる人いる？」
「前にも云いましたけど、私たちは別に竹崎さんと仲がよかったわけではありませんので……」
「そっか……あ、じゃあそうだ、天秤座で思い当たる子はいない？」
「天秤座……？　他人の星座まで覚えていません」
「まあ、そうだよね……」
「私、ナズの星座知ってるわよ。ナズはね、獅子座！　私も同じ獅子座なんだ。お揃いよ！　うふふー」
　気のせいか月夜が妙なテンションになりつつある。閉じ込められている時間が長すぎて、精神に変調をきたしているのだろうか。
　ともかく犯人はまだわからないけど、犯罪被害者救済委員会の用意したトリックは見抜けたので、成績としてはまずまずだろう。むしろわたしにしては上出来だ。
　当面の問題はここからどうやって出るか……
　わたしは腕組みしながら、椅子の背に寄りかかった。
　その時、一瞬めまいを感じた。
　疲れているのだろうか――
　いや、今の感覚は！
　わたしと菜砂は顔を上げて互いに見つめ合った。
「ちょっ、ちょっと、何？　なんなの？　二人して、どうしちゃったの？」
「今、揺れた！」
「はい、確かに揺れました」
「全然気づかなかった」
　めまいのあとは、身体に感じるような動きは何もない。部屋は動いているのか、止まっているのか。それすらわからない。わたしたちは警戒するように、あちこちに目を配りながら、しばらく息をひそめていた。
　もしかしたら犯人が戻ってきたのかもしれない。
　なんのために？
　様子を見にきたのだろうか。
　わたしは音を立てないように立ち上がり、椅子を手に持った。用心のためだ。武器になるならなんでもいい。

もしこちらの部屋が上がったのだとしたら、相対的にあちらの部屋が下がったということになる。あちらを下げるには、けっこうな重さが必要だ。意図的にやったとしか思えない。そんなことができるのは、『リブラ女子学院』の仕組みを知っている人間のみ。

つまり犯人だ。

わたしは月夜と菜砂に、下がるように合図する。

入り口の戸が、がたがたと音を立てた。

来る！

ゆっくりと戸が開く。

やっぱり部屋は上がっているんだ。戸が廊下と繋がっている。誰かが入ってくる。

そこに姿を現したのは——

高級そうなスーツにサングラスをしたモデル体形の男。

「や、宿 木さんっ？」

思わずへんな声が出ていた。

「おや……五月雨さん」彼は街中でばったり会った時のようなありふれた挨拶をする。「おはようございます。事件の捜査中でしたか？」

「え？　ええ、そ、そうですけど……」何がなんだかわからない。「なんでここに？　宿木さんが？」

「話せば長くなるので、あとでゆっくりホテルのカフェでモーニングでも食べながらお話ししましょう。ところでお怪我などはありませんか？　随分憔 悴している様子ですが……」

「そりゃあ、もう、へとへとです」

「うしろの方たちは、事件の関係者？」

「そうです」

「では一緒に朝食でも」

宿木はにっこりと微笑む。

どういうこと？

菜砂がわたしの背後に近づいて、耳打ちする。

「あの人が、黒マント？」

「えっ、まさか……」

「知り合いなんですか？」

「知り合いも何も、仲間の探偵だよ」

「おかしいですよ。犯人でなければ、部屋を動かして私たちを外に出すことなんてできませんよ！」

「いや、でもっ」
「何かご相談でも？」宿木がエスコートするように片手を差し出しながら云う。「とりあえずこの部屋は一度出た方がいいんじゃないですか？」
「あ、はいっ」わたしは返事してからすぐに振り返って、菜砂たちに小声で云う。「また閉じ込められると困るから、今はここを出よう。君たちはわたしのうしろにいて」
　菜砂と月夜は寄り添い合いながら肯いた。
　宿木が廊下を歩いていく。
　わたしたちはついに天秤の皿から一歩外に踏み出した。けれど感慨よりも、戸惑いの方が大きい。自分の理解力をはるかに超える出来事が起こっているようだ。
　わたしは宿木から三メートルくらいの距離を保ちながら、彼に続いて廊下を進む。
　やがて廊下は終わり、宿木が一足先に礼拝堂に出た。そこで彼は一度振り返って、わたしたちを待つ。ある程度距離が縮まると、彼は再び歩き出した。
　次の瞬間、わたしの視界の左側から、黒い影が飛び出してきた。
　黒マントだ。
　声を上げる暇もなかった。
　黒マントは手に持っていた鉄パイプを宿木の頭部に振り下ろした。
　鮮血が飛び散る。
　目を逸らすこともできなかった。
　宿木はその場に崩れ落ち、事切れたように横たわった。
　わたしの背後で月夜たちの悲鳴が上がる。
　フードを目深に被った黒マントが、こちらを向いた。
　許せない……
　許せない！
　人殺し！
「わたしは五月雨結、探偵だ！　お前はわたしを傷つけることはできない！」わたしはありったけの声で叫ぶ。「お前が誰かを傷つけようとしたら、わたしが盾になる。ルールを破る覚悟があるなら来い！」
　わたしが黒マントに一歩近づこうとすると、相手は一歩後退する。
　荘厳な静寂に満ちた礼拝堂で、わたしと黒マントは対峙したまま、血のにおいのする一秒一秒を刻んでいた。
　黒マントは血まみれの鉄パイプを構えて牽制しながら、さらに後退しようとする。

「逃げるつもり？」
　わたしが云うと、黒マントは足を止めた。
　迷っているみたいだ。この事態は想定していなかったということか。
「この距離なら二歩で届く」わたしは足元を指して云う。「もし背を向けて逃げ出したら、すぐに捕まえる。攻撃してきたら、傷を覚悟で受け止める。わかった？　どっちにしろお前の負けなんだ。諦めて、それを置け」
　いつの間にかわたしたちはエントランスに近い場所まで移動していた。
　このまま外へ逃げるつもりだろうか。
　わたしから見て左手にエントランスがある。宿木が現れたことや、黒マントがそちら側から飛び出してきたことを考えると、入り口を封印していた板はすでに外されているとみていい。外へ出られるのだ。
　わたしはそちらに意識を向ける。黒マントはそちらへ逃げていくかもしれない。
　一方、黒マントの背後には、棺のあった部屋へと続く廊下がある。黒マントがだんだんとそちらへ後退しているのも事実だ。前みたいに円形の部屋に逃げ込んで姿を消すつもりかもしれない。
「もうトリックはわかってる。逃げたって無駄だよ」わたしは云った。「あとはお前の正体を暴いて、告発するだけだ」
　黒マントの正体――
　わたしは目の前の人物を改めて観察する。大きく広がったマントでごまかしているが、随分と小柄だ。女性か、子供か。
　一体誰だ？
　謎解きゲームである以上、今まで一度も姿を見せていない人物が犯人だったという真相はあり得ないと思うけど……犯人に該当する人物が思い当たらない。それとも『リブラ女子学院』の事件はまだほんの始まりで、これから続々といろんな殺人が起きる予定だったのだろうか。
　黒マントの顔はフードによってほとんど隠されているが、口元が少しだけ見える。
　その口がにやりと笑った。
　――どうせわからないんでしょ？
　そんなふうにわたしを嘲笑っている。
　挑発に乗るもんか。
　そう思った次の瞬間――
　黒マントが背を向けて、廊下に向かって駆け出した。
「あっ！」

出遅れた！
　わたしは床を蹴る。
　逃がすものか――
　と思いきや、黒マントはわたしのすぐ目の前で、床につまずいて派手に転んだ。
　その拍子に、フードの内側から眼鏡が飛び出して、床に転がる。
　……眼鏡？
　ともかくチャンスだ。
　わたしはここぞとばかりに黒マントの背中にのしかかろうとする。
　すると黒マントがくるりと横向きに反転し、一瞬で仰向けになった。
　しまった！
　罠？
　フードが外れて、目が合う。
　黒マントは左手でわたしの襟首を掴んで引き寄せ、右手に持った銃のようなものを、左胸に押しつけてきた。
「捕まえた」
　彼女は云った。
　聞き覚えのある声。
　見たことのある顔。
「これ、わかります？　釘打ち機。動いたら藁人形みたいに心臓に釘を打ち込みます」
「なんであなたが……」
　彼女は仲間の探偵の一人、水井山幸だった。

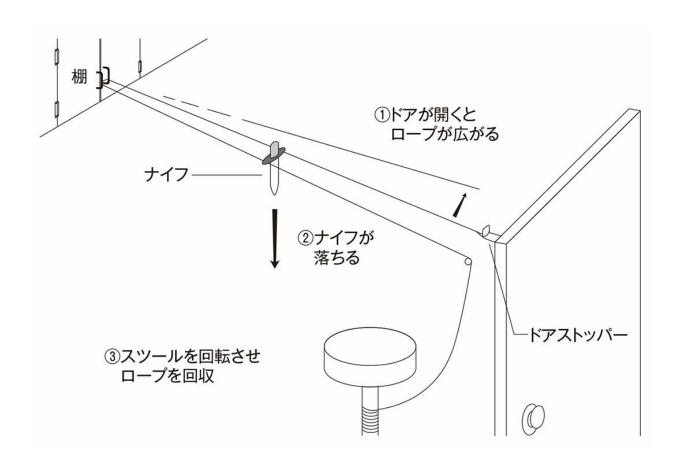
ＢＡＲ『グッドバイ』　――水井山幸

　１月11日午後11時11分――
　数字のゾロ目は時々見かけるけれど、七つも並ぶと神秘すら感じられる。惜しむらくは十一月ではなくて、一月だったこと。七つより八つの方が美しい。
　建築の世界では黄金比やフラクタルといった美しさの法則というものが存在する。時刻のゾロ目が気になるのも、一種の職業病だろう――
　水井山は携帯電話の液晶画面に並んだ数字を見ながら考えていた。ひと気のない夜の商店街に、寂しく外灯が並んでいる。奇しくも七つ。まるで数字の１みたいな形をした外灯だった。
　シャッター街の静寂を破るように、誰かが走って近づいてくる。
　建物の角から姿を現したのは、八鬼弾だった。
「んあっ？　どうなってんだこりゃ？　なんでお前がここに？」
　八鬼は水井山の前で急ブレーキをかけるようにして立ち止まった。
「担当していた事件が早めに片づいたのですよ」
　水井山は答える。
「す、すげーな、あんた……オレらがスタートしてからまだ半日しか経ってねーぜ？」
「たいしたことありませんでしたわ」
「そうか……いや、それよりこっちにガキが来なかったか？　ピアノの発表会の帰りみてーな格好したガキで……」
「ピアノの発表会？　いえ、見かけませんでしたけど」
　水井山には心当たりがあったが、説明するのが煩わしいので何も云わなかった。しかしあの奇妙な子供が、ここにも現れたのだろうか。それともまったくの別人？
「あの野郎……どうもあのガキが怪しいんだよ」
「事件ですか？」
「ああ、目の前で人が殺された。嘘みたいな話だが、本当に予告通り密室殺人が起きたんだ」
「どんな事件だったのか、ぜひ教えてください」
「いいけどよ、オレたちと別れる前はあんなに渋ってたのに、なんかすげーやる気満々だな。どうしたんだよ。なんかあったのか？」
「いえ……ほんの学術的興味ですわ」

「学術的興味ねえ」
　八鬼はBAR『グッドバイ』で起きた事件を説明した。
　被害者から電話を受け、現場に駆けつけた時点では、被害者はまだ生きていたのに、扉を開けて中に入ると殺されていた——
「オレたちの目の前で被害者が刺されたことは間違いないんだよ。だが扉には鍵がかかっていたし、裏口も施錠されたままだった。もちろん店内に犯人はいない。おかしいだろ？　密室で人が殺されてんのに、中に誰もいないんだぜ？　それで裏口から外に出てみたら怪しい子供がいて……」
「その子供は関係ないと思います」水井山は肩を竦めながら云う。「確か挑戦状には、凶器のナイフの他に、ロープや毒物が記載されていましたよね」
「毒物？」
「カリブドトキシン。サソリの毒ですね。呼吸困難などを引き起こす致死性の毒物です」
「何っ？　まさかあの店の中にサソリがいたのか？　あっぶねえ！　オレも死ぬところだったじゃねえか」
「いえ、サソリはいないと思いますよ。もしいたら、挑戦状にはサソリの品種名が記載されていたのではないでしょうか」
「あ、ああ、それもそうだな」
「おそらくナイフに毒物が塗布されていたのだと思います」
「凶器に塗ったのか？　飲ませたとか、注射したとかではなく？」
「いくら用量を計算しても、目撃者が現場に来るタイミングを見計らって息絶えるようにするのは困難です。もし八鬼さんが渋滞に捕まって、現場に訪れるのが一時間遅れていたら、トリックが成立しなかったかもしれませんものね」
「うーん、まあそうだよな。じゃあなんでわざわざナイフに毒を塗ったんだ？」
「相手を確実に殺害するためでしょう」
「はあ？　けっこうでかいナイフだったぜ？　あれで背中を一突きすりゃあ、誰だって死ぬってわかるだろ。ややこしいサソリ毒なんか必要ねーって」
「犯人はそう考えていなかった——というより、トリックの都合上、完璧に殺すには毒物も必要だった、といったところでしょうか」
「おいおい、なんだかトリックがわかってるみてーな云い方だな」
「わかっていますよ」
「は？　え？」
「一瞬でわかりました。ありがちな『早業殺人』のパターンじゃないですか」

「ハヤワザ殺人？　なんだよそのかっこいいネーミングは」
「密室を開放すると同時に現場に踏み込んだ目撃者が、室内にいる被害者を素早く殺害するというパターンです。ご存じありませんでしたか？」
「ま、待てよ、オレはやっちゃいねーよ！」
「そうですね、あなたではないと思います」
「でも被害者に近づいたのはオレだけで、他のやつは入り口から中に入ってもいなかったぜ」
「では犯人はあなたですね」
「ふざけんなって。俺じゃねーよ」
「ふふ、冗談です。犯人は八鬼さんたちに同行した洗群三という人でしょう。彼が受けた電話も、密室を構成する要素の一つです。彼がいなければ密室の重要な部分が欠けてしまいます」
「あの不動産屋が？　そりゃあ、鍵を管理してるのはあいつだし、店の中に入るのは自由だっただろうけど……現場に踏み込んだ時、あいつはオレよりうしろにいたんだぜ？　ハヤワザ殺人はできねーよ」
「いいえ、可能です」
「どーやって？」
「説明が聞きたいのですか？　無駄なのに」
「無駄？　いいから説明しろよ！」
「あら、聞こえてしまいました？　ごめんなさい。犯人はカウンターに被害者を拘束していたのですよね？　そしてカウンターの上には、携帯電話と、ボールペンと、マッチ箱。これらはすべて犯人が意図的に置いたものです。それぞれ使い道がおわかりですか？」
「そりゃあ……ケータイは外と連絡取らせるためじゃねーの？」
「その通りです。携帯電話によって、被害者は扉が開かれる直前まで生きていたと証明されました」
「ボールペンにも意味があるのか？」
「ええ。被害者は両手両足を拘束されていたのでしょう？　その状態で、どうやって携帯電話をかけてきたのか不思議に思いませんでしたか？」
「あ、ああ、そういえばそうだな」
「被害者は目の前に転がっているボールペンを口に咥えて、携帯電話の通話ボタンを押したのです。なんとかして助かろうとする心理を、巧みに引き出したのですね。携帯電話にはあらかじめ洗群三の携帯電話の番号が入力され、あとは通話ボタンを押せば発信されるところまで準備されていたと思われます。しかも他のボタンが機能しないように、基盤に絶縁体を挟んでおくなどしておいたでしょうね」
「ほほう、じゃあマッチ箱は？」

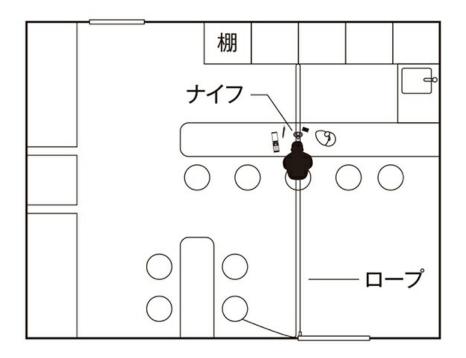
「マッチ箱には店名が書かれていたそうですね。被害者にそれを読み上げさせ、自分が今BAR『グッドバイ』の中にいるということを証明させたのです」
「つまり被害者は生きてそこにいるってことを、それらの道具を使ってオレたちに示したってわけか」
「そういうことです。『実況中継される殺人』のパターンでもありますね」
「お前、殺人は専門外のくせにやけに詳しいな……」
「そうですか？　ふふっ」
　会話している間に、水井山はそれとなく細い裏路地に移動する。八鬼も無意識のうちについてきていた。
「それで？　オレたちはまんまと犯人の計画通りに、密室のドアの前までたどり着いた。そのあと犯人はどうした？」
「あとは探偵役がドアを開けるのを黙って見ていればいいのです」
「はあ？」
「ちょっとした機械的なトリックです。古典的な『針と糸』のパターンですよ。ロープを使うんです。ロープの先端は入り口のドアの上の方、たとえばL字型に突き出ているドアストッパーに結び付けます。ちなみにドアは店内に向かって開くようになっていましたね？」
「あ、ああ」
「ロープはドアストッパーから、店内奥に向かって伸び、適当な場所を中継して、最終的には何処かに結びつけておきます。たとえば……回収しやすさを考えたら、回転するスツールなんかいかがでしょう」

棚
①ドアが開くと
ロープが広がる
ナイフ
②ナイフが
落ちる
ドアストッパー
③スツールを回転させ
ロープを回収

「ちょっと待て、オレらが現場に踏み込んだ時、ロープなんかなかったぞ」

「いいえ、あったのに気づかなかっただけです。まずロープの大部分は、頭上に張り巡らされていたため、気づきにくかったというのが理由の一つ。もう一つは、意図的に店内の照明が落とされていたからです。店内の照明は、カウンターに突っ伏した被害者のすぐ近くにあるスタンドライトのみだった。その状況だったら、店内に入った直後から、間違いなく視線は屍体に釘づけになります。ミスディレクションというやつですね」

「くそっ……気をつけちゃいたが、完全に目の前の屍体に目を奪われていたぜ。だが頭上にロープなんか張り巡らせたところで、一体なんの意味があるっていうんだ？」

「ロープを張る際のポイントは一点のみ。被害者の真上に、ナイフを設置できるようにすること。あとはもう大体、想像がつきますわね？　ドアを開けると、ロープが引っ張られて動きます。その動作によって、ナイフが被害者の背中目がけて落ちる仕組みになっていたのです。ただしナイフが落ちるのは、ドアが大きく開かれた時のみで、細く開けた場合には落ちないようになっていたと思われます。そうしておかないと仕掛けた本人が店の外に出られませんからね」

棚
ナイフ
ロープ

「まさか――それじゃあ、オレがドアを勢いよく開けたせいで被害者は死んだっつうのか？」
「そういうことです。でも一メートル程度の高さからナイフを落として刺したところで、被害者を絶命させられるとは限りませんよね。そのため犯人はナイフに猛毒を塗っておいたのです。ですから、八鬼さんはそこまで責任を感じる必要はないと思います。毒が塗られていなければ、死んでいなかったかもしれませんからね」
「だがオレは完全に犯人の思い通りに動く人形だったっつうわけだ……ロックンローラーの風上にも置けねえだろ、こんなの！」
「怒るポイントがよくわかりませんわね」
　水井山は苦笑しながら、眼鏡のフレームを押し上げた。
「しかしお前、ほんとすげーな。一瞬で解いちまうなんてよ。実はこっちの方が才能あるんじゃねえか？」
「ご冗談を。わたくしは平和主義者です。血なまぐさい現場に駆り出されるなんてまっぴらです。それより、思っていたよりずっと簡単すぎるのが気になります」
　やはり真っ先にここを選んで正解だった。
　安い事件では霧切響子にあっさり解かれてしまう。
　少しでもコストを釣り上げておかないと――
「云うほど簡単じゃねーと思うけどな……」
「それより、いいんですか？」
「何が？」
「トリックに使われたロープ、今頃犯人に回収されてしまっていますよ」
「あっ！　あいつまだ現場にいるはずだ！　ちょっと捕まえてくる！」
　八鬼は身体を反転させ、駆け出そうとした。
　それを見計らって、水井山は太もものホルスターから鉄パイプを抜き取る。
「よかったらお前も一緒に来るか？」
　八鬼が振り返った。
　水井山はとっさに腕を背後に回し、鉄パイプを隠した。
「あ、はい」
「よっしゃ、ロックの始まりだぜ！」
　再び駆け出そうとする八鬼の後頭部を、水井山は鉄パイプのフルスイングで粉砕した。
　八鬼はカエルのような声を出して、その場に突っ伏した。脈を取ると、まだ反応があったので、とどめにもう一度鉄パイプを振り下ろす。それで八鬼は完全に息絶えた。

わずかな時間で、二つの事件の詳細を知ることができた。水井山は自分の働きぶりに満足していた。

五月雨結を立ち止まらせるためには、闇雲に罠を仕掛けても意味はない。先回りして地の利を得る。それが戦いに勝つための常 套手段。

さて、これからが本番だ。

リブラ女子学院　――五月雨結

「あなたが犯人だったんですか……水井山さん」
「そういうことです」水井山はわたしの胸に釘打ち機を押しつけたまま肯いた。「予想通り、あなたが霧切響子と離れて単独行動することになって、こちらとしては勝ったも同然かと思いましたけど、意外にもこの『リブラ女子学院』の秘密がわかってしまったみたいですね。わかったところでどうにもならないはずでしたが、残念ながら邪魔が入ってしまいました」
「武田幽霊屋敷の事件で、あなたが容疑者の一人だったのも、計画の一つだったんですか？」
「そうかもしれませんね」
「かも？」
「すべては龍造寺氏の采配でしょう」
　様々な要素が複雑に交差し、今この時が形作られている。それも結局は、龍造寺月下の手の中ということか。
「どうして竹崎さんを殺したんですか？」
「二年前にスクールカウンセラーをやっていた頃、彼女とはちょっとした因縁がありまして。詳細は割愛しますわ。この手の長話は聞き飽きているでしょうし、わたくしも腕が疲れますからね」
　水井山は釘打ち機を揺すって示す。
「水井山さん、あなたが犯人だというなら、『黒の挑戦』についてはよく知っているでしょう。もうあなたのゲームは終わったんです。わたしを殺しても、あなたの負けは変わりません」
「そうですね、わたくしのゲームは負けました。でも残りのゲームはどうかしら？」
「えっ……」
「十二の密室を解決しなければ龍造寺氏に勝ったことにはならない。そうでしょう？」
　わたしは彼女の意図が読めずに、ただ肯く。
「察しがよくないですね。説明しなければわかりませんか？　わたくしはまだ龍造寺氏に引退してほしくないのですよ。もちろん探偵としても、犯罪被害者救済委員会の幹部としても」
　そうか……彼女は龍造寺月下の信奉者の一人だったのか。
　龍造寺の活躍ぶりは、他の探偵と比べても段違いだ。多くの探偵にとって目標であり、憧れでもある。わたしも少なからず尊敬していたし、今でもその気持ちは完全には失われていない。
「わたくしもかつては、人を救えるような人間になりたいと考えたことがあります。けれどわたくしには決定

的に足りないものがありました。それは信念です。信念を貫くというのは、言葉で云うのは簡単ですが、実行することは限りなく難しいものです。能力が及ばずに断念する、周囲の意見に妥協する、権力によって屈する……信念というものは様々な理由から簡単に折れてしまうものです。けれどわたくしが龍造寺氏の表情から読み取ったものは、美しいカタチをした信念でした。この世界の法則に従えば、『美しさ』は『安定性』なのです。分子構造から黄金比に至るまで――それは精神的なカタチにも云えることだとは思いませんか？」

　水井山は興奮気味に語った。

　わたしには彼女が何を云っているのかよく理解できなかったけれど、龍造寺に心酔しているのだろうということはよくわかった。

「わたしがここで水井山さんに殺された場合、確かに十二の事件すべてを解決するという条件は果たせなくなる。でも……それで龍造寺さんが勝ったと喜ぶと思いますか？　あくまで公平性にこだわるあの人が、こんなやり方で勝敗をつけられて、納得するとは思えません！」

「知ったふうなことを云いますのね」水井山は怒ったのか、釘打ち機の先端をぐりぐりと強く押しつけてきた。「あなた、勘違いしてますけど、わたくしは別にここであなたを殺すつもりはありません。当初の予定通り、タイムリミットまであなたを死なない程度に監禁し続けます」

「わたしを監禁しても、必ず助けが来る。わたしはそう信じています」

「たとえば霧切響子？　そうですね……彼女がもっとも厄介な相手ですね。でも彼女はここまで来られるかしら？　あなたの携帯電話はわたくしが預かっているのですよ。定時連絡では、あなたの口から彼女に無事を伝えてもらいます」

「わたしが彼女に危機を知らせたら？」

「何もかも終わり。すべてを台無しにする覚悟で、強制的にゲームを終わらせます。つまりあなたを殺すということです」

「彼女はいずれここまで来る。他の事件を全部解決したあとで、必ず来る。たぶんあなたが思っているよりもずっと早くね！」

「もちろんその対策もすでに考えていますわ」

「対策……？」

「昨日、あなたたちと別れてから、わたくしは約束通り『中世西欧拷問器具博物館』の事件を調査してきました。またそのあとすぐ、『BAR「グッドバイ」』も調べてきました。ちなみに、どちらもすでにわたくしには犯人もトリックもわかっています」

「えっ」

「これがどういう意味かおわかりですか？」
「……わかりません」
「わたくしはすでに『出題』とその『答え』を知っています。あなたたちよりも早く、正確に。この情報をあなたたちに渡すも渡さないも、わたくしの意志次第……」
「自分たちで調べるから別にいいです！」
「まだわかっていませんね。あなたたちは周回遅れなのですよ。あなたたちがうしろの方を走っている間に、わたくしは事件に嘘を紛れ込ませることが可能です。もっとも、わたくしには『答え』の方を歪めることはできません。けれど『出題』の方ならどうでしょう。ニセの証拠品、ニセの目撃情報、ニセの関係者などなど――」
「なっ」
　なんてことを考えているんだ、この人は……
「これからわたくしはあらゆるニセ情報をばらまくつもりです。現場に落ちている証拠品一つとっても、それが真か偽か、あなたたちには判断する術がありません。真と偽を選り分けているうちに時間切れになるでしょう」
「情報源はあなただけじゃない！　博物館はともかく、BARの方は八鬼さんが向かっているはずです」
「彼は死にました」
「八鬼さんから話を聞けば――えっ、今なんて……」
「彼は死にました」
「……死んだ？」
「わたくしがやったんですけれどね。ふふっ、余計な罪を重ねてしまいました。わたくしはすでにゲームオーバーしているので、名前を変えて人生をやり直すというリセットができなくなってしまいましたが、龍造寺氏を救うことができるのなら、こうして人生を懸ける意味もあったというものです」
「なんでそこまで龍造寺さんを……」
「この世でもっとも多くの人を救ってきた英雄を、今まで誰が救おうとしましたか？」水井山は語気を強めて云った。「誰も……あの方の苦悩を考えもしません。あの方にだって救われる権利はあるはずです」
「あなたの行為が救いだって云うんですか？　あなたはわたしと龍造寺さんの真剣勝負を邪魔してるだけじゃないですか！」
「うるさい！　何が真剣勝負だ！」
　あの冷静な水井山が激昂していた。
　彼女の逆鱗に触れてしまったのだろうか。

「何が……何が真剣勝負よ……なんであなたなんかが選ばれるのよ……」

水井山の手が震えている。

彼女はわたしを傷つけることはできない。

わたしはそう確信した。これは龍造寺のゲームでもある。彼女がそのルールを破れるはずがない。

「――動かないで」水井山は空いている方の手で、目もとを拭う。「打てないと思っているとしたら、お馬鹿さんね。やる時はやります。そこで倒れている男みたいになりたくなければ……」

水井山がちらりと宿木の方へ目を向ける。

その途端、彼女の瞳が大きく見開かれた。

「いない！」

彼女の言葉にわたしは思わず振り返る。

さっきまで床に伸びていた宿木の身体がなくなっていた。

床には引きずられたような血痕が残されている。

血痕は廊下へと続いていた。右の塔に繋がっている廊下だ。

「あいつら！」

水井山が口走る。

そうか、月夜と菜砂の仕業だ。

彼女たちの姿も見えない。廊下の扉がいつの間にか閉まっている。

「下がって！」

水井山が釘打ち機を突き出しながら、わたしに命令する。廊下の入り口は、わたしの背後にある。わたしは両手を上げ、云われるままうしろ向きに歩いた。

あえてゆっくりと。

やがてわたしの背中に扉がぶつかる。

「開けて」

もたついているふりをしながら、扉をうしろ手に開ける。わたしたちは廊下へと進んだ。

首をひねって、廊下の先を見る。

月夜と菜砂が宿木の両脇を持ち上げて、塔の部屋へと運び入れようとしていた。

「止まりなさい！」

水井山が廊下の奥へ向けて、わたしの肩越しに叫ぶ。

しかし月夜たちは足を止めなかった。

水井山がわたしを釘打ち機の先端で押し出すようにしながら、廊下の先へと進もうとする。

背後で戸が閉まる音が聞こえた。
　どうやら彼女たちは無事に部屋に入ることができたようだ。
　やった。
「なんでこんなことになるのっ！」
　水井山は地団太を踏んでいる。
　ようやく戸の前にたどり着く。
　水井山が空いている方の手で戸を開けようとした。
　しかし戸が開かない。
　天秤が作動したのだ。
　月夜たちはそれを狙って、宿木を引きずっていったのだろう。部屋を下げるには、重しが必要だと考えたに違いない。
　しばらくして戸が開くようになった。
　しかし開けてもそこに月夜たちはいなかった。代わりに竹崎花の屍体が横たわっている。
「巧く逃げられたようですね」
　わたしは皮肉を込めて云った。
「まあいいです。問題ありません」水井山は歯噛みしながら云う。「彼女たちは標的ではないし、むしろ退場してもらった方がせいせいします」
　彼女は強がるように云って、釘打ち機の先端をわたしの頭へと移した。
「手をうしろに回してひざまずきなさい」
「あの……」
「いいから早くしなさい！」
　大声で云う。
　さすがに彼女も切羽詰まってきているようだ。あまり刺激するのはよくない。
　わたしは命令に従う。
　いよいよ追いつめられた。
　こんな時、霧切響子ならどうする？
　……だめだ、彼女とわたしとでは基礎能力がかけ離れている。わたしは彼女みたいに護身術を使えないし、機転も利かない。
「予定通りゲームが終わるまで、あなたにはここで大人しくしてもらいます」
　水井山は何処からともなく取りだした手錠をわたしの手首にかけた。

手錠をかけられるのはこれで何度目だろう……

「食事もちゃんと用意してあげます。トイレやお風呂はわたくしの気分次第ね。わたくしの機嫌を損ねたら、そういうサービスはなくなると思ってください。それから――」

水井山が監禁の心得を説明し始めた時、今度は廊下の反対側――礼拝堂の方から、人の声が聞こえてきた。

「おーい、探偵さーん。何処行っちゃったんですかー？　閉じ込められたと思ったら、急に外に出られるようになったんですけどー」

間の抜けた男の声だ。

一体誰だ？

「あ、いたいた」

彼らは開いたままの扉から廊下に入ってきた。

「探偵さーん……って、あれ？　誰ですか？」

背の低いトレンチコートの男がのんびりと近づいてくる。そのうしろから、身体のがっちりとしたパンク風の青年と、何故かチャイナドレスを着た女性が一緒に入ってきた。

このへんな集団は何？

わたしの頭ではまったく理解できないことが起こっていた。

どうやらそれは水井山も同じだったようだ。

彼女は当惑した様子で、わたしに向けていた釘打ち機を、とっさに彼らに向けた。

「ち、近づかないで！」

「おい、コロンボ。なんかやばくねえか？」

パンク青年がようやく異変に気づいたようだ。

「逃げて！」

わたしは彼らに向けて、力の限り声を上げた。

「先輩……どうしましょう……逃げてって云ってます……」

「逃げろだって？　そりゃあ、助けてくれって意味だ！　行くぞ、コースケ、エラリー！」

トレンチコートの青年がこちらに向かって走り出した。

「ったく仕方ねーな！」

パンク風の青年とチャイナドレスの女性が続く。

何考えてるの、この人たち！

水井山は狼狽した様子で釘打ち機を構え――

震える指で引き金を引いた。
バシュッと音を立て、ガス圧により太い釘が打ち出される。
「エラリー！」
トレンチコートの青年が声を上げた。
チャイナドレスの女性が右手に持っていた傘を広げる。
釘は傘に刺さり、貫通せずに頭の出っ張りを残して止まった。
「跳べ！　コースケ！」
「ほらよっ」
パンク風の青年が傘の向こう側から飛び出し、巨大な弾丸となって、水井山にドロップキックを食らわせた。
小柄な水井山は驚くほど軽々と吹っ飛び、戸に全身を打ちつけた。その衝撃で空気が震えたほどだ。水井山の身体はそのまま床に崩れ落ち、魂の抜けた人形のように横たわった。
「お、おい、死んでねーだろうな？　俺まで人殺しになるなんて嫌だぜ？」
パンク風の青年が立ち上がって、青ざめた顔で云う。
「大丈夫……生きてる……」
チャイナドレスの女性が脈を取りながら云う。
「危ないところでしたね、お嬢さん」トレンチコートの青年が近づいてきて云った。「我々は奥羽大統一大学ミシュテリ研究会にょ──」
「カミカミじゃねーか！　はー、これが部長なんだよなあ」
「部長……かっこ悪いです……」
「あ、あの……ありがとうございます」わたしはまだ事態を飲み込めていないが、とりあえず頭を下げた。「手錠を外してもらえますか？」
「よしきた！」
トレンチコートの青年がポケットからヘアピンのようなものを取り出し、わたしの手錠の鍵穴に突っ込んだ。五分ほど経って、ようやく解錠された。途中何度も「あれ？　おかしいな」と呟くのが聞こえたけれど、結果的に開いたからまあいいか。
外れた手錠で水井山を拘束する。
これで一安心──
わたしは安堵の息を吐き、その場にへたり込んだ。

謎の三人組は『枯尾花学園』の事件で宿木と知り合ったらしい。ミステリ研究会のコロンボ、コースケ、エラリーというそうそうたるメンバーだ。

彼らは閉ざされた『枯尾花学園』からヘリで脱出するという冒険を経たあと、宿木の指示でこの『リブラ女子学院』まで直接飛んできたという。当初は宿木だけがヘリを降りるつもりだったようだが、ミス研メンバーも事件解決に協力するために一緒に降りた。ヘリは『枯尾花学園』事件の犯人を乗せたまま、何処かへ飛び去ってしまったという。

それから宿木たちは『リブラ女子学院』の入り口の封印を破って中に侵入した。彼らは最初に左の廊下へ進んだようだ。ミス研メンバーが我先にと部屋に入り、うっかり戸を閉めてしまったところで、天秤が動き出す。ミス研側は三人と棺二つにマリア像。わたしたちの方は屍体を含めて四人。重さのバランスは微妙なところだけど、たぶんミス研側に男性（主にコースケ）がいたぶん、重かったのではないかと思う。ちなみに宿木はミス研から遅れて歩いていたため、閉じ込められずに済んだようだ。

そうして結果的にわたしたちのいた部屋が浮上し、外に出られるようになった。

この時、犯人の水井山は、おそらく外に出かけていたのだろう。わたしたちを閉じ込めたあとなら外出も自由にできたはずだ。入り口の封印は外からし直せばよい。しかし戻ってきたら封印が破られている。慌てて飛び込んでみたら、いるはずのない宿木が目の前にいたため、とっさに殴り倒した——といったところだろう。

水井山を拘束したあとで、わたしたちは左の塔へ移動し、ありとあらゆるものを部屋に運び込んだ。外に転がっている大きな石や、入り口の封印に使われていた板など……一度戸を閉めて、天秤が動かなかったらやり直し。何度かそうしているうちに、やっと天秤が動き出した。

急いで右の塔へ移動する。

戸を開けると、月夜と菜砂が怯えた様子でこちらを見ていた。けれど戸を開けたのがわたしだとわかると、二人とも泣きながら抱きついてきた。

「その人、まだ生きてるの！　急いで病院に連れていってあげて！」

月夜が宿木を指しながら云った。月夜と菜砂のセーラー服は血まみれだった。ずっと宿木に付きっきりだったのだろう。

「あの人が、この部屋に逃げ込もうって提案してくれたのです。おかげで助かりました」

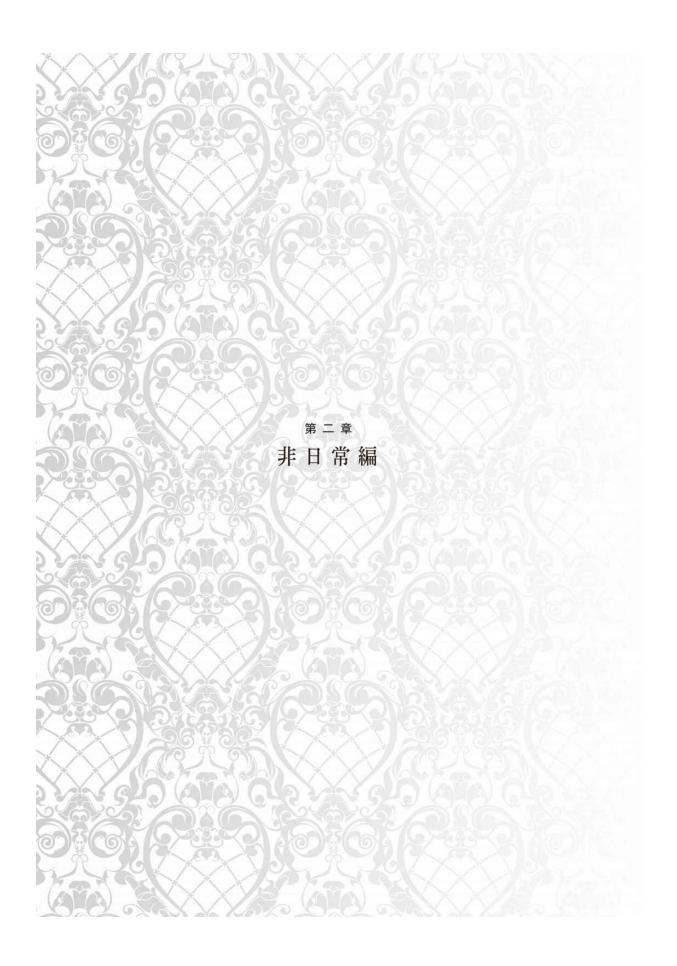
菜砂が云う。

彼らが右の部屋の重しになってくれたことで、再び天秤が作動し、閉じ込められていたミス研メンバーが外に出られるようになったのだ。おかげでわたしも絶体絶命の危機から救われた。

時刻は十二日の午前七時を過ぎたところだった。

こうして『リブラ女子学院』の事件は終わった。

第二章

非日常編

寮に何度目かの朝帰り。

すでに一時間目の授業が始まっている時間だったので、廊下では誰ともすれ違わなかった。ひと気がないせいか、いつもの見慣れた光景とは微妙に違う。知らない場所に迷い込んでしまったような、奇妙な違和感があった。

わたしは救いを求めるように部屋へ急ぎ、扉を開ける。

けれど——そこに霧切はいなかった。

きっと彼女なら、すでに事件を解決して、ベッドで眠っているんじゃないかと思ったけど、布団の中は空っぽだった。温もりもない。彼女はまだ帰ってきていないようだ。

わたしはベッドに倒れ込むと、そのまま眠ってしまった。夢も見なかった。それは死んだような眠りだった。

鐘の音が聞こえる——

はっとして、身体を起こした。

ここは——？

わたしは冷や汗をかきながら周囲を見回す。しかし異様な殺人現場や、不気味な建物の中ではなく、わたしの部屋だった。よかった。無事に戻って来られたんだ。わたしは貧血性のめまいを感じながらも、日常風景の中に帰って来られたことをようやく実感した。

時計を見ると、ちょうど正午になったところだった。さっきの鐘の音は、昼を告げる学校のチャイムだ。

携帯電話を確認する。定時連絡の時間だ。正午ちょうどに八鬼から、それから十五分ごとに宿木、水井山、霧切の順番で連絡が入ることになっている。

けれど正午から五分過ぎても、八鬼からの連絡はなかった。

わたしは寝癖をつけたまま、寮の食堂に出て、勝手にテレビをつけた。昼のニュースが流れている。あるシャッター商店街の一角で起きた殺人事件と、八鬼が亡くなったことを報じていた。

やっぱり殺されちゃったんだ……

とっつきにくい人だったけど、とても協力的でいい人だったのに。

わたしたちが捜査に誘わなければ、彼は死ぬこともなかっただろう。どう云いつくろっても、彼の死の責任はわたしにある。わたしが殺したようなものだ。わたしが。殺した。わたしが——

無人の食堂で顔を突っ伏し、まぶたの裏の暗闇に閉じこもる。

これがわたしの選んだ道か。
これが霧切の進んできた道なのか。
自分のすべてをかけて誰かの命を守っても、一方であっけなく失われていく命がある。取捨選択。わたしは誰を救うべきだったのか。
わたしに才能があれば——救えたはずなのに。
どうかもっと多くの人を救わせてください……
その時、手の中に握り込んだ携帯電話が突然震えた。知らない番号から着信だ。
「……はい」
『五月雨結さんですか？　私、遠秋津菜砂です』
「あ……」わたしは嬉しくなって、思わず顔を上げていた。「ナズちゃん！　どうしたの？　なんでこの番号知ってるの？」
『探偵の宿木さんからお願いされたのです。十二時十五分になったらかけてくれって。定時連絡をすることになっていたのでしょう？』
「ああ、うん……まあそうだけど。律義な人」
宿木と菜砂と月夜の三人は、あのあと同じ病院に運び込まれた。わたしも病院へ行くことを勧められたが、断った。一刻も早く寮に帰って、現実感を取り戻したかったからだ。
『宿木さんは現在、集中治療室にいます。病院に運び込まれる時点では意識がありましたが、頭を怪我しているので、しばらくは予断を許さない状況だそうです』
「そう……ナズちゃんたちは大丈夫？」
『私たちは何も問題ありません。月夜さんも今はぐっすりと私の隣で休んでいますよ』
「よかった……」
『それで、宿木さんからの伝言ですけど——』
菜砂は『枯尾花学園』事件の真相について語った。体験していない自分には、何から何まで奇妙な内容だった。
「ありがとう、これで一つクリアだよ。宿木さんには感謝してもしきれないよ」
彼がいなければわたしたちは『リブラ女子学院』に閉じ込められたままだったし、事件も解決していなかった。そのうえ彼は『枯尾花学園』の事件まで片づけてきてくれた。やはり探偵ランク『２』は別格だ。
しかも最後までわたしたちを裏切らなかった。水井山の件もそうだけど、探偵にはつくづくろくな目に遭わされていないので、仲間でいてくれただけでも涙が出るくらい嬉しい。
「ところでミス研の人たちは？　付き添いで一緒に病院に行ったみたいだけど……」

『宿木さんの無事を確認したあと、警察署に行きました。事件のことを話しに行くそうです』
「そっか、じゃあそのへんのことはあの人たちに任せちゃっても大丈夫そうだね」
『ええ。それから……宿木さんが最後にこう云ってました。やむを得ず戦線を離脱するが、私は彼女のために戦いをやめるつもりはない――』
「彼女？」
　その言葉から思い当たるのは一人しかいなかった。
　そうか……それほど大事な人だったんだ。宿木という人がこちら側にいる理由が、なんとなくわかった。彼もまた、たまたまこちら側にいるだけなのかもしれない。
『伝言は以上です。それにしても五月雨さんはすごいですね。同じ高校生なのに、見ている世界が全然違います。ずっとずっと年上のお姉さんみたい』
「年寄りってこと？」わたしはおどけて云った。「でもわたしなんか何一つすごくないよ。君たちと同じただの女子高生だよ」
『いいえ。五月雨さんは私たちを守ろうとしてくれました。そんなこと普通の人間にできることではないと思います。探偵って……すばらしいものですね』
「そ、そうかなあ？」
『探偵というものに興味が出てきました。あの……私にもなれるでしょうか？』
「うん！　ナズちゃんならきっと……」
　わたしはそこまで云って、ふとそれが間違っているような気がした。
　探偵であり続けることは、けっして楽ではない。むしろ苦悩ばかりで、失うものばかりだ。憧れだけで探偵になっても、必ず挫折する時が来る。もしかしたら命を失う可能性だってある。
　それでも……菜砂のように云ってくれる人がいるから救いになるのかもしれない。
　救いか……

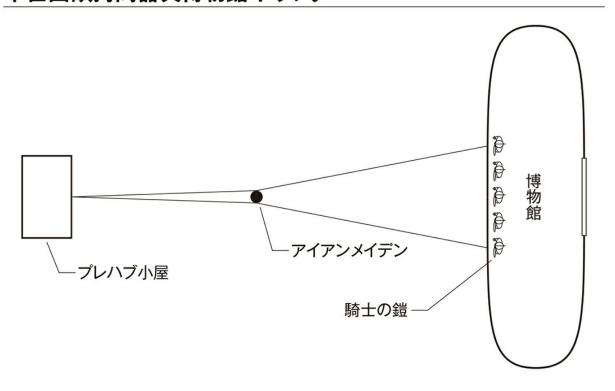
『　世、　　　　　　　　　　　　　　　、　　　　　　　　　　　　　　』

　彼女の言葉が頭の奥でこだましている。
　傷ついた探偵を救えるのは誰なのか――
『五月雨さん。事件が全部片づいたら、また会えますか？』
　菜砂が尋ねる。
「うん、もちろん。あ、そうだ。夏になったら一緒に海に行こうよ」

『いいですね。それまでに痩せておかなきゃ』
　わたしたちはいつとも知れない未来の約束をして、電話を切った。
　十二時三十分。
　本来なら水井山から連絡が入る時間だけど、彼女は今頃警察署にいて、それどころではないだろう。
　そう思っていたら、携帯電話が着信した。
　わたしはおそるおそるボタンを押す。
「はい……？」
『そんなに怖がらなくても大丈夫ですよ』
　水井山だった。
「な、なんでっ？　あなたは警察に捕まったはずです！　まさか脱走したんですか？」
　わたしは立ち上がって叫んでいた。
『いいえ。ここは警察署の中。さっき突然、刑事から携帯電話を渡されたの。どうやら龍造寺氏の差し金みたい。わたくしが捕まった場合、こうするように手配されていたようです』
「わたしと電話で話すように……？」
『ええ。わたくしがあなたに負けた場合、事件に関する情報はすべて開示しろ、という意向でしょうね。さすがフェアなお方ですわね』
　つまり龍造寺はこうなることを見越していたということか。当然ながら、この結果だけではなく、他の結果になった場合の対処も講じてあるのだろう。まったくもって龍造寺の底が見えない。
『龍造寺氏の正しさに、わたくしは従います』
　水井山はまず『BAR「グッドバイ」』の事件について説明した。八鬼が捜査し、水井山がその情報を丸ごと奪い取ろうとした事件だ。
『以上ですわ。ちなみに犯人の洗群三は三十年前に父を亡くしています。その事件を洗ってみると、保険金殺人の疑いがもたれていましたが、容疑者は証拠不十分で不起訴。その容疑者の一人とみられていたのが、被害者の木玉勝実です』
　彼女の捜査は完璧だった。
　彼女ほどの才能が、ランク『7』で埋もれていたということが信じられない。
『あら、どうして黙っているのですか？　五月雨結さん』電話口から聞こえてくる彼女の言葉でわたしは我に返る。『わたくしの情報はどうせ嘘だとお考えですか？　それとも犯罪者とは話したくもない？』
「い、いえ。そうじゃなくて……あなたほどの才能があって、どうしてこんなふうに、人生を棒に振るような

こと……」
『まだわたくしの行動を理解できていないようですね。わたくしは人生を棒に振ったなんて思っていません』
「で、でも！」
『ふふ、今ここで議論するのはやめましょう。お互い、あまり時間がないはずです。わたくしが捜査した「中世西欧拷問器具博物館」の事件についても、話しましょう』
「は、はい」
　水井山が事件の詳細を語る。
　被害者は博物館の裏にあるプレハブ小屋で焼死していた。二つの建物の間には庭があり、その中央に『アイアンメイデン』が立っていたという。しかもその『アイアンメイデン』は頭部のない首なし乙女だった。
『この事件で用いられたトリックを一言で云うと、収 斂火災です』
「しゅうれん火災？」
『ＢＡＲのトリックは古典的な手法を組み合わせたものでしたが、博物館の方もやはり古典的な機械トリックでした。収斂火災というのは、レンズ状の物体によって日光が一点に集中し、物が燃える火災のこと。理科の実験で、虫眼鏡を使って紙を燃やしたことはありませんか？　あれと同じです。収斂火災による自然発火は、条件さえ揃えば何処でも起こり得ます。たとえば軒先に置いたペットボトルでさえ、火事の原因になるのですよ』
「犯人はそれを意図的に発生させたということですか？」
『そうです。太陽光の差し込む向きを計算し、特定の時刻にプレハブ内にあるマッチに光を集め、燃やすのです。これにより犯人はアリバイを確保できます』
「でも……日光を集めるレンズは何処に？」
『それが「アイアンメイデン」ですよ。挑戦状にも書いてあったように、「アイアンメイデン」が凶器として利用されました』
「えっ？　『アイアンメイデン』って、文字通り鉄でできているんじゃないですか？」
『まだわかりませんか？　今回の事件に登場した「アイアンメイデン」の特徴……』
「首なしですか？」
『そう。水平に切断された首。それってちょうど、何かを載せるのに適した形をしていませんか？　たとえばそこに、レンズ状のものが置かれていたとしたらどうでしょう』
「首なし『アイアンメイデン』は、レンズを載せる台座だった……ということですか？」
『その通り。ちなみにレンズとは、おそらく氷の球体だったのではないかと思います。犯人は夜のうちにそ

れを設置して立ち去りました。それから日光をレンズに集めるために、博物館に展示されていた騎士の鎧も利用されていました。おそらく鏡 面 状に磨かれた盾で日光を反射し、「アイアンメイデン」のレンズに集めたのだと思います。騎士もすべて首なしの状態にされていましたが、それは本来の意図から目を逸らすための演出でしょうね』

中世西欧拷問器具博物館 トリック

「氷の球体がレンズになるんですか？」
『当然です。しかも氷なら放っておけば溶け落ちるので、犯人が回収する必要はありません。もしかしたら盾の中には、日光で氷を溶かす役目のものもあったかもしれませんね。少し溶ければ、残った球体は「アイアンメイデン」の胴体の中に落ちて砕けます』
「もし晴れなかったら……？」
『もう一度、翌日に繰り越しです。被害者を再びアルコールで気絶させるという作業が大変ですが、被害者自身はおそらく覚えていないでしょう』
　水井山はすでに犯人の目星もつけていた。被害者の大学に在籍する学生らしい。
「あの……わたしがこんなこと云うのもなんですけど……わたしに情報を渡してもよかったんですか？　水井山さんが捜査を進めたのは、解決するためではなく、先回りして有利な情報を手に入れるためだったんでしょう？　リスクを冒してまで手に入れた情報なのに……」
『それについてはさきほど云いました。わたくしは龍造寺氏の正しさに従うまでです。あなたに情報を渡すことは、結果的に龍造寺氏を追いつめることになってしまいますが……もしかしたらあの方が求める救いとは、むしろそれだったのではないかという迷いが、わたくしの中に生じているのです。答えは……あなたが見つけ出してください』
「……はい」
『とはいえ、まだ決着はついていません。あなたたちに残りの事件を解決できるかしら？　そろそろ十二時四十五分、彼女から電話が来る頃ね。ではそろそろ切ります。もう会うことはないでしょう。さようなら』
　水井山は一方的に電話を切ってしまった。わたしに別れの挨拶を云わせなかったのは、彼女のプライドだろうか。
　十二時四十五分になった。
　霧切のことだから、ぴったりに電話をかけてくるだろう。
　そう思っていたけれど——
　一分過ぎても携帯電話は沈黙したままだった。
　二分、三分と過ぎていった。
　五分が過ぎ、十分が過ぎ、わたしはさまようように食堂を出て、自分の部屋に戻った。
　二十分が過ぎて、わたしはコートを羽織った。
　三十分——
　わたしは寮を飛び出した。

外へ出ると、ちらちらと雪が降っていた。
全速力で走る。雪が頬に当たって痛い。わたしはリュックに腕を通しながら、校門を目指した。
霧切から連絡がない——ということは、彼女はクローズド・サークルに閉じ込められている可能性が高い。あるいは不測の事態に陥っているということだ。いずれにしろ助けが必要なはずだ。今も助けを求めて声を上げているかもしれない……
その時、携帯電話が鳴った。
「もしもしっ？　霧切ちゃん？」
『僕です』
リコだった。
「なんだ……」
『がっかりさせてごめんなさい。報告です。「エキドナ号」の事件は終わりました。犯人は嶋白男、二十九歳、男性。誕生日は八月一日。彼は七年前の強盗事件の生き残りで、被害者はその強盗犯たちでした』
「さすがだね。怪我はない？」
『はい。結さんに云われた通り、指を折ったり、目を潰したりなんかしてませんよ。多少の痣は残るかもしれませんが——』
「いや、それは犯人の話でしょ？　わたしは君が怪我してないか聞いてるの」
『ああ、僕ならかすり傷一つありません』
「そう、よかった。おつかれさま。君には本当に助けられたよ。君がいなかったら、今回のゲームは話にもならなかった」
『礼には及びません。もともと僕は結さんのサポートをするためにいるのですから』
「ううん、ありがとう。それで君は今、何処にいるの？」

「ここですよ」

校門の陰から、リコが姿を見せた。
片腕に上着をかけ、片手で黒い傘をさしている。彼と別れてから数日しか経っていないのに、なんだかとても懐かしい。
彼は両手を広げて、わたしを待ち構える。

「そんなところにいたのか」わたしは彼のもとへ駆け寄った。「そのジェスチャーは何？」
「再会を喜び、抱き合う二人」
「そういうのはいいから」
「約束を忘れてしまったのですか？　僕が無事に帰ったらキスしてくれるって」
「そんな約束したっけ？」
「やっぱり忘れているみたいですね。じゃあ今度に取っておきます。その代わり」
　リコは再び両手を広げる。
「――わかったよ」
　わたしは背中を屈めて彼と抱き合った。何故だかわたしの腕に彼の身体の感触はあまり伝わらず、空気を抱いているような気分がした。ただとても甘くて心地よい香りが、彼がそこにいるということを証明していた。
「はい、終わり」
「柔らかかったです」
「感想を云うな、恥ずかしいから！」わたしはつい大声を出していた。「そんなこと云ってる場合じゃないんだって。霧切ちゃんから連絡が来ないんだ。君、何か知らない？」
「そのことなんですけど……」
「うん」
「響子さんは『双生児能力開発研究所』を犯人と二人きりで、あとにしたようです」
「えっ？」
「その後、犯人の車が崖下で損壊した状態で発見されました。けれど車内に二人の姿はありませんでした。現場近くの川岸には、目撃者とみられる第三者の屍体があり、犯人は目撃者の車を奪って逃走したものとみられます」
「ちょ、ちょっと待ってよ。霧切ちゃんは？　無事なの？」
「おそらく無事でしょう」
「おそらく？」
「はい。見ていたわけではありませんから、憶測です。事故現場には響子さんのものと思しき血痕はありませんでしたし、現在もなお川辺や川下から少女の屍体が上がったという情報はありません。状況から考えて、犯人が響子さんを連れ去ったと考えるべきでしょう」
　連れ去った――
　その言葉に心臓を撃たれたような衝撃を受ける。目の奥がじんじんと痛み出す。ニュースなどでそのフ

レーズを聞くたびに、わたしの心は過去へと引き戻される。誰かが彼女を連れ去った。連れ去った。連れ去った――
「結さん？」
「ああ、うん、大丈夫……」
「すみませんでした。僕がいながら、響子さんをみすみす犯人に連れて行かれてしまうなんて」
　リコは少し背伸びして、わたしを傘の中に入れてくれた。わたしたちの周囲にだけ、雪が降り積もる。
「……君のせいじゃないよ。君は船の上にいたんだし」
「正直に云うと、それはとっくに終わってました」
「えっ？　じゃあ今まで何してたの？」
「ゲームを見守っていました」
「見守ってた？」
「結さんたちが担当する事件と、僕が担当する事件を最初に分けたじゃないですか。それなのに僕が結さんたちの事件にまで手を出すのは、ルール違反かと思って」
「そんなことないよ！　手伝ってくれればよかったのに」
「僕だって本当は手を出したくてうずうずしていたんですよ。謎解きがしたくて……だけど、なんでもかんでも僕が解決していたら、ゲームを見ている人たちがつまらないでしょう？　僕だってつまらないです」
「見ている連中なんか関係ないよ！　つまらないって何？　人の命がかかっているんだよ？」
　わたしは声を荒らげて云う。やはりリコには探偵としての倫理観や正義感など期待できない。一方で、龍造寺のように徹底してそれに向き合っている探偵もいるというのに――
　リコは不思議なものでも見るような顔で、わたしを見返していた。
「……ごめん。君に文句云うのは筋違いだよね」わたしは顔を伏せて、足元を見つめる。「まさか霧切ちゃんがこんなことになるなんて思ってもみなかったから……わたし、どうしたらいいのか……」
「何をすべきかなんて決まっているじゃないですか」
「え？」
「響子さんを助けに行くんでしょう？」
「でも何処に連れて行かれたのか、わたしには見当もつかない」
「今こそ推理する時です。響子さんを連れ去った犯人が何処へ行ったのか、何処に潜伏しているのか、推理してください。結さんは誘拐が専門の『８８』ナンバーでしょう？」
「そんなこと云っても――」
　諦めたらだめだ。

考えるんだ。

霧切は何処か。

霧切が生かされたまま連れ去られたのはなんのためか？

おそらく人質として利用するつもりだろう。ゲームの探偵役、つまりわたしと交渉するためのカードとして彼女を手元に置いておくのだ。

犯人は霧切によって、密室の謎を解き明かされ、告発された可能性が高い。『究極の密室』とやらも、彼女には問題にならなかっただろう。追いつめられた犯人は計画を変更する。人質をとって、わたしにゲームから降りるように脅迫するつもりだ。

犯人があの霧切響子をどのようにして拘束したのかわからないけど……人質という大荷物を抱えている以上、移動には車が必須だ。ほとんどの誘拐犯は車を利用する。特に未成年者が対象の場合、犯行が車の中だけで完結するケースも少なくない。

しかし今回の場合、第三者の車を盗んでいるので、あまり長い時間乗り続けているとも思えない。一刻も早く車を手放し、安全な場所に身を移そうと考えたはずだ。

安全な場所——？

もともと誘拐を目的とした犯行ではないので、特別なアジトというものは存在しないだろう。

では犯人の自宅だろうか？

いや、今回のケースでは捜査側が簡単に自宅を割り出せるので、犯人にとって安全とはいえない。犯人の心理としては、捜査側が思いもつかないような安全な場所を根城にしようと考えるはずだ。

何処かひっそりとした場所にある山小屋とか？

そんなの見つかりっこない……

わたしは携帯電話で時刻を確認する。すでに午後一時を過ぎている。『黒の挑戦』は48時間を過ぎて、まだ残り１１９時間くらいある。

場合によっては、犯人はそれだけの時間を人質と過ごさなければならない。これは単独犯では難しい。人手が必要だ。

犯人としては『安全な場所を確保する』ことと同じくらい、『誰かを頼る』という心理が強く働いたのではないだろうか？

誰を頼る？

わたしが犯人だったら——この状況で頼れる人間は一人しかいない。

龍造寺月下だ！

龍造寺の城——あの場所なら、安全も確保できる。確かリコが捕まえた犯人たちも、そこに一時的に

隔離されていたはずだ。安全性と秘匿性を同時に確保できる場所はそこしかない。
　決着をつける場所としてはふさわしい。
「リコ、もしかしたら霧切ちゃんは……」
「車の用意はできています」
　リコは片手を広げて、校門の前の車道を示した。
　そこには黒塗りの高級車が止めてあった。
　なんて優秀な探偵助手。
「龍造寺さんの城まで急いで！」
「かしこまりました」
　リコは後部座席のドアを開けてわたしをエスコートすると、自分は運転席に乗り込んだ。
「えっ、君が運転するの？」
「安全運転で参ります」
　リコは滑らかに車を発進させる。
　わたしの日常という名の風景は、たちまちバックミラーの中に消えていった。

　龍造寺の探偵事務所に近づくにつれ、雪が強くなってきた。車窓の景色が白く染まる。対向車はヘッドライトを灯し、光の筋の中でぼたん雪が輝いていた。
　龍造寺の私有地を示す煉瓦のアーチの前で、車が止まった。
「どうしたの？　リコ」
「様子がおかしいですね」
　アーチの下に鉄柵が並べてあった。
　わたしとリコは車の外に出て、車が通れるように鉄柵をどかした。一瞬で頭や肩に雪が積もり、わたしたちは雪を払ってから車に戻った。
「普段ならこの道に依頼者がたくさん歩いているのですが、今日は誰もいません」
「嫌な予感がする。急いで、リコ」
　車は並木道を進む。しんしんと降る雪の中で立ち並ぶ枯れ木は、うなだれた死神の行列のように見えて、不気味だった。
　やがてもう一つのアーチにたどり着く。こちらにも鉄柵があり、進むにはやはり一度車を出て、どかさなければならなかった。
　そこから噴水の庭を抜けると、龍造寺の城が見えてくる。灰色の雪空を背景にした城 郭は、何百年

も呪われ続けた廃墟のようにも見えた。ひと気がないせいだろうか。それとも、それこそが本来の姿だったのだろうか……

　大理石のエントランスに車を止める。

　わたしとリコは車を降りて、自動ドアの前に立った。しかしドアは反応しない。それどころか、透明なドアの向こう側に長机やソファなどが積み上げられていた。バリケードだ。

「結さんの推理は当たりだったようですね」

　リコが云った。

「でもなんか変だよ。誰がこんなふうにバリケードを築いたの？　霧切ちゃんを連れ去った犯人？」

「そう考えるのが自然です」

「じゃあ龍造寺さんは？　自分の探偵事務所をこんなふうにされて――」

　わたしたちが自動ドアの前で話をしていると、バリケードの隙間から子供たちがひょこひょこと頭を出して、こちらを窺っていた。龍造寺がここで探偵見習いとして雇っている孤児たちだ。

　目が合うと、慌てて身を隠す。

「あ、ちょっと待って君たち！」

　呼び止める。

　しかし警戒しているのか、姿を見せない。

「僕です、リコルヌです」

　リコがドアの向こうに声をかけた。

　すると子供たちが何人か顔を覗かせた。

「リコ……？」

「そうです。帰ってきました」

「リコだ！」一人の少年が自動ドアに張りつくように顔を寄せる。「大変だよ、リコ。知らないおじさんが来て、地下室の犯人たちを外に出しちゃったんだ！」

　地下室の犯人たち？

　もしかしてリコが事件発生前に捕まえたという犯人たちのことか！

「その知らないおじさんは、女の子を連れていませんでしたか」

　リコが尋ねると、少年は肯いた。

　間違いない、霧切はここにいる。

「犯人たちに命令されて、今こうして入り口を塞いでいるところなんだ」

　別の少年が云った。

「龍造寺は？」
「留守……です」
「留守中に乗っ取られたってこと？」わたしはリコに尋ねる。「ここってそんなにセキュリティ甘いの？」
「龍造寺がいないのでは仕方ありません。子供たちだけでは、人質を取っている犯人を相手に太刀打ちできないと思います」
「そっか……」
「地下室から逃げ出した犯人たちはまだ建物の中にいますか？」
　リコが少年に尋ねる。
「たぶん……みんなでここにロウジョウするって云ってた。ロウジョウって何？」
「しばらくここに居続けるってことですよ」リコはそう説明して、ドアに近づく。「開けてもらえませんか？」
「誰も入れるなって命令されているんだ。命令を破ったら女の子を殺すって」
「そうですか……では開けない方がいいですね」
「ごめんよ、リコ」
　リコはいったんドアから離れて、わたしのところに戻ってきた。
「地下室から逃げ出した犯人は五人。ほぼ全員、戦闘経験もない素人集団なので相手にするのは簡単です。ただ一人、ＤＳＣナンバー『３５５』の探偵がいたので注意が必要です。といっても、殺し屋と比べたら恐れるほどのこともありませんけれどね」
「そいつら、ここにたてこもってどうするつもりなんだろう」
「響子さんを連れ去った堤という男から、取引を持ちかけられたのでしょう。彼が残り五日間、逃げ切るのを助ける代わりに、クリアした際の５億６１００万から分け前をもらう。何もできずに終わった犯人たちにとっては、願ってもない条件です。ストレス発散にもなるでしょうね」
「相手は全部で六人か……」
　しかも霧切を人質に取られている。
　最後にこんな難しい問題に直面するなんて……
「犯人たちが今何処で何をしているかわかりますか？」
　リコが自動ドア越しに少年たちに尋ねる。
「……わからないよ」
「あ、そういえば」他の少年が思い出したように云う。「食事を運ばされていた子がいたんだけど、その子が乗ったエレベーターが五階で止まったんだ」
「五階って、龍造寺さんの部屋がある階じゃなかった？」

尋ねると、リコは肯いた。
「龍造寺の専用階です。何人かはそこにいるとみていいでしょうね」
「リコ」少年が云う。「ここはもうバリケードを作っちゃったけど、裏口はまだだよ」
「情報ありがとう」
　わたしとリコは少年たちに別れを告げ、建物の裏へと回った。
　雪の降る中、わたしはリコに手を引かれながら、英国庭園風の迷路のような庭を駆け抜ける。小さな橋を渡ったり、石のアーチをくぐったり、ちょっとした冒険だった。リコの案内がなければこの庭を通り抜けることはできなかっただろう。
　裏口にたどり着く。裏口といっても、普通の家の玄関のように屋根があり、重厚な木製の扉が設けられていた。扉の上には監視カメラが設置されている。
「ねえ、リコ。カメラがあるんだけど、大丈夫かな」
「カメラなら途中の並木道にもありますし、表のエントランスにもあります」リコはベストのポケットから鍵を取り出して、鍵穴に差し込んだ。「そろそろ僕たちの存在に気づく頃かもしれませんね」
　鍵が回った。裏口の扉が開く。
「鍵を持ってたの？」
「ここで働いてましたからね」
　建物の中に入る。細い廊下だ。裏口の扉を閉めると、雪の降る音も絶たれ、完全な無音となった。
　とりあえず侵入成功だ。リコはまるで猫のように足音を立てずに歩く。わたしも真似して彼のあとに続いた。
　廊下を抜けると、そこは厨房だった。
　リコがわたしに止まるように合図する。角からそっと中を覗くと、若い女性が二人、ガスコンロの前に立っていた。火にかけた鍋を覗いている。料理中だろうか。コーンスープのいいにおいがした。
「僕が右をやります。結さんは左を──」
　リコが小声で云う。
「ちょっと待って、やるって何？」
「制圧です」
「わたしそういうの習ってないから！」
「では僕が一人でやります。手加減できずに殺してしまったらごめんなさい」
　リコは音もなく物陰から飛び出すと、二人の女性の背後に近づき、右手と左手で片方ずつ、それぞれ輪にしたワイヤーを女性の首にかけた。そのあとすぐ、振り向くように身体を反転させ、しゃがみ込み、

自分の肩を支点にしてワイヤーを引く。身体を反転させたことで腕が交差している。それでも引く力は間違いなくワイヤーの先に伝わっているようだ。
　間もなく二人の女性はその場に倒れ込んだ。
　わたしは倒れた女性の傍に駆け寄る。
　二人とも死んでいるように見えた。
「大丈夫なの？」
「頸動 脈を圧迫されたことで失神しているだけです。すぐ気づきますよ」リコはキッチンの上に畳まれていたナプキンを手に取ると、一つをわたしに手渡した。「これで口を封じておいてください」
「あ、うん……」
　わたしはナプキンを紐状にして、女性の口に噛ませるようにして結びつけた。
　そのあとリコが二人の女性をそれぞれワイヤーで縛って拘束した。
「これで残り四人」
　わたしはリコの手際のよさにため息をつくことしかできなかった。
「ほんとに役立たずでごめん……」
「いいえ。それも結さんの魅力ですよ」
「……ありがと」
　わたしたちは広い厨房を抜けて、隣の部屋へ移動する。白いクロスのかけられた丸いテーブルが三つ置かれている。食堂だろうか。
　近くの扉から外に出ようとすると、向こうから誰かが近づいてくる足音がした。
「昼ご飯まだですかあ？」
　間の抜けた男の声がする。
　男は扉を開けて、食堂に入ってきた。
　リコが腕にかけた上着の内側から、長い針のようなものを取り出して、素早く男の目の前に移動した。
「ひっ」
　ぼさぼさ頭の男が悲鳴を上げる。
　リコは針の先端を男の喉元に当てた。よく見るとそれは文房具のコンパスだった。男の目にはおぞましい凶器に見えたことだろう。
「大声を出すな」
「ひっ、は、はい」

「ここで何をしている？」
　リコは冷たい声で尋ねる。
「あの……昼ご飯……」
「堤から何を指示された？」
「侵入者が来ないように見張れって……」
「堤は何処に？」
「ご、五階に、いると思います」
「堤が連れていた女の子は？」
「一緒にいるはずです」
　男はぺらぺらと喋る。たぶん彼は犯罪には向いていないと思う。よくこの気弱さで、『黒の挑戦』に名乗りを上げたものだ。
　リコは一通り情報を得ると、さっきと同じように男を縛って拘束した。
「あと三人。この調子なら日が暮れる前に終わりそうですね」
「そうだといいけど」
　わたしとリコは食堂を出て、廊下を抜け、ようやくエントランスロビーに出た。一流ホテルのような絨毯に、待ち合いソファが並べられている。入り口の自動ドアの前では、さっきの少年たちがせっせとバリケード作りにはげんでいた。彼らはわたしたちの存在に気づかないふりをしている。
　リコがエレベーターのボタンを押す。
　階数表示のライトが５……４……３……と順番に灯っていく。
「ん……？　なんだお前ら」
　気づくとエントランスロビーの方から、くたびれたスーツの男が歩いてきていた。片手にウイスキーのボトルを持っている。顔が赤く、千鳥足だ。
「あ！　お前！　あの時の！」
　男はリコを指差して声を上げる。
　おそらくリコに捕まった犯人の一人だろう。見た目の年齢から考えて、おそらく彼が『３５５』の探偵だ。
「よくも俺の邪魔をしやがって！」
　男はベルトに差していた銃のようなものをこちらに向けた。
　エレベーターが到着し、ドアが開く。
　男が引き金を引いた。
　それは紛れもなく本物の銃だった。

閃光が瞬き、耳をつんざくような音が鳴り響く。
　同時にリコは上着をかけている方の腕をさっと身体の前で払うような仕種をした。
　ガキン、と金属がぶつかり合うような音がして、壁に穴が開く。
　リコは無事だ。
「う、嘘だろっ？　弾丸を弾いた？」
　銃を持った男は呆然としている。
　リコがわたしをエレベーターに向かって突き飛ばした。
　わたしはよろけてエレベーター内に尻もちをつく。
「先に行っててください。あとから必ず追いかけます」
　リコが五階のボタンを押す。
「リコ！」
　ドアが閉まり始める。
「必ずだよ！」
　ドアが閉まり切る直前に、リコがウインクするのが見えた。
　エレベーターが上昇する。
　ドアの向こうから銃声が立て続けに聞こえてきた。
　わたしは怖くなって耳を塞ぐ。
　一人ぼっちになってしまった。
　ここから先は自分だけで戦わなければならない。
　一体どうしたら……
　焦りと緊張で頭が混乱してくる。熱にうかされたような状態で階数表示を眺めていると、エレベーターが突然三階で止まった。
　わたしはゆっくりと立ち上がる。
　――三階？
　誰かが止めた？
　ドアが開く。
　そこに白髪交じりの男性が立っていた。
　手に奇妙なナイフを持っている。先端が水平で、尖っていない。ダイバーズナイフだ。男はダイバーウェアにコートを羽織り、首にはシュノーケルを下げていた。
　なんなんだこいつ……

お互いにそんな表情で見つめ合う。
この城で働いているのはみんな子供だ。だから目の前にいる男は城の人間ではない。犯人の一人だろう。
同時に相手も答えにたどり着いたようだ。
男はわたしを敵とみなし、ナイフを振り上げた。
わたしはとっさに両腕で身を守ろうとする。腕はどうなってもいい。とにかくこの場を乗り切り、霧切のところまで行って、彼女を助け出すのだ。
男がナイフを振り下ろす——
その時、廊下から子供たちの「わーっ」という声が聞こえてきた。左右の廊下から、野球のヘルメットやバットで武装した子供たちが走ってきて、ナイフを持った男に突進した。
男は最初の突進でよろけてナイフを落とした。
それをチャンスとみた子供たちは、武装していない子も集まって男を取り囲み、ぼこぼこに殴り始めた。
「悪いやつ、上にいます。やっつけてきてください！　探偵さん！」
子供の一人がわたしの方を向いて云った。
わたしのことを知っている？
前にここに来た時にわたしを見かけたのかもしれない。
肯いて応える。
エレベーターのドアが閉まり、再び上昇を始めた。

五階で降りる。
長い廊下の先に両開きの扉。
扉に近づくと、自動的に開いた。
うずたかく積まれたファイルと書類の山。雑然と並べられた資料本。知の山脈と、創造の大海原だ。
男はまるでその神聖な場所を侵すように、机の上にあぐらをかいて座っていた。
片手に包丁を持っている。
あれが『双生児能力開発研究所』の犯人、堤だろう。
男のすぐ目の前に車椅子があり、霧切が座っていた。両手両足を縛られ、口にガムテープが貼られている。顔色がひどく悪い。かなりぐったりとした様子だったけれど、彼女はわたしに気づいて目を見開いた。

「お待たせ、霧切ちゃん。迎えに来たよ」
　わたしは車椅子に近づく。
「おい、俺を無視するんじゃない」堤は机の上に立ち上がって、そこからすとんと飛び降りた。「ま、非礼はお互いさまか。それにしてもここまで来るの、早かったな」
　包丁をもてあそびながら笑う。
「彼女を返してもらいます」
　わたしは彼をにらみつけて云う。
「こちらの意図は理解しているね？」
「はい」
「お前の口から聞こうか」
「彼女を返してもらうかわりに、あなたを告発せずに逃がします。それでいいんでしょう？」
　わたしに迷いなどない。
　彼女を返してもらうか、それとも彼女を犠牲にして犯人を告発するか――そんなことは取捨選択にすらならない。答えは最初から決まっている。
　わたしの言葉を聞いて、霧切が必死に首を横に振る。
　何か云おうとしているが、口を封じられているので言葉にならない。
「いやあ、君は賢い」堤は包丁を持ったまま拍手する。「どう考えたって、そうすべきだよな。別にお前は何か失うわけじゃない。むしろ探偵のプライドなんかにこだわって、大切なものを失うなんて馬鹿馬鹿しいだろ」
「悔しいけど……その通りだと思います」
　わたしは云った。
　今までいろんな人たちの力を借りて、命を懸けてやってきたことを全部台無しにするような決断だけど……わたしにとって霧切響子は、それらをすべて放り出してでも守らなければならない存在なのだ。探偵の誇りにこだわって、彼女を失うなんて考えられない。
「結局、俺みたいにゲームの本質を理解した人間が、最後には勝つんだよな」堤はよほど嬉しいのか、にやにやが止まらない。「もう彼女の拘束は解いてもいいよ。ただしこの建物を出るまでは、両腕はそのままな。わかったか？」
「わかりました」
　わたしは霧切の口に貼られているテープをそっと剥がした。
　彼女は泣き出しそうな顔でわたしをじっと見つめる。けれど何も云わなかった。云いたいことはたくさん

あるけど、それらを全部飲み込んで、こらえているような表情だった。彼女の表情がそこまで危うく揺らいだことは今までにない。わたしは彼女の乱れた髪を手櫛ですいてあげた。それから両足を縛っているロープを外した。
「立てる？」
　霧切は肯き、よろよろと車椅子から降りた。
　慌てて彼女を横から支える。
「さて……それじゃあ探偵役がゲームから降りることを伝えに、龍造寺のところに行こうか」
　堤がこちらに包丁を突きつけながら云う。
「行くって……何処へ？」
「一階の開かずの間だよ。ここのガキたちが絶対に開けさせようとしない部屋があるんだ。よっぽど隠したいものがあるんだろう。あいつらにとって隠したいものは、ボスの存在だろ？　所詮ガキだね、わかりやすい。龍造寺は留守じゃなくて、おそらく監視室にいる。ゲームマスターとしてそこで成り行きを見守っているんだろう。さあ、わかったら移動だ。さあ！」
　わたしと霧切は背後から堤にせっつかれながら廊下に出た。
「ゆっくり歩け。逃げようとするなよ」
　堤が部屋を出る。
　わたしたちの背後で、両開きの扉が自動的に閉まった――
　その時。
「僕はこの結末に納得いきません」
　扉の陰からリコが姿を現し、堤のこめかみに銃の先端を向けた。
　堤のにやけ顔が凍りつく。
　一人だけ時間が止まったかのように固まってしまった。
「ハッタリで生きていると、こういう時に何もできないみたいだね」
　リコは妖精みたいな悪戯っぽい笑顔で云う。
「リコ！　無事だったんだね！　死んじゃったかと思ったよ――っていうか君、銃弾を弾くって、もはや人間じゃないよね？」
「別に悪魔でもなんでもないですよ」
　リコが腕にかけた上着を振ると、中から折り畳みスコップが出てきて床に落ちた。スコップの表面に弾痕と思しき窪みが三つできている。
「いや充分悪魔じみてるから」

「ところで犯人役が途中で死んだ場合、ルール的にはどうなるんでしょう？」
「わからないけど……たぶんなかったことになるんじゃない？」
「それなら殺してもよさそうですね」
　リコは銃口の先に目を移す。
「ま、待て、待ってくれ」堤は包丁を足元に置くと、両手を上げた。「そんな曖昧な認識でいいのか？ うっかりルール違反で失格になったら目も当てられないだろ？　一応、龍造寺に確かめた方がいいんじゃないか？」
「殺します」
　リコはまったく聞く耳持たない。
「やめて」わたしはリコを押し留めて云う。「こんなことのために君が罪を被ることないよ」
「ほら、彼女もそう云ってるぞ。とりあえずその銃を下げてくれよ」
　堤は額に冷や汗を浮かべて云う。
「結さん。響子さんの腕の縄を外して、それでこの男を縛ってください」
「あ、うん」
　わたしは霧切のロープをほどいた。
　これで彼女は解放された。やっと助けることができた。わたしは思わず彼女を抱きしめていた。君が探偵であること、君が生きているということ――それはとても尊いことだ。今ならそれがわかる。彼女の魂を絶対に失わせてはいけない。
「堤さん、両腕を出してください」
「縛らなくたって、何もしないって。できるような状況じゃ――」
「早く」
　わたしは云った。
　堤は大人しく両手を合わせるようにしてわたしに突き出す。わたしは手首をきつく縛った。
　リコがようやく銃を下ろす。
「霧切ちゃん、大丈夫？」
「平気よ」
　彼女は頬にかかった髪を払って云う。
「こんな時まで強がらなくてもいいのに」
　わたしが笑って云うと、霧切は少し俯いて、迷うように身体を前後に揺すってから――結局わたしに抱きついてきた。

「ありがとう、結お姉さま」
「最初からそうしていればいいんだよ」
　わたしは彼女の額や頬についた汚れを拭ってあげた。
「響子さん、『双生児能力開発研究所』の事件は？」
　リコが尋ねる。
「解決できてるわ」
　彼女はわたしから離れると、探偵の声で答えた。
「それじゃあ、十二の密室全部クリアだね！」
　わたしは飛び跳ねて云う。
　気づいたら霧切も一緒に飛び跳ねていた。
「いやちょっと待ってよ、俺は？　俺の扱いは？」堤は納得がいかない顔つきで云う。「お前、さっき敗北宣言したじゃないか。それって無効なの？」
「えー……細かいことはいいじゃないですか、別に」
　わたしは抗議する。
「細かくないって。大事なとこだろ、そこ！」
「面倒なので殺しますか？」
　リコが再び堤に銃口を突きつける。
「だめだって」わたしはリコの腕を下ろさせた。「龍造寺さんに報告しに行こう。それでクリアを認めてもらえばいいよ」
「敗北宣言が採用されて、お前らの負けになるかもしれないぞ？」
「その時はその時……いずれにしても、龍造寺さんのところへ行ってゲームを終わらせなきゃ。ねえリコ、一階に開かずの間があるって知ってる？」
「知っていますよ。でもそちらはダミーです。本当に隠したい部屋は――」

　わたしたちはエレベーターに乗り、一階まで移動した。
　エレベーターが一階に着いたところで、リコが階数ボタンを次々に押していく。するといつも乗り降りするドアではなく、背後の壁が突然ドアのようにスライドして開いた。
　白い廊下が真っ直ぐ伸びている。
「龍造寺はおそらくこの先です」
　正面に扉が見える。

いよいよゲームの終わりだ。
わたしたちは廊下に足音を反響させながら、扉の前まで進んだ。
すると扉が自動的に開いた。
そこは白い空間だった。息が白くなるほど空気が冷たい。広いホールのような造りで、窓がない代わりに、正面の壁に鉄格子のはめられた換気扇がゆっくりと回っていた。壁や床に家具や装飾品の類はいっさいない。部屋の中央に白いベッドがあり、その横に小さな棚と、液晶モニタが一つ置かれているだけだった。
ベッドが人の形に膨らんでいる。誰かが寝ているようだ。けれどその人物の顔を見ることはできなかった。
何故なら——顔に白い布がかけられていたからだ。
「う、嘘だろ……？」
堤が真っ先に声を上げた。
わたしも心の中で同じことを云っていた。
嘘だ。
まさかこんな結末……
霧切とリコがベッドに近づく。
リコが白い布を取った。
そこには安らかな死に顔の龍造寺月下がいた。
「彼は死の病に冒されていました。具体的になんの病気なのか最後まで周囲に知らせることはありませんでしたが、病魔が彼の命を着実に削っていることは見て明らかでした」
「リコは……知っていたの？」
「はい。半年も彼の傍にいましたからね。隠していたって気づきます」
そうだ——わたしの目の前でも、何かの薬をたくさん飲んでいた。彼はあの時すでに、死の淵を歩いていたのだ。
これが『安楽椅子伯爵』と呼ばれ、数多くの人々を救ってきた英雄の最期なのか。
こんなところで一人、孤独に死んで——
彼が求めてきたものはなんだったのだろう。
彼は少しでも報われたのだろうか。
「もしかして車椅子を使っていたのも、病気が原因？」
「いえ、足が悪いのは、彼が警察官だった時に犯人から受けた傷の後遺症です」

「警察官だったの？」
「ええ、そのため警察内部には彼を信奉する者が多く、強い影響力を持っていたのです。彼は半身不随になっても現場から離れることはなく、警察官として犯罪と戦い続けたのですが、ある日、刑務所から脱走した犯人によって妻と娘を殺害され、その翌月に警察官をやめてしまいました。犯罪と戦うことに誇りを持っていた男が、あっさりと身を引いたのです」
「それで……そのあと探偵になったの？」
「経歴上はそうなっていますね」
　わたしは改めて龍造寺の横顔を見つめる。
　その安らかな顔は、何を意味しているのだろうか。

『――結』

　彼の言葉を思い出す。
　その言葉は単純に、誰かを救うためには、誰かを犠牲にしてもいいということだと思っていた。けれどふと、彼がもっとも犠牲にしたのは自分自身だったのではないかという考えが、頭をよぎった。水井山はそれを理解していたから、彼を救いたいと思ったのかもしれない。
「亡くなってからまだ間もないわ」
　霧切が遺体を調べながら云う。こんな時でも欠かさず検視をしようとするのは彼女らしい。
「何か手に持っている」
　彼女は布団をはがし、龍造寺の手の中にあるものを確認する。
　リモコンだった。
　霧切はためらわずにボタンを押す。
　すると液晶モニタの電源が入り、映像が再生され始めた。
　映像は龍造寺の部屋で撮影されたもののようだ。背景に雑然とした本棚が見える。
　画面の中央に、車椅子に腰かける龍造寺がいた。
『五月雨結君――』生前の龍造寺がわたしに話しかけてくる。『まず君に謝っておきたい。我輩からゲームを持ちかけておいて、このような結末になったことをお詫びする。申し訳ない』
　龍造寺は頭を下げた。
　わたしはどう受け止めたらいいのかわからず、呆然と見ていることしかできなかった。
『今回のゲームには、君が考えている以上に多くの意味がある。それは多層的に、あるいは並列的に、

もしくは交差し、円環を描き──いずれにしても、君が見たものが、君にとってのすべてだ。君がたどり着いた答えを胸に抱き、これからも探偵として戦い続けてくれたまえ』

　龍造寺はそこでいったん言葉を区切り、重そうな咳をして、再び画面に向き合った。

『君は自らの選択で、我輩とは別の道を進んだ。「君は我輩と同じだ」と以前君に云ったことを覚えているかね？　いまやそれも違う。君の進む道は、我輩の進めなかった道だ。胸を張って進みたまえ。我輩は探偵として君を誇りに思う』

　龍造寺は穏やかな笑みを浮かべた。

　そしてリモコンをこちらに向け、録画を止めようとした。

　しかしふと思い出したように、再び口を開く。

『一つだけ、先輩として君にアドバイスしておこう。君は頭が固すぎるようだ。我輩も人のことは云えないがね。もし君にもっと柔軟性があれば、死なずに済んだ命もあっただろう』

「えっ？」

『──ではそろそろお別れだ。ゲームは君の勝ちだ。人生の最期に、楽しいゲームをありがとう。君の闘争に幸運を──』

　映像はそこで途切れた。

「……ねえ、どういうこと？　霧切ちゃん。もっと早く事件を解決できる方法があったってこと？」

　わたしは動揺して云う。

「そうよ、結お姉さま。最初からヒントはたくさんあったわ。そもそも挑戦状が十二枚という時点で、答えを示しているようなもの……」

「えっ、何？　わからない」

「十二の密室はそれぞれ、十二星座になぞらえられていたの。そして犯人はいずれも、その星座に属している。ここまで云えばわかるわね？　つまり関係者の誕生日を調べて星座を確認すれば、それだけで犯人が誰かわかるようになっていたのよ」

「そ、そんな……」

1月20日～２月18日

所　黄泉水族館

人　朽木嘉永　２月10日生まれ

ーフ　水瓶＝水槽をトリックに使用

月19日～３月20日
所　黄泉水族館
人　朽木乙子　２月25日生まれ
ーフ　水族館＝魚

3月21日～４月19日
所　沢目鬼自然会会館
人　朧 竜虎　４月13日生まれ
ーフ　羊皮紙
羊皮紙は山羊の革も使うがここでは羊

4月20日～５月20日
所　枯尾花学園
人　打田 透　５月５日生まれ
ーフ　ろうそくの魔方陣が牡牛座のシンボルマーク

5月21日～６月21日
所　双生児能力開発研究所
人　堤塔矢　６月12日生まれ
ーフ　双子

月22日～７月22日
所　大望洋館
人　熊野聖果　７月１日生まれ
ーフ　凶器の大バサミ＝蟹

7月23日～８月22日
所　豪華客船『エキドナ号』

人　嶋白男　８月１日生まれ

ドナ＝獅子座の神話に出てくる獅子の母の名前

凶器のキバ＝獅子の牙

8月23日〜９月22日

所　中世西欧拷問器具博物館

人　烏羽刈安　８月30日生まれ

ーフ　鉄の乙女

9月23日〜10月23日

所　リブラ女子学院

人　水井山幸　９月29日生まれ

ーフ　リブラ＝天秤

0月24日〜11月21日

所　BAR『グッドバイ』

人　洗群三　11月１日生まれ

ーフ　カリブドトキシン＝サソリ毒

1月22日〜12月21日

所　武田幽霊屋敷

人　杜若こりす　12月８日生まれ

ーフ　トリックが弓

2月22日〜１月19日

所　音張島

人　梁弘法　12月29日生まれ

ーフ　音楽＝神話の山羊の神パンは葦笛（音楽）を奏でる

「そ、そんな……霧切ちゃんは十二の密室の秘密がわかってたの？」

「途中で気づいたのよ。初日にリコがいきなり五つの事件を解決して、メモを残していったでしょう。そこにわざわざ犯人の誕生日が書いてあった。それでわかったの」
「あ、そうか……リコがいきなり五つも事件を解決できたのは、そういうからくりがあったからなのか。リコは真っ先に十二の密室の秘密に気づいたんだね？」
「はい」
「……だったら、なんで早く云わなかったの？」
　わたしはリコを睨んで云う。
「云ったらゲームが終わってしまうからです」リコは天使のように笑って云う。「そんなに早く終わったら、もったいないでしょう」
「かわいい顔して云うことはなんか変態っぽいんだよなあ……」
「何か云いました？」
「なんでもない」
「おい、俺の誕生日は聞かれてないぞ」
　堤が口を挟む。
　危うく彼の存在を忘れかけていた。
「先に誕生日を聞いたら、判断を誤る可能性がある。だから聞かなかっただけ。最後に答え合わせで聞くつもりだった」
　霧切が云う。
　答え合わせか。確かにそういう使い方もできる。
　それにしても龍造寺月下の恐ろしさを改めて思い知った。一つの物事に二重にも三重にも意味をもたせる。事象は交錯し、真実はより複雑に隠蔽されている。そうかと思えば、ちょっと考え方を変えるだけであっさり真実が見えてくる。
　そのとてつもない才能はもうこの世に存在しない。
「結局、ゲームは終わりってことでいいのかな？」
「さっき龍造寺月下が結お姉さまの勝ちを宣言していたわ。その言葉をありがたくいただきましょう」
　霧切が腰に手を当てて云う。
「おい、待てよ、俺はまだ納得してないぞ」
　堤が縛られた腕を振り回しながら云う。
「あなたね……」
　わたしは呆れて彼に近づく。

『リコルヌ――聞いているか？』

　突然、途切れたはずの映像が再び流れ始めた。
　わたしたちははっと顔を上げてモニタを見つめる。
『いや、御鏡霊と呼ぶべきか。この半年、世話になったな。ありがとう。君の実力は今回のゲームを通して見てみても、もはや明白だ。君ほどの探偵なら、すでに我輩の遺志にも気づいているだろう』
　わたしはリコの方を見た。
　リコは両手を広げて肩を竦める。
『我輩はすでに死を受け入れている。だが一つだけ、心残りがあるのだ。それは我が居 城のことだ。我輩がいなくなれば、ここにいる子供たちは行き場を失う。同時に救いを求めて集まる人々もさまようことになるだろう。そこで君に願いたい。龍造寺の名を継ぎ、この城の主として椅子に座ってはくれないか？』
　龍造寺のまなざしは、画面を通して真っ直ぐにリコに向けられていた。
　リコはいつもと変わらず、何を考えているのかわからない表情で画面を見つめている。
　そうか――
　もしかしたら、それこそが今回のゲームの真の目的だったのではないだろうか。
　探偵としての地位も名誉も手に入れた彼が、唯一手に入れられなかったもの。それは彼の 志 を受け継ぐ後継者だ。今回のゲームには後継者を選定するという目的もあったのかもしれない。もっともわたしなんかではその対象にすらなっていない。だからより正確に云えば――リコ＝御鏡霊を対象にした最終試験だったのだ。
　リコになら椅子に座る資格があるだろう。龍造寺月下以上の探偵になるかもしれない。
　龍造寺の遺言はまだ続きがあった。
『棚の中に二つの封筒を用意した。黒い封筒と、白い封筒だ。白い封筒には、この城のすべてと、龍造寺の名を継承する旨を書いた書類が入っている。こちらを取れば君は城の主となる。一方、黒い封筒には犯罪被害者救済委員会による君への手配書が入っている。要するに委員会にとって、君が敵であることを決定づける書類だ。こちらを取れば君は委員会から敵とみなされる』
　棚の近くに立っていた霧切が、引き出しを開けて、中から二つの封筒を取り出した。龍造寺が映像で見せていたのと同じ、白と黒の二種類の封筒だった。
　霧切は二つの封筒を龍造寺の遺体の上に並べた。

『我輩の遺志はさきほど伝えたが、しかし強制するつもりはない。どちらを選ぶのも君の自由だ。心して選びたまえ。君ほどの探偵が選ぶ道は、この世界そのものを変え得るかもしれない。君の選んだ世界で生きることが叶わないのは残念だよ。では——君の闘争に幸運を』
　龍造寺は死に顔と同じ、すべてをやりきったような顔で録画を止めた。
　リコは二つの封筒を見下ろす。
　白ならこの城と龍造寺の名前——
　黒なら委員会の敵——
「どうするの？　リコ」
　霧切が尋ねる。
「うーん、あの人も面白い問題を最後に残していきましたね……」
　その時、わたしたちの背後でドアが開き、城の子供たちが部屋になだれ込んできた。十人くらいいるだろうか。
　彼らはすでに龍造寺が亡くなったことは知っているのだろう。驚いた様子は見せない。
　彼らがここに来た目的は龍造寺ではなく、リコだった。
「リコ！　ここには君が必要だ」少年の一人が云う。「名前、ほしいんでしょう？　だったら龍造寺先生の名前をもらってよ！　君にふさわしい名前だ！」
「そうだよ、リコ！」
　子供たちの声が重なる。
　リコは彼らの方を見て、封筒へ一歩近づいた。
　本来なら迷うような選択肢ではない。あの龍造寺月下の後継者として認められる機会など、通常では恵まれることもないからだ。地位と名誉、金、土地、そして国家権力における信頼度、すべてどれをとっても最高のものを手にすることができる。差し出された白い封筒を取らない理由があるだろうか。普通の人間であれば——
　リコの場合、少し事情が違うかもしれない。
　彼は探偵として最高のランクを手にしながら、今まで何ものにも縛られずに、ただ自由に謎解きだけを楽しんできた。一つの場所にいて満足できるような人間ではない。
　彼が龍造寺月下の後継を喜んで受け入れるかというと、そうではないだろう。むしろ自由のためには、それすら蹴るのが、彼らしいとも云える。
　かといって黒い封筒を取った場合、自由が保障されるかというとそうでもない。犯罪被害者救済委員会を敵に回すことは確実になり、彼らの追及はより厳しくなる。彼らと戦うのであれば、自由を捨てる覚

悟が必要だ。彼にそれができるのか？
　それならやはり白か——
　いや、やっぱり黒か——
　はたして彼はどちらの封筒を取るのだろう。
　彼は何を取り、何を捨てるのか？
　わたしたちはみんな緊張して彼の選択を見守った。
　ところが……

「はい、そこまで」

　わたしのこめかみに、何か硬いものが押しあてられる。
　堤だった。
　彼は縛られた両手の先に何かを持って、わたしの頭に向けていた。
　手の中に小さな銃が見える。映画とかでよく見るデリンジャー銃というやつだ。
「あの酔っ払い探偵から借りといてよかったよ。腕を後ろ手に縛らなかったのはお前のミスだね。ダメ探偵さん」
　子供たちの中から悲鳴が上がる。
「うるさいぞガキども。今日から俺が、お前らの主だ」
「は？」
「その白い封筒は俺がもらう」
「そ、そんなの通用するわけない！」
　わたしは叫ぶように云った。
「いいや、通用するね。白い封筒を受け取ったやつに権利がある。そうだろ？　俺が龍造寺になって、この城をもらいうける！」
「リコ、撃って」
　霧切が云う。
　しかしリコは首を横に振る。
「実は弾が入ってません。空です」
「ははっ、お前もハッタリだったのか」
「あなたにそれが撃てるのかしら？」

霧切が挑発するように云う。
　すると堤は銃口を彼女に向けて、引き金を引いた。
　わたしのすぐ耳元で火薬が弾ける。
　霧切は左手の甲を押さえて、一瞬うずくまった。
　鮮血が彼女の指先から滴る——
「やめろ！」
　わたしは堤の腕を取ろうとする。
　しかし彼は素早くわたしの背後に回った。彼は両手首を縛られたまま、腕を輪にしてわたしをその中に捕え、片腕でわたしを押さえ込みながら、器用に銃口をこめかみに当てる。
「霧切ちゃんっ」
「大丈夫、傷は深くない」
　彼女は歯を食いしばりながら云った。
「ほんとにあのガキには苛々させられてんだよ。ごちゃごちゃ云ってると、殺すからな。ほら、封筒のところまで歩け」
　堤はわたしを盾にして、ベッドまで移動する。
「余計なことをするなよ」
　堤はリコを見て釘を刺す。
　リコは上着から何か取り出そうとしていたが、動きを止めた。
「いいよ、リコ。何か秘策があるならやって」
　わたしは云う。
「ちょっと二人の距離が近すぎます。もっと離れられませんか？」
「バーカ、そう云われて離れるわけないだろ」堤は云いながら、銃口でわたしを小突く。「おい、白い封筒を取れ」
「嫌だ！」
　わたしは抵抗する。
「お前に拒否権はないんだよ。次に嫌だと云ったら、あっちのガキを撃つかもしれないから、よく考えて発言しろよ。さあ、取れ」
　彼に封筒を渡すしかないのだろうか。
　渡したら本当に、この城と子供たちは彼のものになってしまうのだろうか。
　わからない。

まさかこんな結末なんて……

　どうすればいいのだろう。

「早くしろ！」

　堤は銃床でわたしの顔を殴った。金具で頬の辺りが切れ、血が顎を伝っていくのがわかった。

「三度目はないぞ。さあ、取れ」

　わたしは覚悟を決め、白い封筒に手を伸ばした。

　結局、わたしの負けか——

　耳鳴りがする。

　子供たちの悲鳴が上がった。

　霧切とリコは、二人とも驚いたような顔でこちらを見ていた。

　——何？

　何が起こったの？

　わたしを押さえこんでいた堤の腕から急に力が抜け、わたしに彼の全体重がかかる。耐えられずに身体を屈めると、彼の身体が離れた。

　堤が白い床に横たわる。

　床にたちまち赤い血だまりが広がった。

　堤の額の中央に真っ赤な穴が開いていた。

　わたしはとっさに周囲を見回す。リコは銃を手に持っていない。霧切も左手を押さえたままで、何も持っていない。

　当然ながら子供たちは怯えているだけだ。

　まさか龍造寺？

　いや、龍造寺はずっと前に死んでいる。なんらかの仕掛けで発砲した様子もない。

　では誰が何処から——

「彼だわ」

　霧切が部屋の奥にある換気扇を見て云った。

　幅五センチ程度の鉄格子。

　その向こう側でゆっくりと回る換気扇。

「えっ？　誰？」

「こんな狙撃ができるのは彼しかいない——」
　霧切がそう呟くように云った瞬間。
　換気扇の周囲の壁が、外からの暴力的な圧力によってがらがらと崩れ始めた。壁は瞬く間に崩壊し、白く清潔な部屋に粉塵が舞い始める。同時に、花びらのようなぼたん雪が吹き込んできた。
　そこに姿を現したのは、戦車だった。
　実物を見るのは初めてだ。だからそれが本当に戦車と呼べるものなのかどうかはわからない。けれど少なくとも、その物体は壁に大きく開いた穴から、巨大な砲身を突き出し、キャタピラで瓦礫を乗り越えて室内に入ってきた。
　わたしたちは絶句して、ただそれを見ていることしかできなかった。
　やがて戦車はベッドの手前で止まった。
　車体の上部にあるハッチが開く。
　そこから飛び出してきたのは、喪服と思しきブラックスーツに黒いネクタイをした外国人だった。
　あのワイルドなハンサムは見たことがある。
　いまや探偵図書館に二人しかいない、最高ランクの証である『000（リ）』を持つ探偵の一人——
　彼は戦車から飛び降りると、誰もいない壁に向かって突然サブマシンガンを撃ち始めた。
　子供たちは悲鳴を上げながら耳を塞いでしゃがみ込む。
　やがて閃光と銃声がやむ。立ち上る煙を透かして壁を見ると、そこには弾痕によってこう書かれていた。

『ジョニィ参上』

「どうだい、漢字、うまいだろ」
　ジョニィはサブマシンガンを指でくるくると回すと、最後に頭上後方に放り投げた。
　見事に戦車のハッチの中に落ちる。

DSCナンバー『000』

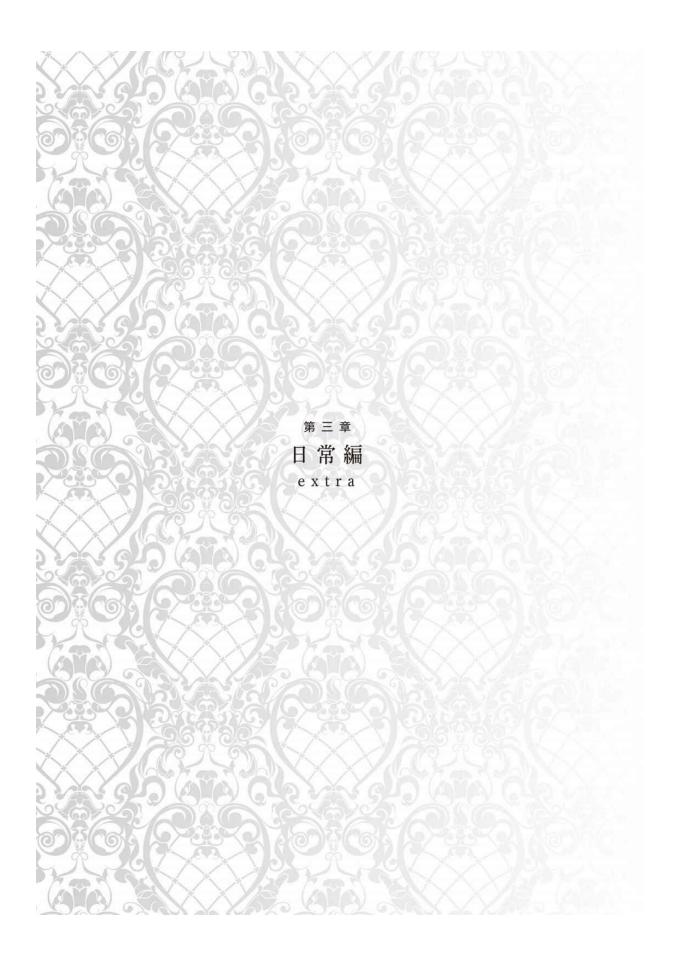
「ルール違反者の処罰完了」
　彼はトランシーバーにそう告げる。
　わたしは目の前の出来事を認識するのに精一杯で、何処からどう処理していったらいいのかさえわか

らなくなっていた。
「Long time no see――キョーコ」ジョニィは霧切に歩み寄ると、強引に手を取って握手し、肩を叩いた。
「すっかり女らしくなったな！」
　霧切はあっけに取られ、口を開けたままジョニィを見上げていた。
「そしてはじめまして、ミカガミ君」ジョニィは指をピストルに見立てて、リコを撃つふりをする。「挨拶ついでに、君に第三の選択肢を持ってきた」
　ジョニィはスーツの内側から、何か取り出して掲げた。
　星を模したようなバッジ。
　保安官バッジだ。
「オレと一緒ならNASAもエリア51も覗き放題だぜ！　さあ、オレについてこい！」
　ジョニィがバッジを放り投げる。
　この人は何を考えているのだろう。
　リコがそうやすやすとついていくわけが――
「ついていく！」
　リコがバッジをキャッチした。
　――今なんて？
「ちょっと待った！」
　わたしは思わず声を上げる。
　止めずにはいられなかった。
「何考えてるの、リコ！　本気なの？」
「ええ」リコは封筒を無視して、戦車に飛び乗った。「白と黒、どちらも全然興奮できそうになくて困っていたんですよね。それよりもずっとこっちの方が楽しそうです」
　リコはバッジを誇らしげに見せて云った。
「わかってるの？　リコ」霧切が険しい顔つきで云う。「私たちと敵対することになるわ」
「響子さんこそわかっていませんね。それが一番の楽しみなんじゃないですか」
　リコはいつもの天使みたいな笑みを浮かべる。
「オーケー、ミカガミ君。いや、リコ？　umm……あまりかっこよくない名前だな。よし、今日から君はドラゴンだ。ドラゴン、戦車の中にあるケースを持ってきてくれ」
「ドラゴンはちょっと……」
「えーっ？　じゃあ何がいい？　ファルコン？　タホドラキー？」

「あとで話し合いましょう」
　リコはそう云って戦車の中に一度消えた。それからすぐに楽器ケースのような大きな鞄を持って外に出てきた。
「オーケー」
　ジョニィは戦車に飛び乗ると、リコからそのケースを受け取って、わたしの足元に向かってそれを投げた。
「キョーコ、ユイ、君たちへのプレゼントだ」
「……プレゼント？」
「探偵がどうとか、後継者がどうとか、ややこしい議論はナシにして、オレと勝負しようぜ。勝った方が正義、それだけの単純なゲームだ」
　ジョニィは左手を腰に当て、右手でわたしを指差す。
　わたしは何も云い出せず、うろたえることしかできなかった。
　また新しいゲームが始まるのか。
「しばらくしたら手紙を送るねー！　それじゃ、See you later」
　ジョニィはハッチの中に引っ込んだ。
「さよなら、結さん、響子さん」
　リコも続けて、戦車に乗り込む。
　嘘でしょ――リコ。
　せっかく仲間になれたと思ったのに。
　彼が敵に回る……
　あの超有能な『ＯＯＯ』の探偵が敵？
　それがどんなに恐ろしいことなのか、わたしには想像さえつかなかった。
　やがて戦車はキャタピラを軋ませ、バックして向きを変えると、あっという間に視界から消えた。
　行ってしまった……
「霧切ちゃん……」わたしは霧切の傍に駆け寄る。「手、大丈夫？」
「平気。それより、あの鞄」
　わたしたちは一緒にケースを開けた。
　中には黒々とした長い銃――スナイパーライフルが入っていた。

第三章

日常編

extra

空港に一人の老人が下り立った。
口の周りに白い髭をたくわえ、細身の身体に紳士然としたスーツを着込んでいる。手にはステッキを持ち、頭には頭頂部の丸いボーラーハット。一見すると、古い時代の英国紳士が現代に迷い込んだかのようだ。
紳士は周囲の光景を懐かしむように眺めながら、タクシー乗り場へ向かった。
やがて一台の黒い車が紳士の前で止まる。
ドアが開き、紳士は後部座席に乗り込んだ。
「どちらまで？」
「適当に出してくれ。この国に帰ってくるのは久々なんでな」
紳士はそう云って、シートに背中を預ける。
車が発進した。
「ところで——面白い顔を作れるようになったじゃないか、新仙」
紳士は運転席の男に向けて云う。
運転席の男はネクタイを緩めながら、肩を竦めた。
「さすがですね。不比等さん」
「私がいない間に、あの純情な坊ちゃんが随分と悪さを覚えたみたいだな」
「その間に貴方は随分と老けたようですね」
「ハッハッ。そりゃあもういい歳だからな」紳士は足元に突いていたステッキを両手に持ち替えた。「それで？　私になんの用だ？」
「貴方の久々の帰国を祝おうと思って」
「ほう？」
「我々とは無関係な密室殺人事件が二週間前に発生しています。数名の探偵が捜査に当たりましたが、依然未解決のまま。もちろん私も真相を知りません。どうです？　どちらが先に解決できるか、競争しませんか？」
「そういうところは変わってないな、お前は」
「もちろん捜査中は休戦を約束します」
「いいだろう。準備運動にはちょうどいいかもしれん」
「脳細胞の方まで老けていないことを期待しますよ」

「云うじゃないか、若造」

「では事件現場までお送りします――」

――to be continued.

星海社FICTIONS
キ1-05
ダンガンロンパ霧切
5
北山猛邦
Kitayama Takekuni
星海社
DIVE INTO THE BOOKREVIEW &INFORMATION!
探偵であり続けることは、けっして楽ではない。
むしろ苦悩ばかりで、失うものばかりだ——
難攻不落の「密室十二宮」、ついに陥落!
探偵たちの屍と裏切りを乗り越えた先に待つ、衝撃の真実——
最強の探偵が仕掛ける最終試験を霧切響子と五月雨結は突破できるのか!?
原作ゲーム「ダンガンロンパ」のシナリオライター・小高和剛からの直々の指名を受け、
「物理の北山」こと本格ミステリーの旗手・北山猛邦が描く
超高校級の霧切響子の過去——。
これぞ"本格×ダンガンロンパ"!!
北山猛邦
Kitayama Takekuni
2002年、『「クロック城」殺人事件』(講談社ノベルス)で第24回メフィスト賞を受賞しデビューする。
代表作として、デビュー作に端を発する『「瑠璃城」殺人事件』(講談社ノベルス)などの一連の〈城〉シリーズや、
『踊るジョーカー』(東京創元社)などの〈名探偵音野順の事件簿〉シリーズ、
『猫柳十一弦の後悔』(講談社ノベルス)などの〈猫柳十一弦〉シリーズがある。
小松崎類
Komatsuzaki Rui
フリーランスデザイナー・イラストレーター。
『ダンガンロンパ』シリーズのキャラクターデザインを担当。
艶にあふれた曲線と着彩で魅力的なキャラクターを描き出す気鋭のイラストレーター。

「お待たせ、霧切ちゃん。迎えに来たよ」
ダンガンロンパ霧切
DANGANRONPA
KIRIGIRI
5
☆星海社FICTIONS
星海社 FICTIONS
キ1-05
Illustration
小松崎類
北山猛邦
©Takekuni Kitayama
©Spike Chunsoft Co. All Rights Reserved. 2017 Printed in Japan
星海社

星海社FICTIONS
キ1-05
ダンガンロンパ霧切
5
北山猛邦
Kitayama Takekuni
星海社
DIVE INTO THE BOOKREVIEW &INFORMATION!
北山猛邦
Kitayama Takekuni
2002年、『『クロック城』殺人事件』（講談社ノベルス）で第24回メフィスト賞を受賞しデビュー。
代表作として、デビュー作に端を発する『『瑠璃城』殺人事件』（講談社ノベルス）などの一連の〈城
『踊るジョーカー』（東京創元社）などの〈名探偵音野順の事件簿シリーズ〉、
『猫柳十一弦の後悔』（講談社ノベルス）などの〈猫柳十一弦シリーズ〉がある。
小松崎 類
Komatsuzaki Rui
フリーランスデザイナー・イラストレーター。
『ダンガンロンパ』シリーズのキャラクターデザインを担当。
艶にあふれた曲線と着彩で魅力的なキャラクターを描き出す気鋭のイラストレーター。
探偵であり続けることは、けっして楽ではない。
むしろ苦悩ばかりで、失うものばかりだ——
難攻不落の「密室十二宮」、ついに陥落!
探偵たちの屍と裏切りを乗り越えた先に待つ、衝撃の真実——
最強の探偵が仕掛ける最終試験を霧切響子と五月雨結は突破できるのか!?
原作ゲーム「ダンガンロンパ」のシナリオライター・小高和剛からの直々の指名を受け、
「物理の北山」こと本格ミステリーの旗手・北山猛邦が描く
超高校級の霧切響子の過去——。
これぞ“本格×ダンガンロンパ”!!
ファン必読の“星海社FICTIONS×『ダンガンロンパ』”シリーズ!
ダンガンロンパ/ゼロ（上）（下）
小高和剛
ダンガンロンパ霧切1〜5 以下続刊
北山猛邦
ダンガンロンパ十神（上）（中）（下）
佐藤友哉
キ1-05

物　物　切

、　年　、

ブッ　イ

子

子

リ　イ

、2017年3月、　-　子
-　、

、リ　、リ　イ 、　ド　、
、

霧切 5

2020年10月1 01

山

. . .

112-0013
1-17-14
4
:// . . .

112-8001
2-12-21
:// . . .

子 、 、 イ
、